
魔法少女リリカルなのは～懺血の守護神（ガーディアン）～

酸欠帝SV

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは^{ガーディアン} 懺血の守護神

【Nコード】

N8493S

【作者名】

酸欠帝SV

【あらすじ】

少年よ、災を狩る刃となれ
！！
平凡な日々を過ごしていた高校生、^{あかつきそらや}紅月綜夜はある日怪物に襲われ、守護神の力を手に入れる！
護りたいモノを護る綜夜の戦いは、やがて巨大な悪との戦いへと変わって行く！！
キャラクター募集やってます、あなたのキャラクターが物語に影響を及ぼすかも……！？

『紅月 綜夜』（前書き）

【WARNING!!】
キャラクター紹介には物語に関する多大なネタバレが含まれていますが、初見さんはなるべく最後まで本編を読んでから見るのが良いと思います。

でも

「A New Hero New NETABARE」

とか

「目覚めろ、そのネタバレ」

とか

「ネタバレしなければ生き残れない！」

とか

「疾走するネタバレ」

とか

「運命のネタバレを掴みとれ！」

とか

「僕らには、ネタバレがある」

とか

「俺が、ネタバレ」

とか

「ネタバレ、参上！」

とか

「ウェイクアップ！ ネットバレの鎖を解き放て！」

とか

「ネタバレ？ 十年早えんだよ」

とか

「僕たちは、二人で一人のネタバレさ」

とか

「俺がネタバレする！」

とか

「青春スイッチオンでネタバレキター！」

みたいな人達は見ても良いと思います、変身！

『紅月 綜夜』

【人物】

名前：紅月あかつき 綜夜そうや

年齢：16歳

身長/体重：172/63

種族：人間/懺血ガイディアンの守護神

出身：地球 日本

所属：懺血ガイディアンの守護神

階級：新米

魔力光：濁った紅

魔力量/魔導師ランク：SSS++/S+

使用術式：超古代式

時空の歪みから現れた怪物に襲われ、重傷を負ったが、続いて現れた少年からロストロギア『懺血の牙』を受け継ぎ、守護神として復活した少年。

やたら勢いが良く、明るく前向きな少年、やるときはやるタイプらしい。

普段は金髪碧眼だが、『懺血の牙』を発動させると髪と目が赤色に変わる。

使用するデバイスは『懺血の牙』によって変質した長剣型デバイス『ブラドエッジ』。

【デバイス】

名前：ブラドエッジ

形式：イレギュラーデバイス

ありふれた長剣型のストレージデバイスが、『懺血の牙』の影響を受けて変質した物。

意志は持たないが、綜夜の意識と連動し、手足のように扱える。あらゆるスペックが高い反面、綜夜にしか扱えない。

『ノーマル』

通常形態。

何の変哲もないアームデバイスの形を取る。

この時点では『懺血の牙』の力は使えない。

『ドライブ』

覚醒形態。

『懺血の牙』の力を解放し、刃は赤く、形状はより攻撃的になる。

『懺血の牙』の力を扱う時の姿。

『フルドライブ』

『懺血の牙』の力を一時的に暴走させた形態。

より凄まじい力を発揮でき、刀身自体が巨大なオーラを纏うようになる。

【ロストロギア】

名前：懺血の牙

種別：融合型

古代遺跡から発掘されたロストロギア。

超々古代時空世界で生み出された物質であり、内臓する魔力は無限と言われている。

これを手にした者は“懺血の守護神”^{ガーディアン}と呼ばれ、無限に近いほどの力と、時空世界の平和を乱す者達との戦いの運命を背負う。

また、これと融合する事で、過去何千何万人という懺血の守護神達

の記憶を受け継ぐ事ができ、それにより今まで戦闘経験のない者でも、百戦錬磨の経験を持った最強の戦士へとなることが出来る。しかし高潔な魂を持たない者は、その恩恵を受けるどころか、牙に宿る防衛機能によって消し飛ばされてしまう。

？『風下 茜』

製作者：赤黒様

【人物】

名前：風下かざした茜あかね

年齢：16歳

身長/体重：158/47

種族：人間

出身：地球 日本

所属：懺血の守護者

階級：従者達の主

魔力光：若草色

魔力量/魔導師ランク：A A A + / C -

使用術式：古代ベルカ

クラスメイトでもある下宿生で、住んでいるアパートは綜夜の近所。元氣と態度が良い活発な少女で、面倒見が良く、敬語を使って喋る。見た目よりもかなり根性があり、さらに周囲の環境が変わってもすぐ馴染んでしまうタフな一面も持ち合わせている。

鳴海町出身で、父が著名なブランドメーカー会社の社長、母はさらに著名な服のデザイナー、つまりとても良いところのご令嬢。一人暮らしのマンションもかなり高額な場所で、その中でもさらに高い部屋に住んでいる。

成績優秀のメガネが似合うベタな少女、運動音痴がついてさらにベタさが倍率ドン、料理下手もついてさらにさらにベタさが倍率ドドン！！

なぜか“魔の者を従える”事に長けているが、現在理由は不明である。

【デバイス】

名前：イクサリオン

形式：イレギュラーデバイス

管理局にロストログア指定された、古代ベルカ文明のデバイス。自立した意志と魔力を持った純白の鎧で、高い戦闘力を持つ。

局員の不手際で起動し、逃走するも追われ、自身で転移する能力を使用、そして偶然茜の家に転移してしまった。

茜を殺されてしまった自身の過去のマスターと誤認し、彼女を守るために鎧型の使い魔を生み出しては魔導師を襲わせていた張本人。茜からは白と呼ばれている。

待機モードはミニチュア化して茜の肩に載る。

使用する剣は『エクスカリバー』と呼ばれる出自不明の長剣。

高い魔力を持つ白い刃の剣で、超高熱の魔力で敵を焼き切る太陽の剣である。

『ガード』

基本的な防衛形態。マスターの周辺を離れず追従し、障害があれば取り除き、命令にも従う。

『アクティブ』

迎撃形態。マスターの許可が降りた時、もしくは緊急時に発動。リミッターを解除し、フルドライブでマスターの敵を殲滅する。

名前：ミカエル・F・ヴァイス

ファウスト

形式：オートマタデバイス

茜の持っていたカード内に記録されたデータを元に、茜の持つ“何か”の力とイクサリオンの魔力で完成した機械の獣。

白を基調としたカラーリングで、体は大きく、人間サイズなら二、三人は余裕で乗れるほど。

しかし巨体の割に温厚で、人懐っこい性格をしており、「優しくて力持ち」を地で行っている。

その巨軀から生み出される圧倒的なパワーと重量は、移動するだけで並大抵の敵を粉碎してしまうほど。

さらに機動力も高く、まさに動く白い要塞といったところか。

主兵装は全身に纏う強力なバリアで、敵の攻撃を全く受け付けない。またそのバリアを砲弾として打ち出す事も可能である。

名前：サタン・C・シュバルツ クマウン

形式：オートマタデバイス

ミカエルと同じく、茜とイクサリオンによって生み出された機械の獣。

黒を基調としたカラーリングで、ミカエルと比べれば体は小さいが、それでも一人なら余裕で乗れるサイズ。

クールでそうそう他人に尻尾を振らない性格だが、意外と面倒見が良く、何だかんだで熱い性格のツンデレである。

スマートな体はしなやかで素早く動く事を得意とし、トリッキーかつスピーディな戦闘を得意としている。

機動力はミカエル以上だが、反面防御力は薄い。

しかし攻撃力はかなり高く、あらゆる部位から展開される無数の刃は、敵を微塵に切り裂く。

遠距離攻撃の手段を持たないが、それでも十二分に戦える獣戦士。

『寿祝』

制作者：勇住邁進様

【人物】

名前：寿祝じゆきほらじ

年齢：15歳

身長/体重：167/52

種族：人間

出身：地球 日本

所属：懺血の守護者

階級：求道者

魔力光：赤銅

魔力量/魔導師ランク：S+/AA

使用術式：ミッド式

紅月綜夜と同じく、私立聖詳大付属高校に通う一年生

灰色の長い髪に赤銅色の双眸、褐色の肌が特徴的。

黒縁眼鏡をかけており、剣道部の部員である。

性格は寡黙で、基本的には誰とも会話しないため、友人も少ないが男子生徒達のターゲットの一人。両親は既に他界し現在は一人暮らしをしている

出自不明のインテリジェントデバイス所持している。
高速戦闘を好み、魔力変換は“凍結”。

【デバイス】

名前：???

部類：???

出自不明のデバイスで、待機時の姿は赤銅色の丸い宝石が付いたチヨーカー。

曲刀の形を取り、鋭い切れ味と共に敵の攻撃を受け流すことを得意としている。

男性型のAIで、性格はとても丁寧な紳士風。

祝を導き、異世界にて剣の修業を受けさせていた、目的は謎。

『シングル』

一本の曲刀の形をとる基本形態。

得意とするのは氷の刃で斬りかかる「氷翠烈刃」ひすいれつじん

『ツイン』

二本の曲刀の形をとる強撃形態。

手数や攻撃力はシングルよりも優れるが、若干防御力が落ちる。

無数の斬撃破を放つ乱舞「氷牙千刃」ひがせんじんを得意とする。

また双方の形態でもある程度の砲撃魔法を使用する事が可能。

「フリージングブレイカー」がその最大の威力を持つ。

？『ラング』

製作者：勇往邁進様

原作：魔法少女リリカルなのはA・S×ファンタシースターポ
ーダブル2 時と空を駆ける戦士

【人物】

名前：ラング

年齢：？

身長/体重：182/99

種族：キャスト（機械種族）

出身：グラール

所属：民間軍事会社『リトルウイング』/懺血の守護者

階級：稼ぎ頭/まとめ役

魔力光：？

魔力量/魔導師ランク：？/？

使用術式：？

黒髪の短髪に、機械的な色を宿した翡翠の目を持つ。

見た目は人間そのものだが、機械の種族“キャスト”であり、高い
身体能力と頑丈な体を持っている。

口数はやや少なく、クールな性格……らしいが案外感情豊かで、顔
に思っていることがすぐ出るタイプ。

手先が器用で、機械の扱いに長けている。

グラールを滅亡の危機から救った経験を持つ英雄だが、あまり有名
ではないようだ。

地球での騒動を解決し、グラールに戻って二年たったある日、仕事
へ行っている間、同僚たちのバカンスに置いてけぼりにされ、呆然

としているところに「穴」が開き、再び異世界に飛ばされてしまった。

【デバイス】

名前：クラッドRR - ?

種類：ストレージデバイス

地球から帰った後、ラングがこっそり自作したデバイス。

両腕についたディスプレイ型のデバイスで、多くの武器をデータ化する事で携行する能力を持っている。

これを使用しラングは全ての種類の武器を、高速かつ迅速に切り替えて臨機応変に闘うスタイルを得意としている。

ちなみにRRは“rapid remake”の略で、より早くデータ化した武器を処理できるようにしたタイプ。

?はこのクラッドRRが二作目である事を示す、ちなみに?は同僚の少年に壊された。

まだ他にも機能があるらしいが……? ?

？『南雲 海』

製作者：空風様

【人物】

名前：南雲^{なくも}海^{かい}

年齢：19歳

身長/体重：174/58

種族：人間

出身：地球 日本 東京

所属：時空管理局空挺派遣調査部隊『ハウンドイーグル』

階級：二等空佐、調査官

魔力光：蒼穹

魔力量/魔導師ランク：S+/S-

使用術式：ミッド式

黒髪のショートに鋭い茶色の瞳をした一匹狼。

年の割には諦観したような、冷めた性格をしている。

しかし時にはつい熱くなってしまいう一面も見られる。

仕事には忠実だが“組織”という物が嫌いで単独戦闘を好む。

趣味はタバコと昼寝で一人称は俺。

かつて有名な反管理局組織『ワールフズ』に所属していた孤児。

キースによってワールフズを壊滅させられた後、キリカにその実力を認められ、管理局に入る。

セリアとはパートナーであり、深い信頼関係で結ばれているようだ。

【デバイス】

名前：ノートウング

形式：インテリジェントデバイス

両刃の大剣型デバイス。通常の“大剣型”と中距離用の“砲撃型”を使い分けることによって、様々な場面で使えるよう調整された万能武器。

本来なら重すぎてそうは扱えないのだが、海はこれを軽々と振り回す高速戦闘を得意としている。

カードリッジシステムを搭載した新型機で、待機状態はライターになり、AIは男性。

『スラツシュ』

大剣形態。

その重量に物を言わせた一撃で敵を叩き斬る。

ちなみにこの形態からでも砲撃が可能という“欠陥”が存在する。

『ブラスト』

砲撃形態。

中距離射撃を得意とする形態で、広範囲への攻撃も可能としている。敵陣に穴を開ける事も可能。

？『セリア・ヒューミリアス』

製作者：空風様

【人物】

名前：セリア・ヒューミリアス

年齢：19歳

身長/体重：168 / Secret

種族：人間

出身：ミッドチルダ西部

所属：時空管理局空挺派遣調査部隊『ハウンドイーグル』

階級：三等空陸佐、調査官

魔力光：白銀

魔力量/魔導師ランク：AAA - / AAA +

使用術式：ミッド式

薄いブロンドのポニーテール、碧眼の瞳を持つ。
スタイルはフェイト以下なのは以上といった所。
面倒見が良い姉御肌的な気質を持ち、基本的に真面目。
だが意外にも心配性で気苦労が絶えない。

海とパートナーを組み、彼のストッパー的存在。
他の部員からは『女房役』とからかわれているが、満更でもない
ようだ。

彼の過去を知る数少ない人物の一人で、海の事をパートナーとして
も、女性としても強く思っている。

海の恩人、ウルフとは何かしらの関係があるようだが……。

【デバイス】

名前：アリア

形式：インテリジェントデバイス

大型のスナイパーライフル型デバイス。

一発の威力では劣るも、その最大射程と命中精度はなのは以上。

しかし武器の特性上連射不可であり、さらに小回りが絶望的に効かないのが欠点。

カードリッジシステムを搭載した新型機で、待機状態は腕時計となり、AIは女性型の思考をしている。

セリアの事を呼ぶときは「御主人様^{ミイナス}」と特徴的な呼び方をするが、これは本人の趣味らしい。

『スナイプ』

通常の形態。

特徴はほとんどないが、状況に合わせて様々な種類の弾丸魔法^{バレットスキル}を使い分けることが出来る。

『Lレンジ』

広範囲攻撃用形態。

砲口がやや巨大化し、広範囲の敵を殲滅するための弾丸を放てるようになる。

代償としてやや命中精度が低下するが、セリアの腕前から百発百中を誇る。

【レアスキル】

名前：デリート・アイ

種別：魔眼

あらゆる視覚的な情報媒体から、自分の姿や魔力反応などを消す能力を持つ魔眼。

ただし魔力消費が大きく、体力の消費もかなり凄まじいため、長時間の使用は危険。

『ファルティスIIザIIレッドラム』

製作者：ストーム二号様

原作：ド・ド・ド・ド・ドミナント！

【人物】

名前：ファルティスIIザIIレッドラム

年齢：外見19歳（稼働歴8年）

身長／体重：184／何者かによってデータ閲覧不可

種族：第三世代ドミナント奇襲型

出身：？

所属：ネームレス・ワングズ／災禍の記載者

階級：切り込み隊長

ジエネレータ出力：SSS

戦闘技能ランク：SSS - （空、海戦においてはEまで下がる）

術式：無し

緑色の膝までとどく癖毛のロングヘアと赤いツリ目を持つ女性型ドミナント。

身長は高くスタイルも良い。

さらにそのグラマラスなボディラインが露わになるような、ぴっちりとした戦闘スーツに身を包んでいる（一応上には軽量のジャケツトを羽織ってはいるが……）。

性格は見た目に反し明るく活発で子どものように無邪気。

それと関係してか思考レベルはかなり低く、難しい事を深く考えるのは苦手。

反面、五感はかなり敏感で、第六勘の冴えは獣のそれとも呼べるほど。

戦闘を行う事と食人行為カニバリズムを好み、強い敵と戦いそれを食すことを至高としている。

平行世界で反管理局組織『ネームレス・ワングズ』に所属し、その戦いの最中にこの世界に飛ばされた。

能天気な性格ゆえか元の世界への執着は少なく、今を生きていることを楽しんでいようだ。

【リンクス】

名前：ビーストファンゲ

形式：近接戦闘用リンクス

剣のような柄とつばを持つが、刃の先端は鎌のようになってるのが特徴のファルティス専用リンクス。

柄頭の部分は鎖に変形、最大で50メートルまで伸びる。

“空間固定”パソナルスキルの固有能力を持ち、空中に固定させることができる。

これによって振り子のような移動をしたり、相手を空中に張付けたりすることが可能。

“リンクス”とは平行世界に存在する特殊鉱石“メタトロン鉱石”を薄い六角形の板に加工し、それに武装のデータを入力して造られた、ドミナント達の標準装備。

通常の間人が使う武器とは比べものにならないほどの威力を持ち、さらに特殊な固有能力パソナルスキルを有する強力な兵器である。

感情の状態による武器の能力補正が存在し、精神が高ければ威力が増加、不安定になれば威力は減退する。

人間にも使用出来るが、精神汚染の危険性が高いため、滅多に使用されない。

『キース・デイジィ』

制作者：勇住邁進様

【人物】

名前：キース・デイジィ

年齢：38

身長/体重：179/62

種族：人間/災禍の執行者

出身：管理世界

所属：災禍の記載者

階級：殺戮者

魔力光：黒

魔力量/魔導師ランク：SS+/SS+

使用術式：亜古代ベルカ式

金髪に灰藤色の双眸を持つが、普段はフードを深く被り、その表情は全く伺えない。
無口で無表情な死人のような性格をしており、熱くなる事はほとんどない。

過去に家族や友人を目の前で亡くし、絶望に沈む中、目の前に現れた禁断のロストロギア“災禍の台帳”を以って、悲劇の過去を変えするため、数多の命を食い荒らす災禍の使者となった。
かつて反管理局組織“ワールフズ”に所属していた南雲 海にとつては、恩師と仲間達を奪い去った悪魔である。

【デバイス】

名前：ヴァン・ヘルシング

形式：アームドデバイス

銃大剣型のデバイスで、全距離での戦闘に対応している高性能機。黒を基調に血のような赤色をした殺戮兵器。

待機時の姿はルビーのような真紅の宝石が付いた懐中時計。

AIの性格は理知的にして合理的、口調は常に丁寧語。

バリアジャケットの形状は服の上に纏うフード付きのマントのみだが、服も強化されている。

『ブレイド』

斬殺形態。

凶悪な攻撃力を誇る殺戮の刃であり、魔力を込めることによりさらに破壊力と攻撃範囲が増す。

必殺の魔法は特大の魔力斬撃“ヘル・ザッパー”。

純粹な殺意が込められた殺戮の刃が、相手を確実な死へ誘う。

『ブレイズ』

爆殺形態。

全距離に対応した射撃、砲撃を放つことが可能。

しかしその中でも中距離砲撃に長けており、その攻撃力は下手な艦載砲よりも凄まじいと言われる。

必殺の魔砲は大火力砲撃“グラン・スレイブ”。

無垢な殺意の秘められた殺戮の闇が、相手を絶対の死へ誘う。

【ロストロギア】

名前：災禍の台帳

種別：融合ノデバイス型

SS級のロストロギアで、赤い書物のような外見をしている。

“闇の書”同様、破壊・改竄を加えても即座に修復する“無限再生

機能”と本体の消滅や所有者の死亡をトリガーにして新たな主たる資質を持つ者の下に転移再生する“転生機能”を有している。

108の白紙のページが存在し、“人間の命”を食らうことでページが埋まる。

全てのページを埋めると、あらゆる時間と世界の理、因果律を曲げ、所有者の願いを叶える事が可能。

しかし願いを叶えた後、最期の対価としてその所有者の命を喰らい、再び新たな所有者の元へ旅立つ。

より強い命を喰らう事で、より多くのページが埋まる。

現在埋まっているのは30ページほど。

懺血の守護神達との因縁も深い“災”の一つ。

『ゼロ・エルグランド』

製作者：龍神様

原作：新魔法少女リリカルなのは Strikers

【人物】

名前：ゼロ・エルグランド

年齢：17歳

性別：男

種族：古代ベルカ人

出身：古代ベルカ「聖王の王国」

所属：？

階級：？

魔力光：紅色

魔力量／魔導師ランク：？/SS

魔法術式：古代ベルカ式

髪型は長髪の黒色、青く鋭い瞳をしており、やや女性のような顔立ちをしている。

少々荒っぽい性格をしているが、優しさもっており、ツンデレの素質がある。

古代ベルカの聖王が治める王国出身の青年で、聖王オリヴィエ直属の守護騎士に属していた。

武術の腕を含め、オリヴィエからは信頼されており、霸王クラウドとの面識もある。

だが、大戦中に自ら死地に赴くオリヴィエを止めようとした際に、彼を生かそうとしたオリヴィエ配下の魔導師の手により、氷結魔法『ヘイムダル』で永き眠りにつくことになる。

そして数百年が経ったある日……氷が解けたことをきっかけに、彼の新たな物語が始まる。

【デバイス】

名前：テイルフィンゲ

形式：古代ベルカ式インテリジェントアームデバイス

基本は両刃剣の長剣の形を取る、古代ベルカの技術で作られたデバイス。

カードリッジシステムを搭載しており、形状はボルトアクション式、カードリッジは最大6発まで装填できる。

柄が二重構造になっており、装填の際は柄の中に入っているカードリッジ補給口を伸長して露出、弾丸を補給した後、柄の中に移動して装填となる。

待機フォルムは翠色の球体ペンダント（なのはのRH待機フォルムの翠色ver）。

騎士甲冑は黒い装束に左肩には黒いシールドと胸部を守るためにプロテクターを付けたもので、左腕にはとあるレアスキルを制御するために黒い布を被せている。

“ブレイドスレイブ”と呼ばれる一対多勢力用の補助ビットも搭載されている。

六機から成る刃型のビットで、制御はすべてテイルフィンゲのAIが行っている。

それぞれ『モノ』『ツイ』『トリ』『テトラ』『ペンタ』『ヘキサ』と名前がついている。

シールドとしての使用も可能。

『ファーストフォルム』

テイルフィンゲの通常形態、形状は両刃の長剣。

この形態でも大体の機能は使用可能である。

【レアスキル】

名前：ブラッド・イグツニション

ゼロ自身の“フルドライブモード”。

本来の戦闘能力・魔力を限界を超えて大きく上昇させる事ができるが、無制限には使用できず、3分間しかこの力を維持できない。ちなみに使用時には瞳が紅く染まる。

『キリカ・イズル』

製作者：omegazer様

【人物】

名前：キリカ・イズル

年齢：20歳（?）

身長/体重：181/70

種族：人間（?）

出身：不明

所属：時空管理局本局空挺派遣調査部隊『ハウンドイーグル』

階級：大佐、隊長

魔力光：濁った蒼

魔力量/魔導師ランク：SSS+/SS+

使用術式：ミッド式

亚麻色の長髪に、青色の深い瞳。

管理局の執務官で、名の知れた凄腕の剣士でもある。

紳士的な性格をしており、騎士道精神を強く持った理想の戦士。

多方面に顔が効き、さらに人望もとても厚く、将来を約束された超有望な男である。

しかし、それは表向きだけの話であり『英雄になる』という謎めいた夢のため、様々な人や物を容赦なく利用、犠牲にする冷酷で残忍な本性がその笑顔の裏には隠れている。

出身、経歴が一切不明である。

【デバイス】

名前：シルバー

形式：剣型ストレージ

イズルが使用する長剣型のストレージデバイス。
見目麗しい聖剣のような見た目をしているが、実は数多の罪なき人々の血を啜ってきた銀の邪剣である。

かなり化け物染みだ性能を持つ超高性能機であり、このデバイスを見た専門家は“改修無しで後十世代分は戦える”と言うほど。
使い手のキリカと同じく、出自が不明。

『ノーマル』

通常形態。

特にこれと言った能力や機能はないが、圧倒的な攻撃力とキリカの剣技を以ってあらゆる敵を無残に切り刻む。

『フルドライブ』

解放形態。

銀色の輝きを放ち、全ての能力が一定時間アップする。その美しい輝きを見る者を魅了するが、彼の本性を知っている者にとっては、これ以上の邪悪な輝きは無いだろう。

『ブルーム』

暴虐形態。

キリカの内面の邪悪さを表したかのような邪悪な形状となる、シルバーの最恐形態。

特にこれといった特殊能力は無いが、素のスペックが恐ろしいまでに強化されている。

閑話『優しい一匹オオカミ』

ぷかぁ、と煙が月が顔を見せる夜空へ上がって行き、そして霧散して消える。

煙を上げたのは、一匹狼のような鋭く尖った目をした男が吸う煙草の煙だ。

男 南雲海

なくもかい

は久しぶりに静かな気持で煙草を吸っていた。

「ふう……」

海の現在の服装は、本人からしてみれば懐かしい浴衣姿だ。

十数年前、魔法と出会い、ほどなくして魔法世界へ旅立った彼にとつては、幼いころに亡き両親に手を取られて行った縁日で着た以来の浴衣であった。

海は久々の故郷の空を見上げても、さほど揺れない己の心に、皮肉めいた笑みを浮かべた。

「老けちまったかな、俺も……」

ふう、と煙を上げる。

煙草が短くなってきたので、灰皿に突っ込み火を消して、また新たな煙草をパックから取り出す。

そしてライターを懐から取り出して、火をつけ、再び煙草をふかす。

「それにしても……セリアの奴も何考えてんだ。こんな時期に温泉だなんて」

そう、現在海がいるのは鳴海の温泉旅館なのだ。

管理局でペアを組んでいる同僚、セリア・ヒューミアスに無理矢理につれてこられた彼は、温泉でなく部屋のシャワーで湯あみを済ませて、セリアが戻り、晚餐の時間になるまでこうして煙草をふかしているのだった。

ちなみに、温泉旅館にいるのは海とセリアだけでなく。

「南雲さん、いますか？」

幼きエース、高町なのはも、今こうして温泉旅館にいたのだった。またアリサやずずか、フェイトサやはやて以下ヴォルケンリッター達も現在温泉旅館にいる。

そう、皆が皆セリアに引つ張り出されてきたのだ。

その大義はセリア曰く「同じ事件を追うんだし、裸の付き合いで親睦を深めなきゃ！あと、あんなことがあった後だし、ネ？」らしい。

「あ？　なんか用か？」

「あ、えと……隣の部屋で皆集まってるから、南雲さんもどうかな……って」

半開きの状態のドアからひよっこり顔を出して、窓によりかかっている海に向かってなのは声をかける。

振り向いた海の目つきが怖かったのか、なのははどもりながら要件を伝える。

海はまだ長い煙草を灰皿に押し付けて、なのはの方を改めてみた。

「……」

「あ、あの……」

こうしてみるとなのは普通の少女だと、海は思う。
幼くして二つの大事件に関わり、解決に大きく関わったとは思えないほどの、ただの女の子だと。
無垢な瞳は、どこまでも潤い、未来を希望のまなざしで見つめているのだろう。

昔の、自分のように。

「……俺は行かねえ。ガキのお遊びに付きあってられっか、セリアに頼みな」

「そ、そうですか……分かりました」

なのは少しシユンとするが、まだ新しい煙草の消された煙が上がる灰皿を見て、微笑みを取り戻した。
そして。

「南雲さん、優しいんですね」

とだけ言い残すと、部屋から去って行った。

ボタン、とドアが閉まり、海は再び部屋に一人になる。

海はというと、意表を突かれた様子で閉まったドアを見つめていた。そして三十秒ほど呆然としていたときに、再びドアが開いて、風呂上がりらしく顔を火照らせたセリアが部屋に入ってきた。

「ふう〜、気持ちよかったあ〜。やっぱり本場の温泉は違うわね〜！ ……ってどうしたの、海？」

セリアはいつになく気の抜けた様子の海に、疑問を投げかけた。

「……なんでもねえ。それよりガキ達が隣の部屋に呼んでるらしいぜ」

「あら、そう？　じゃあ行くところかしら、海も行く？」

「さっき断ったばかりだ」

「ふふ、でしょうね」

そしてセリアはチラリ、と灰皿を見て、頬を綻ばせた。

「じゃあ行ってくるわ“優しい一匹オオカミさん”」

「テメツ……！」

海が吠えようとするが、すでにセリアは部屋から出て行ってしまっていた。

がくん、と肩を落とすが、気を取り直して海は新しく煙草を取り出して火を点けた。

そして再び空に向かって煙を吐いて、一人呟く。

「優しくなんてあるかよ……優しくなんか……よ」

浮かぶおぼろげな月、それを見上げながら、海は思いを馳せた。

今は遠き、駆けぬけた幼き日々と、今は亡き、かつての戦友とも

達を。

閑話『血塗られた男』

夕暮れ、太陽の沈む静かな時。

しかし、それでもその場所はあまりにも静かすぎた。

ことごとく破壊され、蹂躪された民家。

一面が血の海と化した小さな人里　廃村と呼ぶに相応しいか。

そんな廃墟と化した……いや廃墟にされた村の中に、男はいた。

誰もいない、いや、一文字に切り裂かれた無残な死体が、男を出迎えていた。

男は木の椅子に座って、赤い本を広げていた。

「十ページ……足りんな。まだ」

古びた血の匂いと色の染み付いた、殺戮の色をしたフードをかぶったその男は、手に持った赤い本をパタンと閉じ、傍らに置く。

コトン、と死体には不要になった水の入ったキャッチャーを手に取り、コップに注ぎ、飲む。

その光景はあまりにも不自然だった。

野獣が暴れまわったかのような凄惨な現場。

血は至る所に飛散し、人間だったものの破片すら散らばっていると
いう有様。

そんな一切の理性が暴虐で塗りつぶされてしまったかのような中で、
男の行動はあまりにも理知的で理性的だった。

不意に男が立ち上がる。

そして部屋の奥にある扉に向かって声をかけた。

「……済んだか？」

男は奥の部屋にいる“ソレ”に声をかける。

キイ、と血に塗られた扉が開くと、女が姿を現した。

「うん“美味しかった”よ！」

くつきりとボディラインの出るボディースーツ。

赤い色のツリ目、ひざ裏まで届く新緑のクセ毛。

ファルティス「ザ」レッドラム、ラングと戦っていた謎に包まれた女。

ファルティスは口元に新鮮な血を滴らせながら、とても上機嫌な様子だ。

扉の向こうには、元は人間だった、ただの肉塊がベットのの上に転がっていた。

「……なら、行くぞ。次の目的地は……」

「管理局所属の研究施設、でしょ？」

ファルティスの子供のような無邪気な瞳に、狂喜の色が浮かぶ。

男はその光に目を細めると、何も言わずに民家から出て行くこととする。

ファルティスは口元を拭いながら、急いでその後を追った。

「あ、待ってよ、キース！」

男の名はキース・デイジイ。

綜夜達とは違う旅人の物語は、既に始まっていたのだ。

閑話『牙の記憶“戒め”』

この記憶は、戒め

焼ける、焼ける、焼け落ちる。

人が築き上げた物、自然が作りし物 全てが、燃え尽き消えてゆく。

老いも若きも、夢も野心も、友情も不仲も、昨日も今日も等しく消えてゆく。

まさにこの世の地獄、一つの世界の終焉を、いま彼女は目の前にしていた。

血のような紅き髪、瞳 彼女は懺血の守護神ガーディアンであったモノだ。

しかし虚ろな怒りと絶望と切望が混じった、憎しみの焰をどろどろとマグマのように燃やす彼女の瞳には、今や守護神の誇りも理想も責務も、何も無かった。

ただ燃やす、ただ消し去る、ただ。
今や、彼女こそが狩られるべき“災”であった。

「ノーザ！ やめろ！」

堕ちた守護神の前に、災禍を逃れた“殺し手”アサシンが舞い降りる。
殺し手は必死に守護神 ノーザに呼びかける。

「こんな事をして何になるって言うんだ、ノーザ！！」

「うるさい……私は、私のやりたいことをやっているだけ、邪魔しないで」

「何言ってるんだ!! お前は守護神ガーディアンだろ!? 皆を守るんじゃないのかよ!!」

「もう 意味ない、そんなの、意味ない!!」

ノーザが紅く燃える蛇腹剣を振るう。

殺し手は障壁でそれを防ぐが、大きく吹き飛ばされる。

「あの人がない世界なんて …!!」

ノーザは絶叫しながら、蛇腹剣を無造作に振り回す。
一振りごとにあらゆるものが崩れ、破壊されて行く。

殺し手は姿勢を立て直すと、果敢にノーザへ飛び掛かり、振り回される蛇腹剣を止める。

「お前はアイツがこんな事を望むと思っているのか!？」

「う……ぐう……!!」

ノーザの瞳に涙が浮かぶ、不安定で、暴走している感情の表れだった。

守護神であっても、やはり幼い少女の心はまだ未発達だったのだ。

「こんな事をしたって、アイツは …!!」

殺し手は必死に呼びかける。

しかし。

「お前の愛したアイツは　　！！」

（　　分かってるよ、そんな事はもうとっくの昔に！！　だから言うな　　言わないで！！）

「帰ってこないんだぞ！！」

その言葉を聞いたとき、ノーザの中で何かが弾けた。

「ああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」

歪められた守護神の力が、世界を焼いていた災の焔を全てノーザに飲み込ませる。

世界を滅亡させる力が、ノーザの体を焼き、焦がし、蹂躪し、その姿を変える。

救えなかった、守れなかった。

他の全ては救えたのに、たった一人を、救えなかった　　。

どうして？　私は強いのに、守護神なのに。

どうして？　私は世界を救ったのに、災を狩ったのに。

その姿は大きく、醜く、燃え上がる龍のように長く、世界を巻き付けていた。
もはやその姿は守護神では無い、憎しみに囚われた魔神が、今ここに誕生した。

「ノーザ……」

殺し手は、絶望した表情で、変わり果てたノーザを見る。
しかし今一度顔を上げると、殺し手は閃光の刃を抜いた。
魔神が咆哮する。

殺し手は祈りのように呟いて、魔神へと向かって行った。

「神よ 全てを見守りし、我らが神よ」

その債務を果たすため、涙をその目に溜めて。

「どうか哀れな迷い仔に 優しき断罪^{ひかり}を ！」

閑話『序章・流星』（前書き）

リハビリがてらに今度登場予定のキャラのプロローグを書いてみた。

閑話『序章・流星』

古代ベルカ、大戦場。

爆音が響き、轟雷が唸る。

かつてあった猛りし騎士たちの世界は、今暴走した一つの揺り籠によって滅亡の危機に瀕していた。

その禁忌の破壊兵器を止めようと、今こそ聖王オリヴィエは数人の腹心と を加え最後の戦場へ 死地へ赴かんとしていた。

「聖王!!!」

そんな彼の気高き女王の元へ、一人の若き騎士が駆け寄ってくる。

「何故ですか聖王ッ！ あなたが行かなくとも……!!!」

若き黒髪の騎士は、その顔を悲哀でぐしゃぐしゃにしながら悲痛な叫びをあげる。

聖王は彼の元まで歩み寄ると、そつとその長い黒髪を撫でた。

「私は王、今はただ、民と世界を守るその債務を果たすのみ……。それにあの禁断の揺り籠は、私にしか止められぬのです」

「しかし……しかし……!!!」

若き騎士は聖王の手を取り、涙を流す。

「あなたが死んでしまったなら……俺は 俺は何を……何を目的に生きれば……!!!」

「……………」

聖王はその言葉を聞き、少し悲しそうな顔をしてうつむく。
配下の年長の聖騎士^{バウンティン}達も、押し黙ってしまふ。

それほど聖王という存在はこの若き騎士にとって いや、すべての騎士にとって掛け替えのない存在だったのだ。
爆音が響き、大地が轟と揺れる。

「…………ごめんなさい　それでも私は行かなくては……愚かな主君を、許してください」

聖王は若き騎士に背を向けて、去りゆこうとする。

「お、オリヴィエー！　駄目だ！　俺が行く！　俺の“腕”の力を使えばあんなガラクタ…………ツ！！」

若き騎士はそれでもその背中に手を伸ばした。

その命を消させぬように、その思い出を悲しき終わりにさせぬように、全てを消し去る左腕　黒い骸布の纏われたその腕を伸ばす。
しかし、オリヴィエーが目配せをする。

その傍らにいた、騎士では無い男がコクンと頷き、その手に握られた杖を若き騎士に向ける。

「！？」

瞬間、光が若き騎士を包む。

若き騎士は、自らの動きが鈍っていることを感じた。

否　凍り初めているのだ、足元から。

「こ……これは……!?!」

若き騎士は困惑した表情でつぶやく。
聖王は、背を向けたまま言葉を紡ぐ。

「その腕を使えば、確かに揺り籠は止められます」

「な、ならッ……!?!」

「ですが、それだけの力を使えば、あなたは確実に死に至ってしま
う……」

「そんな……君だって……!」

「あなたは若く、そして強く、勇敢です。私は、そんなあなたに生
きてほしい。私の思い出、私と……沢山の友達思い出を持って……」

「オリヴィエ……!」

「私達の子供達に出会ったなら、きっと伝えてね。騎士の誇りと、
その誇りを持って戦った祖先達の、気高き魂を　そして守って、
誰かの笑顔を　」

「分かった　伝える……守るよ！　絶対！！　だから……！　だ
から……!?!」

「さようなら、ゼロ　私の、大切なともだち　」

「オリヴィエエエエエエエエエエエエエエエエエッ!?!」

聖王、オリヴィエの涙交じりの笑顔を見たのを最後に、流星の騎士と呼ばれた騎士“ゼロ・エルグランド”は、永き眠りにつくのだった。

閑話『冥府の王朝へ』

時空管理局 無数に散らばる時空世界の中心たる、巨大にして強大な組織。

そんな組織の中で様々な思想、思惑、野望が、一つの世界と同様に蠢いている。

その中では白と黒、相反する二つの性質、いわゆる“正義”と“悪”と言ったような物が、コインの裏表のように隣接していた。

この男は、少なくとも、そのうちの“白”に属していた。

「ったく、なんだっててんだいきなり！」

とある管理局の支部施設が、爆音と共に粉塵をまき散らしながら大きく揺れる。

何者かによる突然の襲撃で、屠殺直前の雄鶏のようにけたましく鳴り響くアラート。

緊急事態の真っ只中、ある一人の管理局員 ラグラス・ウィンガルは悪態をつきながら廊下を走っていた。

ドゴオン！！

また施設全体が揺れる。

「うおおっ?!」

急な衝撃にラグラスはバランスを崩し転倒した。

どうやらここを襲撃した敵は相当の質か量を持っているらしい、とラグラスは推測する。

(だがこんな場所を襲撃するのに何の意味がある?! ロストロギアの管理は別の)

ドオオ！！

ラグラスの考えは、次なる衝撃によって遮られた。先ほどよりも激しい衝撃が施設を襲い、一部がガラガラと音を立てて崩れ行く。

「うわあああああ？！」

ラグラスは壁に叩き付けられ、姿勢を崩す。

衝撃によってビキビキと音を立てて、向かい側の壁が崩落する。

「……って……滅茶苦茶しゃがる……！！！」

ラグラスはボロボロになった壁を支えに、なんとか立ち上がる。

体は痛むがまだ動けないレベルの負傷では無い。

それを確認し終えてから、ラグラスは向こう側の壁に、何か異質な物があるという事に気が付く。

崩れ落ち、半分以上崩壊した廊下の中に有って、その異質は傷一つついていなかったのだ。

まるでこんな事態を、予想していたかのような、その“扉”は重く硬く閉ざされ、中にある禁忌を覆い隠す蓋のようだった。

「これは……」

ラグラスはずっとこの支部で働いていたが、こんな物の存在は知らなかった。

緊急事態のアラームが遠く聞こえるほどに、気付けばラグラスはその扉に惹かれて行った。

扉の隣にはコンソールがあり、どうやら開閉の管理を行っているようだった。

だが、それは先の襲撃によって破壊され、誤作動を起こしたらしい。バチバチと火花を散らしながら、コンソールはそのモニターにだらしなく“UNLOCK”の文字を浮かべている。ラグラスは恐る恐る、禁断の箱を開く神話の女性のように扉に手を掛けた。

「クソ……化け物め」

暗がりの部屋の中で、管理局の制服に身を包んだ壮年の男が、苦虫を噛み潰したかのような顔で呟いた。

その視線の先には、鋭い金と銀の双眼を持つ青年が、静かに佇んでいた。

青年は右腕に装着された装甲型のデバイスを男に向ける。

「潔く認めろ、貴様の負けだ」

「負け……？ 負けと言ったか……？」

青年が告げる。

しかし男はニヤリと口端を上げ、自分の傍らに存在する機械のレバーに手を掛けた。

「甘んだよガキ、まだだ……まだ終わってすらいねえ！」

ガチャン、と重たい音を上げながらレバーが降ろされる。

男の後ろに存在する巨大なポッドのような物が、大きな音を立てて

一方で、ラグラスは己が目を疑っていた。

「なんだよ　これ」

バチバチと消えそうな照明に照らされた部屋の至る所には、生体用のポッドが設置されていた。
それだけならまだしも、そのポッドの中には、紛れもない“人間”が入っていたのだ。

「しかもこの人たちは……」

ラグラスは培養液に満たされた生体ポッドの中に浮く人間を見て、より一層顔を蒼くした。

「“行方不明の届け出が出ていた人”じゃあないかッ!!」

そう　ポッドの中で生きているのか、死んでいるのかすら分からない人々は全て、ラグラスが務めるこの管理局支部に行方不明者として登録、捜査されていた人々だったのである。

ラグラスは、考えるよりも早く、この忌々しいポッドの中から、人々を解放しようとする方法を模索する。

しかし、コントロール系統がどこにあるか分からない。
そもそも、あったとしてラグラス本人に動かせるかどうかの保障も無かった。

「くそッ……くそッ……どうしてこんな……!!」

ラグラスは、やりきれない気持ちでポッドの壁を叩いた。

そのポッドの中に入っている少女は、ラグラスが懸命に捜査をしていた人物なのだ。

彼女だけでなくこのポッドの中にいる様々な人物の捜査を、ラグラスは住民たちからの依頼を受けて行っていた。
涙を流して頼まれたこともあった、何時まで経っても発見できない事に悩み、自分で涙を流したこともあった。

それが、その涙の原因は全て、そう、謎の答えは全て最初から。

「ここにあつたんだ……！！ くっそおおおお！！」

ガン！ と一際強くラグラスはポッドのガラスを叩く。
それと同時に。

『○○○○○○○○○○○○○○○○！！！！』

「?!!」

聞いたことのない絶叫が、施設全体を揺らした。
ラグラスは驚き、その絶叫が聞こえた方へ首を向ける。

「隊長……！！」

「ラグラス・ウィンガルか……」

その場には男 この施設の長がいた。
ラグラスはすかさず吠える。

「どういう事だ……どういう事なんだッ、これはッ！！」

「フン、前々から青臭いとは思っていたが……ここまでとはな」

「何……?!」

「教えてやろう、ラグラス・ウィンガル三等空尉。ここはな“ODW”……“オーガニックメンジョンウエポン”の研究所だ、もつとも、機能は停止しているがな」

「ODW……?!」

「これの事だ」

隊長の男がパチンと指を鳴らす。

すると、暗闇の中から小さな猿のような、顔のパーツが完全に欠如している怪物が現れた。

ラグラスは、その怪物の醜悪さに、思わず身じろぎをした。

「ッ!?!」

「可愛い物だろう? こいつらはな、個体レベルで次元跳躍が可能で、戦闘力もそこらの魔導師より高い……」

男は傍らに現れたその怪物を撫でながら、口端を上げる。

「そ、そいつらを作って、何をする気だ!! テロでも起こす気が……!?!」

「テロ……? ふ、クククク……やはり青臭いな、ガキめ……」

男はラグラスをあざけり笑う。

「金儲けだよ、何かと入用だろう？」

「な……？！」

「そうだ、これが必要なヤツがいるらしくてな、設計図を渡してきた。その通りに作って、渡したらかなりの金になった、管理局の給料なんざ比べものにならんくらいにな！」

男はケタケタと下品な笑いを上げる。

同時に男の周囲にいた怪物達も、声にならない声を上げて、反応する。

ラグラスは歯を食いしばりながら、己の体の中が次第に怒りで熱くなってゆくを感じた。

「そんなことのために……っ……！」

「ん？」

「そんなことのために、アンタは……！」

ラグラスは怒りの感情のままに、二丁拳銃型のデバイスを起動させ、その銃口を男に向けた。

「おいおい、ヒーロー気取りか？ お前も所詮“こつち側”の人間だよ、認めちまえて」

「黙れエエツ……！」

ラグラスは振り切れた怒りのままにトリガーを引く。

放たれた弾丸は、真っ直ぐに男の眉間を貫くかと思われたが、男を

守るかのように怪物がそれを打ち落とす。

男はあざ笑うかのような目でラグラスを一介すると、ただ一言怪物達に。

「やれ」

と命じた。

『GYAGYAGYAGYA!!』

怪物達がラグラスの想像を超える速さで迫る。

ラグラスは怪物達に向かって弾丸を乱射するが、どれ一つとして当たらない、掠りもしない。

飛び上がった怪物の一体が、ラグラスに殴りかかる。

「あぐつ!!」

避けきれず、まともにその拳を喰らったラグラスは吹き飛び、生体ポッドに衝突した。

「あ……」

その衝撃で生体ポッドのガラスが割れ、培養液と共に、中に入っていたあの少女をこぼした。

「速くとどめを刺してやれ。ああいうヤツは、どうせまともに世渡りではできんだろっしな」

男がそういうと、怪物達が一齐にラグラスに飛び掛かる。

その爪が、腕が、ラグラスの肉体をばらばらに引きちぎるかに思え

「く……そ……！！！」

終わるのか、この外道に騙されたまま、何も救えず終わってしまうのか。

弟の、仇すら討てず。

「じゃあ、死んじま」

男はラグラスの死を確信してその引鉄を引こうとした。

が、その引鉄が完全に引かれることはなかった。

「ぐおお！？」

鈍い衝撃音と同時に、男の体が大きく吹き飛び、壁に激突する。ラグラスは唾然として、男を殴り飛ばした人物の背中を見ていた。

「き……さま……！！！」

「あのODWは倒した」

「馬鹿な……！！」

青年は驚愕する男に向かって、構えをとる。

周囲の大气が震え、青年が装備している装甲に、藍色の光が纏われていく。

「や……やめろ……！！ やめてくれ、金ならいくらでも」

「悪いな、金には興味が無い」

「やめ　　！！」

男の悪あがきを、青年は簡単に弾き返すと、男に向かってとどめの一撃を放った。

藍色の光弾が、男を討つ！

ドオオ！！

閃光が走り、男の意識は途絶えた。

「…………ふう、終わったか…………」

青年は男が気絶したのを確認すると、後ろを振り向いた。そこには、呆然と立ち尽くすラグラスの姿があった。

「あ、あんたは…………一体…………？」

「俺は、この施設を破壊しに来ました。正確には、この研究施設を」

「…………ここに閉じ込められている人は…………無事なのか…………？」

「一応生きてはいます、研究材料にされて衰弱はしているけど」

「そうか…………良かった…………」

淡々と喋るこの不思議な青年から、人々の無事を聞くと、ラグラスはホッと肩から力を抜いた。

確かに、微かではあるが、ラグラスの隣の少女は気を失ってはいるが、息をしていた、生きているのだ。

「頼む…………家に帰してやってくれ、帰りを待ってる人が沢山いるん

だ」

「そのために来ましたから、大丈夫です」

ラグラスは青年の言葉に、もう一度安堵する。

ラグラスの心に掛かった靄が、一気に晴れて行く、同時に全身を覆っていた緊張も消える。

「ああ……そうか……なら……安心だな……」

情けないほどに安心しきった表情で、ラグラスは一気に襲い掛かって来た疲労と眠気に、意識を手放した。
青年は、気を失ったラグラスを見ると、彼自身もまた安堵した表情となり、誰かに向けて連絡を飛ばした。

「終わったよ。うん、これから転送する。それからもう一人……」

青年は、ラグラスを再度見て、連絡先の誰かに向かって、嬉しそうにこう告げた。

「仲間になってくれそうな人が、いたよ」

ラグラス・ウインガル、彼の新たな物語が、幕を開けようとしていた。

閑話『絶氷／火焰』

暗雲立ち込める、とある無人の世界。
露出した暗い岩肌を、氷が包んでいる。

絶対零度を越えたの極寒の風があらゆる物を凍りつかせ、冷たい死をまき散らしながら、暗い世界を抱きしめている。

海すらもその風の前には、朝靄の中で凍りつく、地べたの水たまりと何ら変わりは無かった。

氷像と化した津波の上で、一人の女が立つ。

風は、その女から発せられていた。

女は美しい顔立ちをしており、“絶世の美女”と言っても差し支えないほどだ。

しかし彼女は、異様な風貌をしていた。

極寒の中心にあつて、女の体を覆う服の 布の面積はお世辞にも多いとは言えなかったのだ。

フュギアスケートの選手のような服装でありながら、刺激的すぎるほどに面積の少ないそれは、水着のようにも見えた。

布に覆われていない露出した肌は、みずみずしく白雪のように美しく、見る者を魅了するだろう。

豊満な胸、括れた腰、張りの良い尻……。

それら全てを惜しげも無く見せつけ、かつ見せまいと焦らすような服。

その容貌は、まさしく妖女 伝説に謳われる夢魔

サキュバス

のようでもあった。

女は、徐にその片手を眼前に掲げた。

その手には、サファイアのような青い輝きを放つ、妖艶なる宝石のついた指輪が嵌められていた。

「……」

女はあらゆる物を見下したような瞳で、その掲げた手の先にいる、ある人物に向けて魔法を放った。

しかし、それは魔法と呼ぶに足らず、いささか強すぎた。

凍りついた海が隆起し、蠢き、轟音と砕ける音を経て、まるで一匹のうねる蛇の如く動き出したのだ！

一言で形容するならば“氷山の津波” 神の所業の如きそれは、対象を押し潰さんと、勢いよく進撃する！

「……！！」

対象となった男が両手を交差させる。

その両手を中心として、男の周囲に、炎が集まってくる。

「おおおおおおおっ！！」

男が怒号を上げた。

その瞬間、男に集った炎は唸りを上げて、男を包んだ！

怒号に応えるかのように、勢いを上げてゆくその火焰は燃え上がり、男を巨大な灼熱の龍と変化させた！

『オオオオオオオオオオオオ！！』

灼熱の龍が吼える！

咆哮に呼応して龍の体を纏う炎の強さは次第に強さを増す！

まるで男自体が、一つの恒星と化したかのように、熱く眩く輝いて

そして龍は、氷山の津波と激突した

！

ゲン！ 色仕掛けにや乗らねえ！」

「そう、なら」

女は男　ゲンの答えを聞くと、口元の笑みを冷笑に変えて、掌に息を吹きかけた。

ヒュオオオオオ！

女の吐息は雹混じりの突風となって、ゲンを襲う！

「そんな小細工！！」

ゲンは己の怒気を火焰に変え、それに対抗する！
女が放つ氷の風を、ゲンの焰が溶かして行く。

氷は溶け、水となり、それすら限界を知らないゲンの火焰によってすぐさま蒸散する。

そうして出来上がった蒸気に、周囲は瞬く間に包まれていく。
濃い霧となった蒸気は、ゲンの視界から女を隠した。

「さよならよ。また会いましょう“アグニ”」

「ッ！ 待ちやがれ！ 逃げる気が！！」

ゲンが霧を振り払う、女の姿はもう見えなくなっていた、転移したのだ。
最初からこれが狙いだったか　ゲンは気に食わなさそうに腕を組んだ。

『ゲンちゃん、大丈夫？』

グローブから先ほどとは別の、優しそうな女の心配する声が聞こえ

た。

「おうよ！ ……だがすまねえ、逃げられちゃったぜ」

『良いのよ、そう簡単に捕まえられるような相手じゃないわ』

ボリボリと申し訳なさそうな表情で謝罪するゲンに、グローブは穏やかに答えた。

「……よし、行くぞアグニ！ アイツは……“シヴァ”は止めなきやなんねえ！」

ゲンは少し息を付くと、すぐに歩き出した、先ほどの女を追うのだ。アグニと呼ばれたグローブは、短くそれに応えようと、火焰の魔法陣をゲンの目の前に出現させる。

ゲンはそれをくぐると同時に、無人の世界から姿を消した。謎めいた出会いの予感を、胸に携えて。

閑話『ある管理局員の話』

「配属初日にコレかあ……参っちゃうよ、ホント」

ざく、ざく、ざく。

木々が鬱蒼と生い茂った森の中を、管理局の制服に身を包んだ青年が歩く。

彼の名は『ジーク・ザ・グレイズ』、管理局の中でも優秀な部類に入る魔導師の一人だ。

彼はとある事情から、人員が減ってしまった部隊『ハウンドイーグル』に配属された。

そして今こうしてボヤキながら森の中を散策しているのが、彼の配属先での初任務というわけである。

「とことんツいてないよなあ……」

ガサガサと草木をかき分けながら、ジークはまたぼやいた。

ハウンドイーグルに異動させられたのは、昇進したというわけでもないし、左遷されたというわけでもない。

ただ、自分の所属していた部隊の本拠が、何者かによって壊滅させられてしまったため、やむなくここに配属させられることになったわけである。

ここまでは別にいい……。

いや、たった二人の襲撃で壊滅させられたと言う事実を無視しても、職場が破壊される、というのは無視してよい項目ではないのだが。

おまけに、最近、管理局全体で、不穏な噂が流れている。

氷漬けになった海を見たとか、燃えながら生きている人間を見たとか、古代ベルカの英雄が蘇ったとか、不気味な怪物が現れては消えを繰り返すだとか。

ジークはそんな根も葉もないうわさは信じていなかったが、そう何
度もうわさされると、気味悪く感じてしまう。

ともかく、ハウンドイーグルなる部隊の居心地は、ジークと言
う青年にとっては、いささか居心地が良い物では無かったのだ。

他の部隊員達は見当たらないし、薄ら笑いを浮かべる隊長はどこか
らどう見ても自分よりも年下だし。

その隊長の腹心に見える少女は可憐ではあったが、どこか不気味な
雰囲気醸し出していたし。

何よりも部隊全体に覆いかぶさっている、殺気に似た不気味な空気
が、ジークには耐えがたい物なのであった。

「ふう、このあたりで少し休憩しようかな」

草木が生い茂っていない森の一角を見つけると、ジークはふうと一
息ついてそこにある岩に座り込んだ。

ジークは管理局の制服に身を包んではいたが、その手足は鋼鉄の武
装で包まれていた。

『閣下

マスター

、職務怠慢ですよ』

その左足の装甲に付いた、群青色をした球体のコアが光って声を上
げた。

女の声だった。

ジークは長い間連れ添った相棒に、軽く笑って答えた。

「大丈夫さノルン。仕事で重要なのは、現場の判断なんだから」

『はあ、そうでございませうか』

「ちなみに、目的地まであとのぐらいいだい？」

『残り 三十分ほどかと。依然として強力なエネルギー反応があります』

ジークは『ノルン』と言う名の相棒の報告を、携帯食料をかじりながら聞いた。

彼に課せられた任務はこの「謎の強力なエネルギー減」について調べることであった。

ロストロギアかもしれない。

そして何より、そのエネルギーの状態が不安定である、という事で、わざわざジークはこの非管理局世界の辺境まで飛ばされたのだ。

「ノルンはこのエネルギー反応、何だと思う？」

『H m m m m……エネルギー量だけで言うならば、やはりロストロギアかと』

「だよね」

『しかし……』

ノルンが口ごもる。

「しかし？」

『この量のエネルギーが今まで見過ごされてきた、と言うのにはあまりに不自然です。最悪、封印か何かを解かれて、暴走直前になっている代物かもしれません』

「それって、かなり危ないんじゃない？」

『危険極まりないですね。自殺と同意でしょう』

「はあ……ホントに参っちゃうよ」

ジークはまるで自分の首が断頭台にでもかけられているかのように錯覚する。

まだ死ぬ覚悟だなんてできちゃいないし、するつもりもない。

少なくとも結婚するまでは、だ。

溜息をつきながら水筒に口をつけるジークに、ノルンは追い打ちをかけるかのように。

『この部隊の殉職率は高いようですよ』

「ぶっ」

と言った。

そんなこと聞いてないやい。

げぼげぼとむせながら思わずジークは悲鳴を上げそうになるが、じつところらえる。

まあ確かに、こんな炎の中に羽虫を突っ込ませるような、無理難題を押し付けてくる部隊だ。

殉職する可能性が高いのも納得できる。

ジークは再三溜息をつくど、岩から立ち上がって進み始めた。

(死んだならそこまでいい)

と、半ばやけくそになりながら、だった。

しばらく進んだ後、ジグはようやく反応のすぐ近くまでたどり着いた。
エネルギー反応がある場所は、どうやら洞窟かほら穴かの中のような
である。

「おあつらえ向き、って奴かな？」

『私はもう少し豪華な物を想像しましたが、遺跡とか』

「勘弁してよ」

緊張するジグをよそに、ノルンは軽口を叩く。

彼女が機械ゆえの冷静さだったのか、それとも単なる意地悪かは、
この際置いておく。

ともかくジグは相棒のノリの軽さに、一種の安堵感を覚えつつ、
洞窟へと近づいて行った。

その時である。

『閣下

マスター

』！

「ッ！」

ノルンの叫び声とほぼ同時に、ジグは突き刺すような後ろ蹴りを

放っていた！

ツパン！！

『GYAAAAA...!!』

破裂するような音と共に、その後ろ蹴りは突然の襲撃者にヒットしていた！

大きく吹き飛ばされた、その顔の無い猿のような怪物は、悲鳴を上げながら大きく吹き飛ぶ。

ジグはさつと構えをとりながら体の向きを変える。

だが、気づいたときには既に。

「囲まれてるみたいだね」

『ですね』

がさがさと、周囲の木々のあちらこちらから、ヒリヒリと敵意を感じる。

先ほど蹴り飛ばした化け物の仲間だろう。

それにしても気味が悪い奴らだ。

ジグはピクリとも動かなくなった、最初の化け物を見てそう思った。

原生物だろうか、と推測するが、答える者は無い。

とにかく、今は自分の身を守るのが最優先だろう。

『GYAGYAGYA!!』

“猿”の一匹が、叫び声を上げながら飛び掛ってくる。

すると次から次へと、同じ姿かたちをした化け物の群れが襲い掛かってきた！

「ノルン！」

『OK Master! Here we go!』

ジークの呼びかけに、ノルンが応える。

両手両足につけられたカードリッジシリンダーが、撃鉄を作動させ、カードリッジをロードする。

カードリッジシステムの四連同時発動。

瞬間、凄まじいまでの魔力がジークを包みこんだ！

「シッ!」

それは一瞬、一秒にも満たない時間であった。

猿たちは、一瞬で吹き飛ばされ、地に落ちてゆく。

正拳、肘打、手刀、膝蹴、回蹴……あらゆる拳技が、同時に放たれたような錯覚である。

それほどまでに素早い技だった。

「ふう……」

ジークはノルンから排熱処理の蒸気が巻き上がるのを見ながら、深呼吸をした。

「やっぱり、キツイね。四連は」

『そういつつ毎度使っているような気がします』

「まあまあ、今ので全部だっ

」

ジーグは、そこでハッと気が付いた。

不気味な怪物が現れては消えを繰り返す……。

（まさか　嘘だろ）

耳にした噂話と、目の前の現実がおぼろげながらも合致し始める。噂は真だったのか、それとも、ただの偶然の一致か。

だがジーグは何か、何か恐ろしくおぞましい、形のない悪意か何か、この謎の巨人の背後にいるような気がした。

巨人が腕を振り上げる。

ジーグは距離をとろうとしたが、体がいう事を聞かない。

「使い過ぎたか……！」

短期間の間に、四連装カードリッジを二度、合計で八発も使った弊害か。

ジーグの体は、思った以上に疲弊していたのだ。

「く……！！！」

ジーグが巨人の腕に潰されるのを覚悟した　その瞬間だった。

突如として回転飛来する刃の一撃が、巨人の腕を切り裂いていたのだ。

ジーグは驚く。

まさか新手か。

そう戦慄するジーグをよそに、刃を追うようにして人影が、彼の頭上を飛び越した！

「ビーストファンゲツ！！！」

その“女”は、猛々しく自らの得物の名を叫ぶ。
すると、それに呼応するようにして、投げ飛ばされた大鎌と剣の特
徴を併せ持つ武器

リンクス

、がブーメランのように戻ってくる！

もう片方の巨人の腕を切り裂きながら、女　ファルティスの手元
に戻ったビーストファングは、怪しい光を放つ！

「でいやあああああッ！！」

裂帛の気合い、怒号とも取れるそれと共に、ファルティスは巨人の
目の前まで躍り出る！

そして放たれた、ビーストファングの一撃が、巨人を悲鳴を上げる
間もなく真つ二つにした！

驚いたな。

ジークはそんな感想を秘かに抱きながら、ほら穴の中の一角に座り
込んでいた。

『閣下

マスター

、この反応はやはり……』

ノルンがこそこそと小声で呟く。

「みたいだね、さっきの……ファルティスさんがあのエネルギーの

発信源だ」

先ほど自分の前に現れ、巨人から救ってくれた女性、ファルティス。彼女こそが、不安定なエネルギー源の元だったのだ。

しかしなぜファルティスが強大なエネルギーを発している理由までは、ジীগにも、ノルンにも分かりかねた。

ロストロギアと融合しているのか、はたまた巨大なリンカーコアを所持しているのか……。

だが、どちらにせよ、ファルティスはジীগにとって命の恩人である。

多くを詮索する気は、今の所は無かった。

そのファルティスは今、ほら穴の奥にいる。

火が焚かれ、その近くには血まみれになった原生生物の皮やら骨やらが散らばっていた。

『随分野性的なようですね、彼女は』

ノルンが気味悪げに言う。

ジীগは苦笑を浮かべた。

「はは、そうみたいだね」

『閣下は相変わらず危機感がない、もし人食いだったらどうするおつもりですか？』

「ん〜、まあ。その時は真っ直ぐ逃げるから、サポート頼むよ、ノルン」

やれやれ、この人は。

そんなノルンのボヤキをよそに、ほら穴の奥の方でこそこそやって

いたファルティスが戻ってきた。

「おまたせ！ 入って良いって！」

ファルティスはその美しく引き締まった体とは裏腹に、人懐っこい少女のような表情でジークを奥へ招き入れた。

その先にあった物に、ジークは眉をひそめた。

黒と赤に染まった大きな布が いや、血に染まったマントにくるまった男性が、そこにはいたのだ。

「あなたは……！」

だが、ジークを何より驚愕させたのは、それだけでは無かった。

「キース先生……?!」

その男、キース・デイジイは、ジークの良く知る人物であったのだ。

閑話『始まりは終わりと共にやって来る』（前書き）

本編が完成しないなら、閑話を書けばいいじゃない！

つてな感じで、勇往邁進様の外伝作品『魔法少女リリカルなのは
閃光の殺し手』とすこーしだけ絡めたお話でございます。

この閃光の殺し手も読んでみてね、面白いよ！

ちなみに絡む要素は本当に少しだけだよ、本編とはかすりもしない
よ！ ごめんね！

閑話『始まりは終わりと共にやって来る』

櫻木 大地は夢を見る。

女性の声に呼ばれる夢。

しかし、その声ははっきりとは聞こえない。

救いを求めるかのような、もしくは今際の際に発するかのような切ない声。

それは大地の脳髓を刺激してやまない……まさに、安らかな悪夢であつた。

貴女は……誰だ……？ なぜおれを呼ぶ……？

幾度となく問いかける、しかし答えは帰ってはこない。

大地は不気味なその声の向こう側に、何か、白と黒の光を見る。

幽かな光 その光を、大地は掴まなければいけない気がして。

今、鳴海の街ではちょっとした騒動が起こっていた。

その騒動の所為で、大地は少しだけ、頭を抱えていた。

事件の概要はこうだ。

高校生二人が謎の失踪 ! 一人は企業の令嬢 !

しかし、そんな事件は残念ながら今時は珍しくなかった。

これがテレビのワイドショーの向こう側だけの話であれば、大地の生活も、いつもと何ら変わらないはずだった。

「……どこに行ったんだよ、綜夜……」

目の前には、ボロボロのマウンテンバイク。

ステッカーが貼られた赤いそれは、消えた主をじっと待つ忠犬のように、アパートの駐輪場に止まっている。

消えたのは　このマウンテンバイクの持ち主　紅月　綜夜、大地の親友である少年だ。

「……」

大地は、嫌な気配を感じて、ふと空を見上げる。

ずっと前から、そう、綜夜が消える少し前から、大地は空に何か違和感を感じている。

暁色の空は、いつもと同じように平静を保っているかのように見える。

しかし大地はその空が、全てを包む大いなる天蓋が、今にも張り裂けるのではないだろうかという錯覚を覚えるのだ。

根拠はない、証拠もない　ただそう感じるだけ。

（だが　）

なんだ？　この言いようもない閉塞感は。

なんだ？　この例えがたい違和感、異物感は。

（何かが、引つかかる　俺は……？）

懺血の光を纏いて、災いを討つ神　。

断罪の白、殺戮の黒の光、神の傍らに有りし……汝の名は。

何かのビジョンが突如、大地の頭をよぎった。

瞬間　大地は左胸、心臓の位置する場所を抑えうずくまる。

「か……っは……?!」

痛み　何かに突き刺されたかのような痛みが、大地の心臓を襲ったのだ。

大地はその場に膝を付いた、激しい痛みだ。

だが、その痛みはすぐに引いて行く。

大地はこの徐々に消えてゆく痛みに、不思議と名残惜しさを感じている自分に気づく。

(この痛みが、最後だ　これが消えれば、全ての違和感は消える)

大地は、確信していた　何が彼をそうさせたのかは分からない、だが、確信があったのだ。

そして、その通りに、痛みが消えると共に、大地を覆っていた全ての違和感は、露と消えた。

「終わった……のか……?」

大地は思わず呟いていた。

空を見上げる、もう、違和感はない。

何が“終わった”のかは知らない、だが確かに何か“終わった”いた。

寂寥感が風と共に大地の心を撫でる。

大地は少しだけ俯いた後　何かを決心したかのように、前を向い

た。

そしてボロボロのマウンテンバイクを見やると、くるりと踵を返して歩き出す。

「いや、終わってない……終わっちゃいない……」

大地の鋭い瞳には、未だかつてない“光”が渦巻いていた。

「これから始まる　何かが　」

大地は、気が付けば町を駆けていた。

そう、確実な“戦いの予感”と共に……！！

「俺も戦う……無事でいろよ、綜夜　！」

閑話 『始まりは終わりと共にやって来る』 (後書き)

この世界の大地くんは、恐らく殺し手にならなかったために、何か別の“戦いの因果”を背負ってしまったようです。

どんな戦いかは 各人の妄想にお任せします。

あ、ちなみにこれでお話を作らなくなったら、僕じゃなくて勇往邁進さんに許可をとらないと駄目よ。

ではまた本編で会いましょう！アデュ！

閑話『用語解説』

超々古代時空文明世界

不明。詳細が判明次第更新。

超古代式

綜夜が使用する術式。魔法陣は所々が欠けた、歪な円形をとる。魔力効率などは現在の時代の物に比べても大差はない。特徴はこの術式自体が使用者に合わせて、自在に長所短所を変える能力を有する事。

イレギュラーデバイス

“デバイスとしての機能を持ち、かつ何者かに使用されているロストロギア”の事を示す。
“元はデバイスだったが、ロストロギア化した物”も広義としてはこの中に入る。
無論使用は禁止され、管理局による回収が行われている。
中には特例を許され使用されている“準イレギュラーデバイス”というものもあるらしい。

禁術

あまりにも凶悪な効力を持ってしまったがゆえに、使用を禁ぜられ

闇に葬られた魔法の事を指す。
中にはこの魔法自体がロストロギアとして認定されている場合もあると言つ。

ライブラリー

不明。詳細が判明次第更新。

時空管理局空挺派遣調査部隊『ハウンドイーグル』

キリカ・イズルを長とする本局所属の精鋭部隊。

選りすぐりのエリートが選ばれており、魔導師ランクの平均はAA。多くの人数が所属してはいるものの、実質に働いているのはそのうちのごく少数。

暴走したロストロギアの鎮圧や、危険人物もしくは危険団体の拿捕などを主な任務とし、成功率は極めて高い。

しかしそれ以上に過酷な部隊でもあり、この部隊の任務で“無念の殉職”を遂げた者は少なくない。

ハウンドイーグル所属L型時空航行艦『ストウームレイド』

ハウンドイーグルが所持する大型の時空航行艦。

船尾に装備された超大型ブースターと、コアに配備された巨大高出力魔力ジェネレーターが特徴。

大型だがジェネレーターと直結されたブースターによる機動力は凄まじく、管理局が有する艦の中でも一、二を争うほどの最高速度を誇る。

アルカンシエルなどの強力武装は装備されていないが、大軍制圧用の魔力バルカンや迫撃速射砲などが装備され、基本的に火力も高い。欠点は乗り組み可能な人員が少ない事と、装甲の薄さ、娯楽設備などの少なさからストレスが溜まり易いと言ったところか。艦長はキリカ・イズル。

0 話『脱走』（前書き）

このサイトで皆様の作品を読んでいたら、書きたくなりましたww
初心者ですがよろしくお願ひします！

m | | m

0話『脱走』

ある月の明るい夜、暗い森で。

「ハア、ハア……………」

傷だらけであちこちから血を流しぼろぼろの外套を羽織った、10歳前後だろう少年が走っていた。

「うつ……………」

とても苦しそうな表情だった。

今にも倒れそうになる体に鞭うって少年は走っているのだ。

「追え！逃がすな！」

「すばしっこいガキだ！ “アレ”のせいか!？」

少年の後ろから、大人の男達の声が響く。

どうやら少年を追っているようだ。

「クソガキがつ、待ちやがれってんだよ!!」

大人達の一人が手に持った杖から出した光弾で少年を攻撃した。

「ああっ！」

それが右足に当たって少年の右足が吹き飛び、血をまき散らしなが

ら少年が転ぶ。

「うあつ、ああー!!」

大人達の一人が、悲鳴を上げる少年に追いついた。

「つたく、“実験体”風情が手間取らせやがるぜ」

「おい、殺すなよ、中身の“アレ”を回収しなくちゃならんのだからな」

「分かってら、だから片足で勘弁してやったんだ、ククク」

大人達が下品な笑い声を上げる。

「あ、ぐ……ぎ……ぎ……!!」

その笑い声に、少年に激しい怒りが湧き上がって来る。

「あ？このガキ、いつちよまえに睨んでやがるぜ？」

「黙らせとけ、死なない程度にな」

大人達の一人が杖を振り上げ、少年に向かって振り下ろす。

しかし、その杖は少年に触れる事が無かった。

なぜなら、少年は、空高く舞い上がり、月を背に地上の大人達を見下ろしていたからだ。

大人達がうつろたえ始める、少年は赤黒い血のような邪悪なオーラを纏っている。

逃げ始めた大人達の背中に向かって、少年が手をかざす。

「・・・・・・・・」

瞬間、すさまじい赤黒い光が森を飲み込み、大人達を森ごと消し去った。

その場に残ったのは、かつて森があったクレーターと、月を背に空に佇む、オーラを纏った少年だけだった。

0話『脱走』（後書き）

綜夜「な………何で俺の出番が無いんだッ！！主人公ッ、主人公だよ俺エエツ！！」

作者「じゃかましい、キイキイ喚くんじゃないよ鬱陶しいッ！仕方ないだろプロローグなんだから、我慢しやがれこのスットコドッコイ！！」

綜夜「ぎ、逆ギレかよ！？大丈夫かこんな作者で………不安だぜまつたく………」

作者「あ、次回は（多分）一話と綜夜のプロフィールです、よろしくお願いします」

綜夜「多分ってなんじゃい多分って」

一話『それは唐突な始まりなんだ!』（前書き）

頑張って書きました、読んでやってください。

「話『それは唐突な始まりなんだ!』」

「きよおもつ、じつてんしゃのつ、ペダルツが………んん
おもオオオい!?!?!」

朝焼けの坂道を少年がやたらとリズムカルにばやきながら自転車で登って行く。

少年の名前は『紅月綜夜』あかつきとつや、私立聖詳大付属高校に通う一年生だ。父が日本人、母がロシア人のハーフで、髪はブロンドで目は碧眼、ルックスは本人曰わく『良い方』らしく、身長体重共にやや高い、ちなみにガタイもまあ良い。

好きな教科は体育と自習、苦手な教科はそれ以外全部。特技は幼い頃両親からしこたま訓練させられた護身術。

両親は既に他界しており、現在は親戚と行政からの援助を受けてアパートに一人暮らし。

と、まあ大体こんな感じの少年だ。

「へーこらつよいよい………つとなあ!」

ようやく急な坂を登りきり丘に出る。

丘に至るこの坂は、ここ鳴海町では一番キツイ坂なのだ。

実は本来なら、通る必要は全くない、というか完全な寄り道なのだが、綜夜は毎朝ここを駆け上がって来る、なぜか?

幼い頃毎朝父親に無休で走らされた習性、というのも理由の一つなのだが、違う理由も勿論ある。

「今日も鳴海の海は平和だな、よきかなよきかな」

そう、この丘は鳴海の町と、その海が一望できる場所なのだ。

ごくありふれたような、しかしここにしか無い絶景を、綜夜は大変気に入っていた。

ピーピー。

綜夜の付けたデジタルの腕時計が鳴った。

「ん？あ、ヤベエ！遅刻する！！！」

綜夜はマウンテンバイク型の自転車に乗り直しゴーグルと着用し、登って来た坂道を転げ落ちるかのように猛スピードで駆け下りて行った。

「ヒヤッホオオオイ！！！」

猛スピードで土埃を舞い上げながら、綜夜は校門前へ到着する。急ブレーキとドリフトでさらに土埃が舞った。

「……………いよおッし！！ここから最速で自転車を置き最速で教室まで駆け上げれば間に合う！！！」

まだ余裕で登校している周囲の小等部の少年少女の好奇の視線が刺さるが、紅月綜夜はそんな事を気にするほど肝っ玉とンタマの小さい男では無い。

「綜夜さ〜ん！」

そんな綜夜の背中から、少女の声が出た。
振り向くと、そこには。

「お〜！喫茶翠屋の看板娘なのはちゃんにそのご友人のお嬢ちゃん達じゃないか！おはよう！」

仲の良い綜夜の妹分達（5人）が、そこにいた。

「おはよう！今日も丘に行ってきたの？」

亜麻色の二つ結びに空色の目、喫茶翠屋の看板娘にして、高町家の末っ子、『高町なのは』。

「おはよう、今日は少し遅いんだね」

金髪のツインテールに赤い瞳、なのはの親友にして外国人らしい『フェイト・T・ハラオウン』。

「あんちゃんは相変わらず騒がしいな〜」

栗色の短髪に蒼い瞳、エセ気味の関西弁が眩しい『八神はやて』。

「もうちょっと安全運転しなさいよ、危なっかしいたらありゃないんだから」

金髪で緑色の目、綜夜曰わく『ツンとデレの化合物』らしい『アリサ・バニングス』

「おはようございます、綜夜さん」

青い髪に薄紫の目、ちよつとミステリアス？いやいやただ大人しいだけです、な『月村すずか』。

この5人は、綜夜がなのはの両親が経営する喫茶店、翠屋に良く通う縁で仲良くなった。

たまに勉強を教える事もあるほどだ、彼女達が綜夜に、だが。

「そついやあんちゃん、今日はえらくおそ……………」

「悪い！話をしたいのは山々なんだが、俺は急がねばならんだ！また翠屋でゆつくり話そうじゃないか！じゃっ！！」

ダダダダ……………」

綜夜は唐突に走り去った。

「……………行ってもうた」

「にゃはは、綜夜さん、足早いね〜」

この後、綜夜が階段ですっこけ、遅刻してしまったのを、少女達は知らない。

キーンコーンカーンコーン……………。
時間は一気に進んで放課後、綜夜は愛用の赤いマウンテンバイクに乗りながら、ふらふらと翠屋に向かっていた。

「痛い・・・・・・・・まさか一番上の段でけつまずくとは予想できなかった・・・・・・・・」

朝のダメージがまだ響いているらしい、そこかしこに湿布が張られ、間抜けさと痛々しさが同居している。

まだ日が暮れるのには早いのか、空はまだ青い、そう、不自然なほどに。

「・・・・・・・・ん？白昼の残月にしては大分月が明るいな・・・・・・・・・・？」

綜夜が空を見上げると、そこには蒼い青い月があつて、やけにぬりとした光を放っていた。

綜夜が不思議そうにその月を見上げているた、その時！

ビリビリビリ・・・・・・・・！！

地鳴りのような雷のような、激しい音と共に、空が裂けた！

「な・・・・・・・・」

突然の出来事に、綜夜は愕然とする。

見上げていた空が、ぱっくりと裂けたのだ、生きていてこんな摩訶不思議な出来事に遭うのは初めてだ。

地鳴りはまだ続いている、空の裂け目から、何かが綜夜の目の前に落ちてくる。

ズドン！！

「うわっ！！」

恐ろしく重かったのだろうか、落ちて来た“ソレ”は凄まじい音と共に、地面にクレーターを作った。

振動にバランスを崩して倒れる綜夜。

「な……なんなんだ……なんなんだコイツはツツ！？」

目の前に現れた“異形”に対して、綜夜が誰に問い掛けるでも無い疑問を叫ぶ。

恐竜のような体に3メートルはあろう巨体、黒やら黄色やら、とにかく警告色で彩れたその“異形”は、どこかの出来の悪い特撮で出てきそうな、悪趣味な怪物だった。

その怪物がギロリと綜夜の方を向く。

「さささ三十六計逃げるにしかり！！戦略的撤退だ！！逃げる逃げるオオオ！！」

すくみ上がっている場合ではない！

と綜夜は体中の筋肉に信号を送り、すぐさま立ち上がると、マウンテンバイクにまたがって、全速力で漕ぎ出した！

『VOOOOOOOOO！！！！！！』

後ろから怪物の咆哮が聞こえる。

それだけで空気が震えるのが分かる、綜夜は戦慄した。

「くっそ……！！何がなんだか分からねえ！！とにかく……
……死んでたまるかってんだ！！」

何がなんだか分からんとは言ったが、怪物が自分を好意的な目で見てくれないのは分かるし、圧倒的な死を持つてくる存在だというのも、第六感で分かっている。

こういう時、そう、圧倒的な敵性体が自分の目の前に現れた時どうするか？

立ち向かう？策を練る？いやいや、綜夜はこういう時、最も有効な手段というものを両親から教え込まれていた。

それは“逃げる”事らしい。

逃げ切り、生きてさえいればチャンスはまた来る、しかし死んでしまえばそこで全てがゲーム・オーバーだ。

ゆえに綜夜は“逃げる”。

マウンテンバイクを全力でこぎながら、逃げる。

しかし、それでも。

『VVVOOOOOOOO!!!!!!』

「うおおおっ!?!」

全く逃げ切れていない。

(相手がデカすぎる……………!!)

マウンテンバイクを幾ら全速力でこぎ、下手な自動車より早く動いても、怪物はすぐさまそれに追いついて来る。

「くそっ……………!!」

綜夜が次第に疲弊し、苦虫を噛み潰したような表情になった、その瞬間である。

ドガガッ!!

「は……………?」

綜夜は自分がマウンテンバイクから転げ落ちて、地面に転がって行くのを感じた。
下腹部に違和感を感じて見ると、自分の腹から、太い棘のような物が生えているではないか。

「がふっ！？げええっ！！」

急に気持ち悪さと痛みが込み上げ、綜夜は血反吐を吐いた。

(やられたッ………クソッ！！)

意識が朦朧としてくる。

怪物がのしのしと近付いてくるのが分かる。

マウンテンバイクが目の前に転がっている。

一抹の望みを掛けて手を伸ばすが、当然のように届かない。

(ちつくししょう………こんな所で………ワケもわかないまま………死ぬのか
よ………!?)

もう終わりが見えて来た、終わりの無い暗闇がすぐそこで大口を開いて待っている。

しかし、その暗闇は、ある光によって払われる！！

『VOOOOOO!!?!?!?!?』

怪物が悲鳴を上げた。

深紅の天使、見ようによつては赤銅の悪魔が、綜夜の目の前に舞い降りる。

空が、真っ赤に染まった。

「・・・・・・・・」

少年、みすばらしい外套に身を包み、片手にスラリと伸びる炎のよ
うな剣を持った少年は、怪物に対して、剣を向けた。

「失せろ」

少年が濁りきった低い声で呟く。

すると剣の先端に、歪な赤黒い魔法陣が現れ、そこから七本の血の
ような槍が伸び、怪物を貫いた！

『○○○○○○・・・・・・・・！！！！』

怪物は、あまりにもあっさりと崩れ落ち、そして泥のように溶けて
消えゆく。

「・・・・・・・・・・ぐ・・・・・・・・」

綜夜は目の前に現れた少年に、知らず知らずの内に手を伸ばしてい
た。

少年は、その深紅の瞳で綜夜を見下ろし、ゆっくりと、綜夜に手を
伸ばした。

その手の平には真っ赤に染まった牙のような物が置かれている。

「これは生きてがってる君にあげる。僕は、もう眠りたい・・・・・・・・」

「」

少年が呟く。

なんとなく、悲しそうな声だった。

少年は綜夜の手にその“牙”を置くと、砂になるように消えて行く。最後に、少年がフツと笑った、ような気がした。“牙”が綜夜の体の中に埋まって行く。

ドクン。

体中に熱い激痛が走る。

ドクン。

体中に力が漲ってくる。

ドクン。

頭の中に見たことも無い風景がフラッシュバックしてくる。

ドクン。

頭の中に、声が響いた ！！

少年よ、災を狩る刃となれ ！！

綜夜の意識は、真っ赤な海に沈んで行った……………。

「話『それは唐突な始まりなんだ!!』」（後書き）

綜夜「つてええ……腹に穴開いたぞ……」

作者「可愛い女の子5人と仲良くしてるから罰が当たったんだ」

綜夜「な、なんだそりゃ……」

作者「分からないなら分からんでよろしい」ゲシゲシ

綜夜「け、蹴るな蹴るな!なんなんだよもう!」

【次回予告】

悪夢にうなされる綜夜が起きたのは、アパートの自分の部屋だった。何も変化の無い1日に、あの出来事は夢だったのかと首を傾げる綜夜。

しかし、そんな彼の目の前に、再び怪物が現れる!!

再び訪れた危機、だが綜夜にある変化が訪れて……!?

次回、第二話『懺血の守護神現る!』

綜夜「俺は闘い方を知っている……!?!?」

少年よ、災を狩る刃となれ　　!!

「二話『憐血の守護神現る!』(前書き)

お待たせしました、二話です。

それではどうぞ。

赤黒さん、感想ありがとうございます。

その他の方達からの感想も待っています!

「二話『憐血の守護神現る!』」

長い事、狭い部屋の中にいた。

鉛色の壁と天井、分厚い壁の隙間から差し込む光だけが、薄暗く冷たい部屋を照らしていた。

しかし、そんな中にあっても一人ぼっちでは無かった。

頭の中に響く少女の声、隣の部屋にいるらしい彼女と声無き会話をしていたから、一人ぼっちな気はしなかった。

ある日、部屋の外が騒がしくなつて、聞き覚えのある少女の悲鳴が直接耳に響いた。

外の状況は分からない、ただ、少女が何か良くない目に遭っている、と言っただけは分かった。

しばらくして静けさが戻り、もう二度と少女の声が響く事は無かった。

本当に一人ぼっちになってから、しばらく経った日。

急に扉が開いた、眩しい光が目の前にあらわれて、くらくらする。

そこには大きな人達が経つていて、広い場所に連れていかれた。台の上に無理矢理寝かされて、逃げられないように固定される。

隣にも台があつて、ふとそちらに目をやると、そこには、見知らぬ少女が同じようにされていた。

少女の胸に大きな人の一人がメスを入れる。

悲鳴と共に血飛沫が上がる、そこで気が付いた。

その少女は、あの、仲の良かった。

「.....!」

綜夜は勢い良く布団から起き上がった、顔はとても蒼白している。

「・・・・・・・・・・」

不安げな表情で辺りを見渡す、ボロボロな壁に掛けられた時計とカレンダー。

少し型落ち気味のテレビや、小さなちゃぶ台。

そこは綜夜の良く知る場所、というよりも、綜夜が現在住んでいるアパートの一室だった。

「・・・・・・・・・・はあく・・・・・・・・・・なんだったんだ、趣味の悪い夢だぜホント」

夢にしてはあまりに鮮明な光景、悪い意味で衝撃的なそれを見て、綜夜はかなり気分が悪かった。

いつものように布団を片付け、身なりと部屋を整えて、朝食を取る。そして顔を洗って、家を出た。

ガチャリと鍵を閉めて、いざ出発・・・・・・・・・・しようとした時、綜夜は違和感に気付いた。

「・・・・・・・・・・俺、なんで家にいたんだ・・・・・・・・・・？」

おかしい、確か昨日は空が裂けて怪物に襲われ、死にかけた所を、現れた少年に救われたはずだ。

綜夜は下腹部を探る、傷跡は無い。

「・・・・・・・・・・どういう事だ・・・・・・・・・・？」

頬を抓る、痛い、夢ではないらしい。

空を見る、いつも通りだ、町もいつも通り平和な時間が流れている。

「・・・・・・・・!!」

やはりアレは出来すぎた夢だったのかと、綜夜が思った時、ポケットに何かがある事に気が付いた。

それは、小さな銀色の指輪で、ちょうど綜夜の人差し指にはまるサイズだった。

見たことも無い代物である。

「なんじゃこりゃ」

綜夜はそれをスポ、と指にはめてみるが、何も起きない。ただ、妙にしっくり来る、とは思った。

「ん〜?」

綜夜は首を傾げる、現実を起こったハズの事が夢のようで、現実には無かったハズの物がある。あまりにも不可思議だった。

しかし、それ以上追求の仕様が無い。

綜夜は考え込むのを止めて、マウンテンバイクにまたがった。

そして、いつものように丘に行つて、いつものように学校に行つて・・・・・・・・本当に普通の日常だった。

空が裂けたとか、怪物が現れたとか、そういった類の噂話は欠片も聞かなかつたし、影も形も無かつた。

そのまま時間は過ぎて、何事も無かったかのように放課後になった。

「……やっぱり夢だったのか？ううむ、ますますワケが分からん」

学校返りに、再び丘に行ってベンチに座り、コンビニで買ったヤキソバパンを頬張りながら、綜夜は呟く。

右手の人差し指には銀色の指輪がはめられている、これも綜夜の頭を悩ませる謎の一つだ。

こんなものは持っていなかった、なのになぜ当たり前のようにポケットに入っていたのだろうか。

不可思議な所を見れば、昨日の出来事は現実味を帯び、そうでない所を見れば、昨日の出来事は夢のように揺らぐ。

「んんんん……分からん！！」

「綜夜さん？」

「お？」

吠えた綜夜に、聞き慣れた声かけられる、振り向くと、そこにはなのはがいた。

「どうしたの？何か悩み事？」

きよとんとした表情で聞いてくるなのは、綜夜は困った様子で頭をポリポリと掻いた。

「ん……………」

言うべきか言わざるべきか、少し迷った拳げ句、綜夜はにっかりと笑ってなのはの頭をわしゃわしゃと撫でた。

「なんでもねえ。ただ今晚の飯をどうしようか迷ってたただけだ」

「なあんだ、ちよつと心配しちゃた」

「だはは、悪い悪い！今度ケーキ奢ってやるから勘弁な」

「ホントに？」

「男に二言はねえ！」

エヘンと自慢げに胸を叩いてみせる綜夜、なのはいつもの可愛い笑顔を見せる。

なのはのネックレスについた、小ぶりな紅い宝石が、夕暮れの光を反射してきらめいた。

(?)

綜夜は一瞬だけ見えたその光に、懐かしいような感覚を覚える。

しかしそれをすぐに忘れ、綜夜はベンチから立ち、傍らに置いてあったマウンテンバイクに乗った。

「もう行くの？」

「ああ、お前も暗くならない内に帰れよ」

「うん！バイバイ綜夜さん！ケーキの事、忘れないでね〜！」

綜夜はニツと笑ってなのは手を振り、ゴーグルをかけて坂を一気に下り始めた。

(とりあえず、何も変化が無いならそれで良い。平和が一番、だ)

綜夜はマウンテンバイクで町を駆けながら、そう思った。

(そうだ、あんな怪物、いない方が良い。なのは達が襲われたらひとたまりも無いだろうからな……)

しかし一抹の不安も残る。

もし、アレが現実なら？

あの怪物が再び現れるような事があれば、どうする？

(……いや、やめだ、考えたって仕方ないさ。忘れる、忘れるんだ紅月綜夜、あんな怪物はいない、いないんだ、アレは夢……)

綜夜が空を見上げ、悪いイメージを払拭しようとした、その瞬間だった。

ピキピキピキ。

夢ではない、お前が見たのは紛れもない現実だ、逃れられぬ悪夢だ

そう告げるかのように、綜夜の目の前で空が音を立てて裂けて行く。

「……………!!」

綜夜はゾクリと背筋に悪寒が走るのを感じた。

恐怖する綜夜の前に、裂けた空から、再び悪夢が舞い降りた。

ズドオン……………。

巨大、昨日の怪物の巨軀を見てなおそう言えるほどの大きさを、新たな怪物は持っていた。

4、5メートルは下るまい、見上げるほどの巨体。

色こそ僅かに違ったが、怪物は昨日のそれと同じ形をしていた。

「マジかよ……………」

綜夜は、つい呟く。

しかし、それは目の前の怪物に植え付けられた絶望からの言葉ではない。

「なんだって、今日は“負ける気がしない”んだろーな？」

今の綜夜には目の前に現れた怪物が、あまりにも弱く、チンケで、情けなく見えた。

「恐怖で気でも狂ったのかもな？だけだよ……………」

怪物が前足を振り上げ、真っ直ぐに綜夜へ落とす。

しかし、それを綜夜は避けようとせず、ただそれに対して右手を上げた。

ズズウン……………。

鈍い衝撃音が響く。

綜夜が高く飛び上がり、怪物の顔面の前に躍り出た！

「なんだってこんな力がツ、俺にあるんだああッ！！」

そして綜夜は怪物の顔面を、叫びと共に殴り抜けた！
怪物が吹き飛ぶ。

「どっして……」

空に浮かぶ綜夜は、明らかに困惑している。

「俺は闘い方を知っている……！！？」

震える手を見ながら、震える声で綜夜は呟く。
家や建物をなぎ倒しながら怪物が立ち上がり、綜夜に向かって口を開く。

そこから、凄まじい火炎弾が吐き出され、真っ直ぐに綜夜へ向かう！

「ッ！！」

綜夜は反射的に右手を火炎弾へ突き出す、すると、歪な形をした魔法陣が現れ、熱線を防ぐ。

「おおおおッ！！」

綜夜は魔法陣を出したまま、真っ直ぐに怪物へ突き進んで行く、もはや、がむしゃらだった。

「“ブラドエッジ”！！」

吐き出される火炎弾を魔法陣で防ぎながら、綜夜は怪物に再び肉薄する。

そしてわけも分からず叫び、右手を振り上げる。

その右手にはいつの間にか鋼色をした、一本の長剣が握られていた。

「うああああああ！！」

綜夜は怒号と共に長剣を振り下ろした！

ザパン。

たった、たった一振り。

怪物の巨体に対して、あまりに短い長剣の刃。

しかし、その一刀の余波により、怪物の巨体は、文字通り真っ二つになっていた。

「ふーっ………ふーっ………」

震えが、悪い汗が止まらない、空は未だに裂けたままだ。

「なんだよ………なんだよ………これはツツツ！！」

溶けて消えて行く怪物を見下ろしながら、綜夜は頭を抱えて叫ぶ。
分からない恐怖。

なぜこんな力があるのか、なぜこんな怪物がいるのか、自分は、一体どうなってしまったのか、分からない。

前も後ろも見えない、地に足が付いているがどうか分からない暗闇に、たった一人で放り出された、そんな感覚、綜夜はただ震えていた。

アレの居場所は分かったか？

はい、現在は地球に。

地球？あんな辺境の土地にか？まあ良い、映せ。．．．．．
これは．．．．．“サンプル”でない物が“アレ”を操っている
のか．．．．．？

そのようで、今はまだ“アレ”の10%も力を引き出せていない
ようです、捕獲しますか？

いや、泳がせて観察しろ。労せずして“アレ”の解析が出来れば
儲けものだ。この男が死んだときは迅速に回収させれば良い。“
闇の書”でもなんでも使つてな．．．．．くく．．．．．

は、了解しました。

では私からヤツにプレゼントをしよう、ありがたく受け取れよ
“懺血の守護神”．．．．．。

「．．．．．」

綜夜は呆然と空に漂っていた。

少し頭が冷えたようで、ぼんやりと裂けた空と、やけに明るい青い月を眺めていた。

今、この空間に、綜夜以外の人間はいない。

「すう……はあ……」

綜夜は思い切り冷たい空気を吸って、吐き出す。

「よっし！うだうだするのはもう終わりっ！とりあえずここから抜け出す事に集中だ！」

パン！と自分で自分の頬をひっぱたいて気合いを入れ直す。

それとほぼ同じタイミングで、再び何かが空の裂け目から現れた。

「またかよ!？」

綜夜は右手の長剣を握り直す。

現れたのは再びあの怪物、だがしかし、一体だけではなかった。

大きさには個体差はあるものの、3、40体は下らないほどの怪物達が次々と現れ、一気に火炎弾を綜夜に向かって吐き出してきた！

「……」

綜夜の周囲に魔法陣が展開される、火炎弾が次々に爆発して行く。

「うっ、うおおおおお!？」

ダメージはない、しかし、激しい衝撃と閃光と爆音が綜夜の精神を削って行く。

「クソツ……このままじゃあ　！」

呼吸が荒くなる、振り払ったハズの恐怖と危機感が、再び綜夜を襲う。

それに呼び出されたかのように、綜夜を内側から焼き尽くすかのように、体が熱くなっていく。

「うあああああああああああああ！！！」

そして、全てが赤に染まる　！！

ようやく目覚めたか、懺血の守護神……全てを破壊する者！！

空が、大地がその誕生を祝福するかのように震える。

赤く染まった髪と目、古の戦士のような風貌に赤い外套、そして赤熱した長剣。

綜夜は劇的な変身を遂げていた。

災を狩る刃、懺血の守護神へと　！！

二話『懺血の守護神現る!』（後書き）

酸欠「ビビり過ぎだろお前」

綜夜「う、うるさいやい！」

酸欠「他のオリ主さん達を見習えよ、皆お前みたいに力に対してビビったりしてないぞ」

綜夜「あの人達は特殊なの！ヒーローなの！俺は日常に満足してるパンピーなんだよ！平和な日々を“飽きた”とか言う豪傑じゃないの！」

酸欠「はいはい言い訳乙」

【次回予告】

懺血の守護神へと覚醒し、怪物達を倒した綜夜は、自分に内にある“懺血の牙”から、様々な記憶と知識を受け継ぐ。

そして自らに突きつけられた使命を受け止めた綜夜の前に、再び怪物が現れるのだが……!?

綜夜「コイツ等、いつたい……!？」

次回第三話『使命と歪む空』

少年よ、災を狩る刃となれ！

三話『使命と歪む空』（前書き）

お待たせしました、三話です。

ちよつと短くなっています。

ケンさん感想ありがとつございませう！
他の人からの感想も待っています！

三話『使命と歪む空』

「・・・・・・・・」

綜夜の脳の中へ、直接何か語りかけてくる。

それは父や母が優しく語りかけてくるような、遅く、優しく、柔らかなささやき。

しかしそれが告げるのは、雨のようにさめざめと降りしきる悲劇、カラリと晴れた晴天の喜劇、そして、曇天の下で誰の物とも分からぬ血を、臍物を、ひたすら得物と己自身に浴びる英雄譚。

幾百、幾千もの懺血の守護神達の、幾万、幾億の戦いと生の記憶

それを、綜夜は垣間見ているのだ。

懺血の牙　　綜夜の内に眠る、超々古代時空世界文明の遺産。

手にした物に無限に近い力を与えると共に、戦いの運命をも与える禁断の果实。

それが引き起こす現象、それがこの記憶の伝承だ。

過去、懺血の牙を手にし、懺血の守護神となった者達　　彼らの記憶を、経験を、綜夜は今受け継ごうとしているのだ。

「・・・・・・・・そうか　　そうなんだな、お前は　　」

綜夜はついに自らに“牙”を託した少年の記憶を見る。

それは、短い記憶だった。

何者かが起こした争いに巻き込まれて家族を失い、何者かに引き取られ、暗い部屋に閉じ込められ、そしてそこで顔も見知らぬ少女と出会い・・・・・・・・彼女が目の前で殺される場面を見る。

それから白衣を着た大人たちに懺血の牙を移植され、守護神として目覚め、追っ手に追われつつもここまで逃げてきた、その時は既に、体も心もボロボロだった。

家族はいない、故郷への帰り道すら分からない、友達と呼べる幼女も目の前で死んだ、何もできず、ただ少女がゆっくり殺されていくのを見ていることしかできなかった。

その苦痛と悪夢を、さらに懺血の牙の力を受け止めるには、衰弱した少年の幼い体と心は弱すぎたのだ。

しかし少年は分かっていた、懺血の牙の力を狙う何者がいると、彼らは“良くない事”をしようとしている事を。

ゆえに誰かに託さねばならなかった、この恐るべき力で過ちを犯させぬために。

懺血の牙に宿る無数の守護神達の誇りや魂を、過ちで穢させぬように。

そして、その力を以ってして悪しき者達を倒すために……。

死ぬのなら気高き守護神として、次の者に、強き心と肉体を持った者に後を託してから。

そして少年は綜夜に牙を託あう事に成功した。

少年は、誇りを守って死んだのだ。

綜夜は涙した、少年の心に、その気高さに。

なのは達とそう変わらないほどの少年の持つ、魂の輝きに。

「……………分かったぜ、お前が守ったその誇りと魂、俺が受け継ぐ……………!!」

だから、お前はゆっくり休んでな。

綜夜は涙を拭う。

そして、不敵に笑って見せる。

体中を、熱い力が巡り始めるのを感じる。

それは懺血の牙の胎動、綜夜は、今まさに守護神として完全に目覚めようとしているのだ。

「お前たちはこの汁物ポタージュで締めだ！」

綜夜は倒れた怪物三体に対して、ブラドエッジでの斬撃を飛ばす！
その斬撃によって、怪物三体は残らず切り刻まれ、消え去る！

「残りの奴には魚料理ポアソンを振る舞い！」

体勢を立て直した残りの怪物達に、向かって、綜夜は指を鳴らす！
瞬間、赤い爆発が巻き起こり、怪物たちを巻き込んでゆく！

「すかさず第一の肉料理アントレを叩き込む！」

綜夜がかざした手から、無数の赤い魔力の槍が発射される！
それは怪物たちを貫き、ダメージをさらに加速させ、数体の怪物を
消し飛ばす！

「まだまだ冷菓ソルベからが本番だぜ！！」

ブラッドエッジを二度振り、巨大な斬撃波を発射する！
それに巻き込まれた怪物達は微塵に切り裂かれ、消し飛ばす！

「第二の肉料理ロティでさらに追い打つ！！」

爆発の余韻冷めやらぬうち、綜夜が凄まじい速さで怪物達に近づき、
ブラッドエッジを振りぬき、次々と怪物達はこま切れにしてゆく！

「おっと、生野菜サラダだつてあるんだぜ！」

怪物達の切り裂きながら、その中心にたどり着いた綜夜は、ブラッ

ドエッジを猛回転させ、深紅の竜巻を巻き起こし、巨大な怪物たちを空に舞いあげる！

「空中遊泳しながら甘い菓子アントルメを喰らいな！！」

空に舞い上がった怪物達を、極大の光線が追いかける！

次々に爆散していく怪物、残りは、三体！！

「そろそろ決めろぜ、フルエイ 果物！！」

落ちてくる残り三体の内二体を、魔力を帯びたブラッドエッジでの剛なる一千にて消し飛ばす！
残り、一体が地面に落ちる！！

「珈琲カフェで……………終わりだあああああ！！」

地面にめり込む怪物に対して、綜夜はブラッドエッジを収め構えを取って跳躍し、怪物に対して飛び蹴りを放つ！

深紅の光弾となった綜夜が怪物を貫き、大爆発が巻き起こった！！

「……………フル・コース、決まったぜ」

燃え盛る炎が消え、綜夜も元の姿に戻った。

切り裂かれた空も元に戻り、夕焼けの美しい色が、綜夜の目に飛び込んで来る。

しかし、綜夜は鋼色の長剣に戻ったブラッドエッジを未だ握りしめ、空を見つめていた。

「嫌な感じだ、こりゃ何か来るな……」

ブラドエツジを構える綜夜、先代の守護神達から受け継いだ勳が、綜夜に新たな敵の存在を知らせている、この世界は今、何者かが張った結界に包まれているのだ。空が避けるのではなく、歪み始める。

「来やがったな！」

その歪みから現れたのは、巨大な怪物では無く、無機質な鉄の鎧たちだった！

「コイツ等、いったい……!?!」

鐵血の牙から受け継いだ記憶の中には無い敵だ、似たような物は掃いて捨てるほどあったが、どれにも一致するのは“邪悪な物”である事だった。

「アイツ等の手先か? いや、様子が違う……! まあ、やることは一緒なんだがな！」

ブラドエツジを鎧達に向ける。

鎧達が綜夜を敵と認識し、襲いかかる!

「ニラウンド目、行くぜ!!」

綜夜が地面を蹴って鎧達に向かおうとした、その瞬間だった!

「ん?」

ズガアアアアアアアアアア!

桜色の光線が、鎧達を横から薙ぎ払った!

「気配! 敵か?! いや、アレは……………アレは……………
!?!?!」

綜夜が驚きを隠せない様子で、光線が発射されて来た方を振り向く。

「綜夜、さん……………!?!」

そこには、綜夜と同じく驚いた表情をした、いつもとは違う雰囲気を持った高町なのがいたのだ!!

三話『使命と歪む空』（後書き）

綜夜「どうよ俺の活躍！」

酸欠「アーハイハイカツコイイネー」

綜夜「うわ、なにこいつうぜえ」

酸欠「お前が活躍したことより、なのはが出てきたことの方が重要だし」ハナクソホジホゾ

綜夜「なんだよそれー！！つかその顔やめるキモい！！」

酸欠「ドヤア」

【次回予告】

鎧達の出現と共に現れた綜夜の友人、なのは。彼女と協力し、鎧を退ける綜夜。

話を聞くになのはは、フェイトやはやと共に、鎧を操っている何者か達と戦っているらしい……。綜夜は守護神として、なのは達の友人として事件解決に協力することになるのだが……。

次回、第四話『悪夢の人形劇、開演』

少年よ、災を狩る刃となれ！！

四話『悪夢の人形劇、開演』（前書き）

ちよつと遅くなりました。

三龍さん、ストーム二号さん、ケンさん、赤黒さん、omega z
eroさん感想ありがとうございます！

四話『悪夢の人形劇、開演』

言うなれば、偶然の積重。

言うなれば、運命の悪戯。

言うなれば……宿命。

懺血の守護神の目前に現れたるは、金色の聖杖を持ちし純白の織天使。

高町なのは、彼女との出会いで、綜夜の物語は加速して行く……

「綜夜、さん？」

「なのはちゃん……？オイオイ、どうしたってここに？！」

「そ、それはこっちのセリフだよ！どうして綜夜さんがここに？！」

綜夜となのはは、急な再開に対して互いに混乱していた。

その背後を、鎧達が襲い掛かる！

「ッ！！！」

瞬間、綜夜はブレードエッジを振りぬき、なのはは金色の聖杖、レイジングハートから発した閃光で、鎧達を斬り、消し飛ばす。

既に二人は多数の鎧達に囲まれていた。

「話は後にしなくちゃいけないみたいだな。まずはこいつ等とランデブーだ！」

「う、うん……！行くよ、レイジングハート」

All right my master

綜夜がブラドエッジを器用にくるくると廻しながら言う。

なのははやや戸惑いがちだったが、すぐさまレイジングハートを構え直し、戦いに備えた。

鎧達が一斉に綜夜となのはに襲いかかる！

「どこのどいつだか知らねえが、こういう魔法を使う奴ってのは、いつの時代にもいるもんだな、まったく、よっと！」

綜夜は懺血の牙に刻まれた記憶から、目の前の鎧に類似した事例を思い出しながら、鎧達を次々に斬り伏せていく。

綜夜の言うとおり、いつの時代にもいるのだ、無機物を操って間接的に戦う者というのは。

この手の術を使う者は策士か臆病者か卑怯者か、もちろん例外はいくらでもあるし、過去の懺血の守護神達の中にもこういう戦い方を好む者はいなかったわけでは無い。

まあ詰まる所、綜夜にはこの鎧達が動くパターンが完全に読める、ということだ。

なぜならば綜夜、懺血の守護神はあらゆる戦い方の攻略者にして使用者^{マスター}、いわば達人なのだから。

ゆえに綜夜は鎧達がどういった動きをし、どういった戦法で来るかを完璧に読んでいた。

読まなくてもこの程度の鎧の動きなど、見切る所か止まっているも同然ではあったのだが。

「よっと、やっぱり中身はないんだな」

綜夜は向かってきた一体の鎧の兜をもぎ取る。

鎧の中は推測通り空洞、代わりに古代の文字でビッシリと呪文が掛かれていた。

「これがこいつらの可動プログラム……かなり古臭いなア、使ってるやつが時代遅れなのか？それとも古代遺産^{ロストロギア}ってやつ？」

ブツクサと独り言を言いながら、頭の無くなった鎧をぶった切ると、綜夜はニヤリと楽しそうな笑みを浮かべる。

目の前には鎧の大群が手には突撃槍^{ランス}を持ち、一斉に綜夜に向かって突進してきていた。

綜夜は兜をポンとリフティングの要領で真上に蹴り上げる。

「兜^{ポール}を相手の大群^{ゴール}に……」

そして、くるりと華麗に一回転すると、渾身の蹴りを兜に放った！！

「シューウウウウウウウウッ！！」

兜は赤熱した光弾となって突撃部隊へ向かっていき、凄まじい快音を立てて突撃部隊を蹴散らした。

「超！エキサイティン！！」

両手を挙げて楽しそうに叫ぶ綜夜。その上空で、なのはも戦っていた。

「綜夜さん、なんかよくわかんないけど凄い……私たちも頑張ろうレイジングハート！」

綜夜の気迫、というかなんというか、テンションの高さに気押され

た様子なのはであったが、すぐに気を取り直すと、レイジングハートを構えて鎧達に攻撃を開始する。

「デイバインバスター！」

桃色の閃光、なのはの得意とする砲撃魔法の一つである“デイバインバスター”が炸裂する。

その光に飲まれた鎧達が次々と爆散していく。

“魔導師”高町なのはを知る者なら、知らぬ者はいないだろう、デイバインバスターはそれほど彼女を象徴する魔法の一つなのだ。なのはの持つ大量の魔力、それから生み出される一撃必殺の威力を持つ砲撃。

しかしなのはの特色は威力だけに非ず、天性の才能とも言える砲撃手としての技量の高さ、そしてそれを伸ばし続ける彼女自身の努力。全てを総合してこそ、純白の織^{エースオブエース}天使高町なのはが存在するのだ。

「もういつかい………デイバインバスター！」

再度デイバインバスターが放たれ、鎧達が蒸発する。

だが、鎧達の数が減っている印象は全くない、無尽蔵に湧いて出る敵に、なのはの表情が曇る。

「前よりも明らかに多いね、フェイトちゃん達は大丈夫かな……

……」

「へえ、フェイトちゃんも魔法使えるのか」

「はにやつ?! 綜夜さん!?!」

いつの間にか隣に綜夜がいた、なのはは驚いて思わず声を上げる。

綜夜はそんななのはの反応を満足げに眺めると、自分たちを取り囲む鎧達を見回した。

空中、周囲は背後から足元まで敵が取り囲み、虎視眈々と狙っている。

いかになのはが砲撃魔法を得意としていても、これだけ敵が分散しているとあまり敵の数を削る事が出来ない。

ちまちま戦っていたとしても、ジリ貧になるだけだ。

「めんどくせえよなあ、これだけいると」

「う、うん………」

「………よし！一気にお片付けしちまうか！」

「へっ？」

もともと、それは普通の魔導師の話である。

懺血の守護神、仮にも神の名を冠する戦士にとって、この程度の数など大した事ではない。

綜夜は余裕の表情でブラドエッジを構える。

「なのはちゃん、1、2の3でありつたけの砲撃を正面に撃つてくれ」

「………うん、わかった！」

何をするつもりなのか、なのはは疑問に思うのだが、綜夜の自身たつぷりの表情を信じることにした。

綜夜はニツと笑って見せる。

なのはもフット微笑んで、レイジングハートを構え、チャージを始

める。

三秒間、その短い間に全力全開の砲撃を叩き込むため、なのはは意識を集中させる。

「それじゃあ行くぞ、1・・・2の・・・」

なのはの体内のリンカーコアが動きを加速する、レイジングハートがカードリッジをロードし、魔力はさらに大きくなる。

「3！」

綜夜はブラドエッジを投擲する。

なのはが極限まで蓄えた桜色の魔力が、最大威力のデイバインバスターとして放たれる。

「ブラドエッジ！」

猛回転するブラドエッジ、それはデイバインバスターの射線上でバラバラに砕けた！

ブラドエッジの破片が空中に散らばる。

デイバインバスターがブラドエッジに直撃し、弾かれた！

逸れたデイバインバスターは再び次の破片へと向かい、再び弾かれる！

ブラドエッジは反射板のような役割を持っていたのだ。

次々に弾かれ予測不可能、しかし確実に直撃コースを狙うデイバインバスターに鎧達は逃げ惑う意味もなく撃ち落されていく！

ほどなくして爆散の宴は終わり、なのは達を包囲していた鎧の集団はすべて跡形もなく消え去っていた。

「いようし、終わりっ！！」

使命を終えたブラドエッジの破片達は主の元へ帰り、元の一振りの剣へと戻る。

そして次に指輪となって、ガッツポーズを決める綜夜の人差し指にはまった。

「……………すごい、というかなんとというか……………」

なんとも奇天烈な戦い方だ、となのはは啞然とする。

綜夜は誰かの気配を感じ取ったのか、振り返る。

「なのは大丈夫……………そ、綜夜……………?」

そこにはなのはと同じく、キョトンとした顔をしたフェイトがいた。

「驚いたよ、綜夜が魔法を使えるなんて知らなかった」

「私も驚いたわ。剣士ならシグナムのライバルやな」

場所は変わって翠屋、奥のテーブルの上にケーキが並べられ、それをむしゃむしゃやりながらなのは、フェイト、はやて、綜夜が同席についていた。

「俺もみんなが魔導師だなんて知らなかったぜ。あ、なのはちゃん、そのチーズケーキ取って」

「はいチーズケーキ。でもどうして魔力があるのに、闇の書事件の時の魔力蒐集のターゲットにならなかつたの？」

「しらね、運が良かったんだろたぶん」

「な、なんやそれ……まあ確かに運が良かったとしか言えへんしなあ、あんちゃん、チョコケーキ取ってえな」

「ほいほい、あ、そうだあの鎧についてなんだが」

綜夜が一番気になっていた話題を切り出すと、三人の表情がわずかに引き締まった。

「うん、一週間ほど前から出るようになったんだ」

「目的もどこから現れてるかもわからへん、ただ結界と同時に現れて、私達魔導師を襲ってくるんや」

(懺血の牙を狙ってるわけじゃなさそうだな……)

綜夜はチーズケーキを頬張りながら考える。

自分に牙を託した少年の記憶からすると、彼がここに来たのは一昨日だ、鎧の出現時期から考えると懺血の牙関連ではない事が分かる。

「だとしたら、ただの魔法テロ？それとも悪い奴のお遊び？」

「それがわからなくて困ってるの……いくら倒してもキリがないし……」

「確かにあの数は相当だな、一人の犯行じゃないのは確かだ」
綜夜が頷く。

「でもクロノ達が調査してくれてるから、犯人が分かるのは時間の問題……だといんだけど……」

「クロノ？ああ、フェイトちゃんの義兄さんか」

「うん、綜夜とはあんまり会ったことないけど、クロノは管理局の執務官なんだ。エイミィやリンディ母さんも管理局員なんだ」

「管理局……時空管理局か……」

時空管理局……懺血の守護神たちとはあまり良い縁の無い組織である。

過去に一人だけ管理局に働いていた守護神がいたが、“彼女”は守護神となったことをきっかけに管理局を辞めてしまった。

（デカイ組織だ。力もあるし、悪い組織じゃあない。

正義感を持って働いてるやつもいっぱいいる……ま、裏には黒い噂や実態が腐るほどあるんだが、まあ時空世界を統合するほどの組織だ、そういうのが無いと逆に気味が悪いってもんよ）

何度となくかそういつた時空管理局の黒い部分と戦った記憶がある。時には権力を振りかざす横暴な幹部を成敗し、時には他の局員と協力して管理局の闇を暴き、そしてある時は懺血の牙というロストロギアを巡って……。

（協力した回数より、相反した回数のほうが多い気がするぜ……

・・・まあ俺たちの仕事がそういうのだからしょうがないっちゃしょうがないけど)

懺血の守護神は時空世界の平和を乱し、人々を襲う悪と戦う使命と運命を帯びている。

その性質上、時空管理局とは相反することが多いということだろう。まあ、それだけ時空管理局の闇の部分が色濃いかを示している、とも言えるかもしれない。

「いよーし、俺も事件解決に協力してやるぜ！」

そんな闇の色の濃い時空管理局に片足を突っ込んでいる少女たちを案じてかどうかは知らないが、綜夜は立ち上がってチーズケーキを天高く掲げる。

「いいの？」

なのはは窺うように綜夜の顔を覗き込む。

綜夜は二方つとその白い歯を覗かせた。

「ったりめえよオ！悪い奴が鳴海の街を襲ってるんだ、なにもしなきゃ男が廃るってもんよ！それに・・・」

「それに？」

「妹分達が頑張ってたんだ、兄貴分も良いとこ見せねえとダメだろ？」

綜夜は懺血の守護神として、なにより、少女たちの友人として立ち上がることを決めたのだった。

四話『悪夢の人形劇、開演』（後書き）

酸欠「ボールを相手のゴールにシュウウウッ！」

綜夜「超！エキサイティン！」

酸欠「鎧ドーム、鳴海オリジナルから！」

綜夜「なのはさん、凡人ドームも出たあ！」

【次回予告】

鎧事件の犯人を追うなのは達に協力する事になった綜夜。

ある日、会議をするために協力者全員で集まる事になる。

そこで綜夜は、烈火の将シグナムから模擬戦を持ちかけられる・・・

綜夜「こいつあ、どうするかな・・・？」

少年よ、災を狩る刃となれ　　！！

【応募】

現在、この作品に登場するキャラクターを募集しています。
期限は次の更新まで。

応募する場合はメッセージからよろしくお願いします。

どんなキャラクターでも可です、この作品の世界観を広げる皆様からの素敵なキャラをお待ちしております！

五話『懺血の牙、烈火に燃ゆる』（前書き）

なんか遅くなりました、すみません……。

omegazerさん、NT-Dさん、ケンさん、感想ありがとうございます！

勇住邁進さん、omegazerさん、赤黒さん、キャラクターの応募ありがとうございます！

キャラ募集はまだまだやっております、詳しくは後書きにて！

五話 『懺血の牙、烈火に燃ゆる』

「珈琲^{カフェ}、エスプレッソ！」

赤黒い光弾と纏った綜夜が、空の裂け目から現れた怪物を粉微塵に消し飛ばした。

「ったくよオ、朝っぱらから来るなよな」

早朝から現れた怪物達を倒した後、綜夜はいつもの丘のベンチに座り、ヤキソバパンをかじっていた。

なのは達の事件解決に協力すると言って、早一週間が過ぎていた。綜夜達が倒した鎧の数は、既に四桁を越してしまいそうな勢いである。

そして、懺血の牙を追う者達からの追ってである、あの怪物達。

綜夜のみを隔離する特殊な結界と共に現れ、懺血の牙のみを狙って襲い来る巨大な怪物。

普通の魔導師達なら苦戦する相手だろうが、綜夜からしてみれば単なる雑魚だ。

厄介なところがあるとするれば、いささか現れる時間が不定期だ、ということだろうか。

今日のように朝っぱらだったり、夜中だったり、一番困るのが授業中で、結界の存在を感知すると授業をサボらなければならない。

もっとも、それはなのは達と戦っている鎧と同じで、どちらも迷惑極まりない存在であった。

しかも問題はさらにあって。

「どっちの事件も進展無し、かあ……困った困った。こいつあ……

…どうすっかなあ……？」

そう、未だにどちらの事件も未だに進展していないのだ。犯人も何も分かっていない、五里霧中という例えが見事に似合う。だからこそ何も対策を練らないまま進むのにはいけない。ついに今晚、鎧に関する事件について、会議を行うそうだ。

八神家で行われ、時空管理局のリンディを筆頭としたなのは達を含む局員勢、そこに民間協力者である綜夜が入り、計十三名のメンバーで今後の動向などを決定するそうだ。

……ちなみに、綜夜は誰にも自分の中に懺血の牙というロストロギアが宿り、それによって守護神に覚醒、つまり魔法を使えるようになったことは一切話していない。

母を異世界から来た魔導師だ、ということにしておき、彼女から剣や魔法の手解きを受けた、という“設定”になっている、少々気は引けたが仕方あるまい。

(死人に口無しとは言うが、スマン、お袋！)

母親の出身地にでっちあげた異世界の事を、懺血の牙の記憶を元に事細かに話したら、なのは達は納得してくれた。

だが問題はリンディを始めとする、筋金入りの管理局員達だ。

法の番人でもあり、強力な情報の供給ラインを持っている彼らに、生半可な嘘はつけまい。

いざとなれば正直に事情を説明するつもりだが、なるべく隠し通すつもりだ。

疑うのはあまり好きでは無かったが、懺血の牙を狙っている者達は管理局だ、という仮説も捨てきれないのだ。

あまり騒ぎを大きくしてしまうと、護るべき者達が無駄に傷ついてしまうかもしれない。

なのは達は、確実に綜夜を一人で戦わせはしない、あの怪物に果敢に立ち向かっていくはずだ。

だが、正直なのは達の実力ではあの怪物は一匹倒すのでやっとだろう。

そんな危ない戦いに、可愛い妹分達を巻き込むわけにはいかない。だから綜夜は、わずかに後ろめたさを感じつつも、なのは達に嘘をつくのだった。

「おっと、そろそろガッコーに行かないとな！ 今日のもう出てくるんじゃないぞ、頼むから！」

綜夜は腕時計の針が、出発の時間を指している事に気付くと、修理したマウンテンバイクにまたがってゴーグルをかけた。

そして気まぐれな怪物たちが授業中に出てこない事を祈りつつ、学校に向かうのだった。

そして、綜夜の祈りが通じたのだろうか、何も変化が無いまま時間が過ぎて、昼休みになった。

綜夜は久しぶりに購買で好物の海鮮ヤキソバパンを購入できた事の上機嫌であった。

「とーきーをこえ、きざまれた〜、海鮮ヤキソバパン」

調子はずれの替え歌を歌いながら、軽い足取りで教室に戻っていく。くるくると回転しながら教室のドアを華麗に開ける、そこに綜夜の友人がいた。

「紅月君、今日はかなり上機嫌ですね。その元気を分けやがって

くださいコンチクショウ」

「おお？ 風下^{かざした}、どうしたってんだ目の下にクマなんぞつけて」

^{かざしたあかね}

風下茜、綜夜のクラスメートであり友人の少女だ。

下宿生であり、綜夜のボロアパートの近くにある高級マンションの上の方の階に住んでいる、いわゆるお金持ちのご令嬢というやつだ。聖祥大付属高等学校、というかこの学校全体には、こういった金持ちの娘息子、つまり言うところのボンボンが多い、彼女もまたそのうちの一人、ということだ。

「ああ、この忌々しいクマちゃんですか？ なんだが最近寝不足なんですよ……」

「夜更かししてたら肌が荒れるぞ！」

「ああ！ 言わないでください！ 今結構実感してるんですから！」

「ならなぜ早く寝ないんだ？」

「あーうー……それは、まあ乙女の秘密です、聞かないでおいてください」

「なにそれ気になる、超気になる」

「うふふ、秘密は女の子の魅力を底上げするんですよ……」

「クマのついた疲れ顔で言われても説得力がないぞ、風下！ー！」

「うふ、うふふふふふふふふふふふふふふふふ……おトイレ行つてきます」

「保健室に行つたほうがいい気がするがな、壊れかけてるぞ風下」

何やら疲れているらしい緑髪セミロングの眼鏡少女の背中を、海鮮ヤキソバパンをかじりながら見送った。

千鳥足でふらふらしている茜はなんとなく危なっかしかったが、周りの女友達に支えられてずりずりと保健室に連行されていたので、おそらく問題はないだろう。

その後も、特にこれと言った事件もなく、平和な、いつも通りの日常が過ぎ去っていった。

そして、放課後……。

八神家。

「おせえぞ綜夜！」

予定から少し遅れて来た綜夜に、玄関先でヴィータが激を飛ばした。

「わ、悪い悪い……ガッコーで先生に捕まっちゃまってよオ」

「ったく……会議始まるぞ、言い訳は良いから早く来いって！」

ヴィータにそう言われ、綜夜はちよつと小走りでリビングに上がる。既に綜夜を除く皆が来ていた。

そこで綜夜は管理局員であるクロノ達と対面、質問をされるもなん

とかごまかしたのは別の話。
そして、会議が始まった。

「それで、ここ一週間の鎧の出現ポイントの統計がコレ」

管理局員で優秀なオペレーター、エイミイが持ってきた異世界の機械が映し出すホログラムの鳴海町の地図に、赤いポインターが映し出される。

現在作戦会議の真ただ中だ、皆まじめな顔をしてホログラムの鳴海町の地図を観ている。綜夜は腕を組みながら、ソファーに座るのは達のの後ろに突っ立って、猫背になりながらホログラムの地図を眺めていた。
なのはが、何かに気付いたように声を上げる。

「……鎧があらわれるポイントが、毎回意外に近い……？」

「そそ、なのはちゃん正解、データを取るまで気付かなかったんだけどね」

「つまり、鎧達を生み出してる犯人はアジトから動いてないってこと？」

続いてフェイトが考え込むようにつぶやく。

「そう考えられなくもないな。だとしたら此方にとっては好都合極まりないが」

フェイトの義兄、黒髪のクロノ執務官がそれに同意した。

クロノは綜夜と同じ年の少年で、てっきり自分より年上だと思っていた綜夜は大変驚いていた。

「相手の居場所が分かればこっちの物だな！」

「分かれば、の話だがな……」

「うぐぐ……テンション下がる事言つなよな執務官さん！」

綜夜とクロノは対象的で、クロノが理詰めで行動するタイプなら、綜夜は己の感情と感覚に従って行動するタイプだ。

フェイトはそれを少しだけ面白いと感じていたのは、小さな内緒だ。

「……どちらにせよ、皆にはもうしばらく鎧達を凌いでもらうしか無さそうだな」

クロノが溜め息をつく。

エイミィが機械のスイッチを切って、ホログラムの地図を消した。

「でも、今度本局の方から増員が来るんやろ？」

はやてが首を傾げる。

「ええ、あなた達ばかりに苦労はさせられないものね」

エメラルドグリーンの髪を持つ、フェイトの義母、クロノの実母であり、今この場の総監督であるリンディが頷いた。

「明後日にはつくそうよ、それまで、悪いけどあなたにも協力してもらおうね、紅月君」

「イエスマム、こんなしがない一介の剣士の力でよければ、幾らで

もお貸ししましょ」

綜夜が大袈裟に頭を下げ、大袈裟に言ってみせると、リンディは面白そうに笑って。

「ふふ、ありがとう、頼りにしてるわね」

少し話してみてもリンディ達は管理局の人間の中で、善良な部分に入るといふ事が分かった。

綜夜の推測に過ぎなかったが、彼らは他人のために仕事をしている方の人間だ。

懺血の牙が伝える記憶の中にある、あらゆる欲にまみれたような、そんな下卑な輩ではない。

懺血の守護神と同じように、自らの魂に高潔な誇りを持っている人々だ。

綜夜は安堵を覚えた。

しかし、同時に不安も覚える。

（本局から、増員ねえ。どんな曲者がくるかな……）

明後日に到着すると言う、本局からの増員、不確定要素の一だ。

管理局の本丸である本局、時空世界の中で最も力を持つ組織の一つと言っても差し支えないだろう。

故に時空世界の中でも最も黒く、大きく歪んでいる組織の一つ、と言えるだろう。

（変なヤツが来ないといいんだがな……）

綜夜は小さな懸念のタンコブを目の上に抱く。

そっこうしている間に時間が過ぎて行き、気付けば会議は終わって

いた。

「それじゃあ、皆今日はお疲れ様、ゆっくり休んでね」

なのはとフェイトはどうやら八神家に泊まって行くらしい、リンデイ達は一足先に帰って行った。

「んー、じゃあ俺も帰るかね」

綜夜がポリポリと頭を搔きながら言う。
が、その背中に声かけられた。

「紅月、少し顔を貸してくれるか」

「おやおや、シグナム姐さん、どったねよ？」

八神家の姐さん、はやてに仕えるヴォルケンリッターが一人、烈火の将ことシグナムだ。

「噂によると、お前は中々腕の立つ剣士だそうだな」

噂、おそらくはやてが言ったのだろう。

「^{デート}模擬戦のお誘いってヤツ？」

「ふふ、物わかりが良いな、どうだ今から」

綜夜は少し考えた後。

「良いよ、据膳食わぬはなんとやらだ！」

というわけで、急遽綜夜とシグナムの模擬戦が組まれることになった。
結界は湖の騎士ことシャマルが担当、やや呆れ顔だったものの、快く承諾してくれた。

夜のビルの屋上で、綜夜とシグナムが対峙する。

「レヴァンティン、セットアップ」

古の遺産が産み出した火焰の騎士、その愛剣が姿を現し、シグナムの姿もまた、騎士の甲冑に包まれる。
烈火の将が、綜夜の前に立った。

「ブラドエッジ」

一見何の変哲もない鋼色の長剣、しかし実態は懺血の牙により何者よりも強化された、懺血の守護神の剣、ブラドエッジが綜夜の手に握られる。

綜夜の姿は変わらない。

“紅月綜夜”にはバリアジャケットも騎士甲冑もない、懺血の守護神となった時のみ、受け継がれた戦衣は綜夜の身にまとわれるのだ。ス、とシグナムがレヴァンティンを構える、日本の剣道に似た構えである。

一方、綜夜はクルクルとブラドエッジを回してから、突き出すようにしてその切っ先をシグナムに向けた。

綜夜はそのままステップを踏んで、シグナムに突きを繰り返す。

キーン！

シグナムが綜夜の突きを弾く、その時起こった火花が、戦いの火蓋を切った！

レヴァンティンの片刃とブラドエッジの両刃が空を舞い、互いにぶつかって火花を散らす。

レヴァンティンを握るシグナムとブラドエッジを握る綜夜は、一歩踏み込み、一歩引き、優雅な舞踏のような動きを繰り返す、お互いの力量を量る。

ガキーン！

一際強い刃と刃の衝突と共に、綜夜とシグナムはバックステップで互いの間に距離を取り、剣を構え直す。

「なかなかやるな、紅月」

「シグナム姐さんこそ、流石はベルカの騎士ってトコ？」

「その世辞は素直に受け取っておこうか、だが……“騎士”の力はそこまで甘くはない！」

シグナムが地面を蹴って綜夜に肉薄、レヴァンティンを一直線に振り下ろす。

すかさず綜夜はブラドエッジで受け止める、綜夜の体に凄まじい衝撃と重みが走った。

「なるほどオ……結構手を抜いてたって事か……！ だけどっ！！」

「な！？」

ニヤリと綜夜は口端を上げると、気合いと共にシグナムを空中へ吹

き飛ばす。

シグナムは予想外の力に驚きながらも、空中で姿勢を正した。

「まだまだこつからがシヨウタイムなんだな！　これがさ！！」

綜夜がブラドエッジの刃をなぞり、ブラドエッジに赤黒い魔力が纏われて行く。

シグナムはそれを見て、不敵に頬を上げる。

「^{ブラドエッジ}血染めの刃とは良く言った物だな……だがこちらの禍焰の杖剣も^{レヴァンティン}名ばかりでは無い！」

シグナムの気合いと共にレヴァンティンの刃に、シグナムの魔力、熱き火焰が纏われる。

そして、シグナムはまっすぐに綜夜に突撃して行く！

「四番バッター紅月綜夜！　狙うは電工掲示板！！」

綜夜が楽しげな表情で叫び、ブラドエッジを野球のバットのように振りかぶる！

「はああああああああああつ！！」

「iiiiiiiiiiiiiiやつ！！」

守護者の持つ^{ブラドエッジ}血染めの刃と将の持つ^{レヴァンティン}禍焰の杖剣が衝突する。

その衝撃は大気を震わせ、ビルの屋上のコンクリートを触れずして抉り、窓ガラスをぶち破った。

燃え上がる濁血の紅と紫電の焰、自らが焼かれるのもいとわず綜夜とシグナムは互いに一步も引かず、鏝迫り合いをしていた。

押し出そうと互いに魔力を刃に込める、その度に衝撃が激しく大気を唸らせる。

業火と破壊の宴、その終焉がもうそこまでやってきていた。しかし。

「水入りか……興が削がれた物だ」

シグナムが呟く、綜夜もコクンと頷いて、鏢迫り合いを止めた。

「誰だよそこにいるのは、こっちはお楽しみだったんだぜエ？」

クルクルとブラドエッジを回し、そして傍らの地面に突き立て、綜夜は介入者の方へと振り向く。

そこには仄暗い蒼を纏った異形の剣士が、月を背にたたずんでいた。右手に長い長い爪、それに滴るは血、口には避けんばかりの狂笑を携えている。

「……………！！」

綜夜の感覚が鋭敏に異形から発せられる殺気を捉えた。

シグナムも同様に身構え、レヴァンティを構え直す。

デタラメに、あらゆる方向へ無作為に発せられる殺気。

憎しみも怒りも悲しみも含んでいない、純粋な狂気を混ぜ込んだ殺気。

全てを突き差し、切り裂き、押し潰し、そして屠る、ただただそれだけを目的とする、野獣よりも野蛮な殺気。

「あ！ オイ、待ちやがれッ！！」

しかし、その爪の矛先は綜夜とシグナムに向けられる事無く、怪物

は夜の闇に溶け込むかのように、鳴海の街へ紛れ込んで行った。

「気配が完全に消えた……結界の外に出たのか……」

「なんだったんだ……？ アイツは……」

綜夜とシグナムは自分たちの戦いが邪魔された事すら忘れ、先ほどの鮮烈な印象を残した異形の残した殺気の残り香に、いまだ警戒を解けずにいた。

鳴海の町は既に、影よりも暗い何かが巢食っていた……。

五話『懺血の牙、烈火に燃ゆる』（後書き）

酸欠「引き続きキャラクターの募集をしているよ！

この前はメッセーじに募集してたけど、面倒くさいから感想からでも募集するようにしたよ！！よろしくね！！！！」

綜夜「必死すぎワロス」

【次回予告】

ついに鎧事件の犯人の居場所が判明した。

その場所に綜夜は驚きを隠せない、そこへ今までにない鎧の大群が襲いかかる！！

しかし、現れたのは鎧だけでは無かった……！！

綜夜「なにがなんだか分からんが、行くぜ、キリカ！！」

次回、第六話『銀の剣を持つ男』

少年よ、災を狩る刃となれ　！！

六話『銀の剣を持つ男』（前書き）

赤黒さん、omegazerさん、ケンさん、ストーム二号さん、
感想ありがとうございます！

六話『銀の剣を持つ男』

会議と異形の出現から、二日。
。 。
鎧も怪物も現れず、実に平和な一時を綜夜は学校で過ごしていた。一ついつもと違つとすれば、クラスメートの風下茜が休んでいる、という事だけだった。
どうやら体調不良らしい。

「まあ、体調悪いって言つてたしなあ……」

「なんだなんだ紅月い？ 風下がいなくてサミシーってかア？」

ヤキソバパンをかじりながら、空いた茜の席を眺める綜夜に、クラスメートの悪友（男）がちよっかいを出して来た。

「こんど翠屋のケーキでも見舞いに持つてってやるかな」

「おい、ちよつとー、無視ですかい紅月くん!？」

無視されたクラスメートがなにやら喚くが、綜夜は相手にしない。するだけ無駄だと分かっているからだ。

ちなみに、その判断は“綜夜の経験”から判断している。

いや“懺血の牙の経験”からも、あまり本気で相手をするのは骨折り損以外の何ものでもない、と判断できるのだが。

まあ、この際無視してしまうので、関係はないだろう。

「ちよつとトイレ行って来る」

綜夜は席を立つ。

クラスメートがつまらなさそうな顔で見送った。

「……なんだ、いっぱいじゃないか……。仕方ない、プランBだ！一年のトイレを借りるか」

トイレに行つてみると、どうにも他の生徒でいっぱいだ、昼休みだから仕方ないと言えば仕方ない。

綜夜は素直に諦めてプランB、他のトイレを使う作戦を発令、ちょっと小走りでの階へ上がる。

しかし階段を上がっている最中、見知った顔に会って足を止めた。

「んお、祝はむじちゃん。今から教室移動か？」

「……」

灰色の長い髪、赤銅色の双眸には黒縁の眼鏡が掛かっている。

肌の色は健康的な褐色、そして全体的に華奢なその体は、少しでも力を入れれば簡単に傷付いてしまいそうだ。

彼女の名は『寿祝ことほぎ』、一年生であり、綜夜の後輩にあたる。

「……」

「相変わらず無口だなア。ほううスマイルスマイル、女の子は笑つた方が可愛いぞ〜？」

綜夜は無表情な祝を笑わせようと、指で頬を釣り上げたりして、変な顔をしてみせる。

しかし、祝の表情に変化は無い。

祝は、綜夜と同じように、両親を亡くし、一人で暮らしている。

それが影響しているのかどうかは分からなかったが、祝はとても無

表情で無口なのだ。

友達も少なく、やや周囲からは浮いた存在となってしまうている。そんな祝に、綜夜はよく世話を焼いている。

鉄面皮である祝がそれをどう思っているか分からなかったが、やや不安ではあったのだが。

「……………すまん、今からトイレなんだ！ またな！」

綜夜は、表情をまったく変えなかった祝に頭を下げて、がに股で階段を駆け上がって行く。

もう便意が限界まで来ていた、守護者として、便意に勝つ事はそうそう楽な事では無いのだ。

「……………ありがとう……………」

そんな綜夜の背中を眺めながら、祝は一言、小さな声で呟いた。

その首に掛かったチョーカーに付いた、小さな赤銅色の玉石が、キラリ、と輝いた。

そして、綜夜がトイレに走っているのと、同時刻、小等部の屋上に。
て。

昼ご飯を食べ終わったなのはがはやての肩をちょいちょい、とつついた。

「はやてちゃん、はやてちゃん」

「なんや?」

「なんでフェイトちゃんはあるにそわそわしてるの?」

「それはな、なのはちゃん」

「うん」

「“ラブ”やでえ……」

「ラブなの?」

「ラブや……」

「ふ、二人とも、何をニヤニヤしてるのかな?」

「なんでもなーい」

「なんでもないで、ちょっとフェイトちゃんがラブってるからな
あ」

「ら、ラブ……?」

「ほら、今日本局から来る予定の人、キリカさんだっけ?」

「う、うん……イズル先生がどうしたの?」

「ラブやる」

「へ?」

「ラヴやろ、フェイトちゃんは」

「えっ、えええ！？」

「フェイトちゃんはイズル先生好きやろ言つとんねんでえ！」

「そ、そんな事なっ……………」

「しらはっくれようとしてもあかんでワレエ！ 証拠はあがつとんや〜！！」

「このプロマイド、キリカさんのだよね」

「あっ……………！ な、なんでなのはがそれを？！」

「さっきフェイトちゃんのポケットから落ちたの拾ったの」

「ふふふ……………意中の相手のプロマイド持って、しかもそれが本人の直筆サイン入りとはなあ……………。しかもご丁寧にラミネート加工して、カード入れに大事に大事にしまつとる……………これでラヴやなかつたらなんやと言っんや！ さあ！ 正直に言いや！ イズル先生の事好き〜！ って言っつてみい？！」

「うっ……………うっ……………は、はやてえ……………周りに誰かいたら聞かれちゃっよお……………。わ、私が……………その……………み、認めるから返してよお……………」

「……………あ、あかん……………フェイトちゃんの羞恥に耐えて涙ぐみつつ顔を赤らめる様を覗いていたら……………なんや……………なんか……………弾けそう……………」

私の中で……なにかS的なものが……！」

「BBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBB」

「進化キャンセルッ！！」

「は、はやてちゃん！！」

一通りの喧騒の後、調子に乗りまくっていたはやての頭に綜夜の鉄拳が降ってきた。

すかさず綜夜ははやての手に握られていたプロマイドを取り上げ、フェイトに投げ渡す。

「あいてて……女の子の頭を躊躇なく殴らんでや……」

「はやてちゃんが暗黒進化しそうになってたからな」

「綜夜、ありがとう」

フェイトは大事そうにプロマイドを胸ポケットにしまいながら、綜夜に例を言う。

「ん、気にするなよ。俺も気にしないからさ」

「ってことは、綜夜も、き、聞いて……？」

「だから忘れるって」

「ほ……ホントに忘れてね……は、恥ずかしいからっ……」

「フェイトちゃんかわいいー」

なのはが頬を赤らめるフェイトを、まるで愛玩動物でも愛でるかのよう撫でる。

フェイトはより一層顔を赤くしてうつむく。

「それにしても、あんちゃんはなんでここにおんのや？ しかもものっそいがに股で」

「トイレが……」

「？」

「トイレがどこも満室なんだ……！！」

「あー……」

「もう駄目かもわからんね」

「あ、諦めたらあかん！ 少なくともここでは諦めんといて！」

「お、おう……もう一回全部のトイレ回ってみる……」

「い、行ってらっしゃい……！！」

なのは達に見送られて、綜夜は再び走り出す、がに股で。この後、綜夜がついに耐えきれなくなり、懺血の牙を使ってワープし、家のトイレで用を足したのはちょっとした内緒である。

夕暮れ時。

ハオラウン家の一室で、エイミイはディスプレイに向かってデータと格闘していた。

「もう少し……もう少しで割り出せる……」

今までなのは達が戦ってきた鎧達、その出現ポイント。

それらをまとめ、データ化し、犯人の場所を割り出す。

なかなか難しい作業ではあったが、諦めずにやり続けたここ数週間の頑張りがもうすぐ身を結ぼうとしている。

「居場所なんか分かったら、あんたなんかイチコロなんだからね……?」

エイミイは不敵に、もう少しで尻尾を掴むことのできる犯人に、聞こえもしない挑発を試みる。

「これで……チエックメイトよ!」

そして、エイミイが最後のデータをディスプレイに打ち込もうとした、その時!

けたましい警告音と共に、ディスプレイが強制的に切り替わる。

「敵?! こんな時に……!!」

エイミイは歯を食いしばる。

外のクロノ達が異変を感じ取ったらしい、ディスプレイ上の地図に

クロノやヴォルケンリッターと言った仲間たちの反応が現れ始めた。やや遅れてなのは達の反応も現れ、綜夜という民間協力者も現れる。

「皆、お願いね……って……へ……なにこれ……?!」

エイミイは再び最後の作業に入ろうとする、一刻も早く犯人の居場所を割り出そうとしたエイミイであったが、次の瞬間、その表情は氷りつく。

地図上に現れた鎧達の数、いつもならば多くて二百体ほどのその数。

しかし、今エイミイの目の前にあるデータは、鎧達の総数は、いつもの十倍……いや、三十倍……!

約六千体の鎧達が、鳴海の街に現れたのだ……!

しかも数はなおも増え続けている……!

「クロノ君……!!」

エイミイは不安を覚えるが、すぐさま今自分がすべきことを思い出し、データをディスプレイに出す。

(犯人の居場所さえわかれば……!!)

今はオペレータとして、自分にできることをする。

エイミイは再び作業を開始した。

「なんなんだ、この数は……?!」

綜夜は驚愕する。

結界が張られ、外に出てみれば、空がすべて鎧達の大群で覆い尽くされているではないか。

ただただ異常だ。

そしてその雲の所々では爆発が起こっている、仲間たちが戦っているのが分かる。

綜夜は険しい顔で、ブラドエッジをセットアップする。
そして。

「出し惜しみをしてる場合じゃないよな……！！」

綜夜の髪と目が、そしてブラドエッジの姿が変わる。

赤く、より攻撃的に、そしてその身は古の戦衣に包まれる。

懺血の守護神ガーディアンが、ここに顕現した。

「だけど下にはや町がある、加減しねえとな！」

綜夜は自分に言い聞かせるように言うと、暗い鉄の空へ飛翔して行く。

瞬間、五十は下らない鎧達がランスを構えて突撃してくる。

ブラドエッジを横一線に振り抜き、鎧達を破壊する。

その時振り撒かれた魔力の残照が、槍となって他の鎧達に突き刺さっていく。

そして突き刺さった魔力の槍は次々に爆裂し、周囲の鎧を巻き込んで消し飛んでいく。

しかし次から次へと鎧達は現れ、綜夜へ攻撃を仕掛ける。

軽くあしらって、また次、また次。

無尽蔵に湧き出す敵、綜夜には何ともなかったが、他の仲間たちは苦戦しているに違いない。

管理局からの増援は、一体どうなっているのか、と文句も言いたくなるが、しかし言っている場合では無いのも事実。
綜夜は一心不乱にブラドエッジで敵を叩ききりながら、仲間達の方へ駆けて行った。

「ッー！」

鎧達が綜夜目掛けて突貫してくる。

数はやはり多い、綜夜はブラドエッジに握る手に力を込めた。
だが……。

ゾク。

「ツツツ！」

背中に、首筋に、心臓に。

急所全てに刃を突き付けられているような感覚が、綜夜を襲った。

凄まじい殺気、一昨日の異形の物と似通った物だ。

懺血の守護神ですら、いや懺血の守護神だからこそ、綜夜はそれに
“恐怖”を覚え、身をかわず。

「はぁあっー！」

聞き慣れぬ男の声と共に、綜夜に向かって来た全ての鎧達は、青い光の一閃で、バラバラに砕け散った！

綜夜は急いで振り返る。

しかし、そこに異形とその殺気はおらず、ただ一人の“剣士”がそこにいた。

「大丈夫か、君！」

流れるような亜麻色の髪、凜とした雰囲気を持つ青い目。
手には麗しき銀の剣を持つ男が、そこにいた。

(こいつ確か……フェイトちゃんが持ってたプロマイドの……)

男からは殺気はおろか、一寸ほどの敵意も、邪念も感じ取れない。

「私はキリカ・イズル。時空管理局本局空挺派遣調査部隊“ハウ
ンドイーグル”隊長だ。リンディ提督からの救援要請を受けてこ
こに来た、君は？」

紳士的な男だ、と綜夜は思う。

しかし同時に、得体の知れない違和感のような何かが、キリカ・イ
ズルと名乗る男から滲み出ているのも感じていた。
だが、すぐにそれは思考の端に追いやられる。

「ああ、俺は紅月綜夜！ ちょっとナリは変わってるがこの事件の
民間協力者だ」

「君が……？ っと、無駄な話をしている場合ではないようだな…
…」

「ああ……！ この状況、何が何だか分らんが、行くぜ、キリカ
！」

「任せてくれ、行くぞ、シルバー！」

そして二人の剣士はなのは達のいるであろう方向へ向かう。
鎧達が行く手をさえぎるが、二人の剣の腕の前には、紙クズ同然で

あつた。

道中で綜夜はキリカの戦いぶりを観ていたが、その腕前はまさに“
劍豪”と呼ぶに相応しかった。

臨機応変、柔と剛を兼ねそろえた剣捌き……キリカは、相当の達人
であつた。

(すげえな、フェイトちゃんが惚れるのも分かるぜ)

綜夜はフェイトの頬を赤らめた顔を思い出す。

先生、と言っていた、どうやらフェイトはキリカに師事を受けてい
るようだ。

(顔もよし、スタイルもよし、性格もよさげ、おまけに強い。な
るほど女の子にモテる要素は全部持つてんだな)

別段羨ましくもなんともなかったが、綜夜はしみじみとキリカの横
顔を観ながらそう思う。

すると、頭の中へ声が届いた。

(皆、聞いて！)

「念話！？ エイミーさんか！」

(犯人の居場所が分かったわ！ 座標はJ 24！ 高層マンション
の屋上よ！)

綜夜はハツとする。

次々に飛来する鎧達の本拠地、犯人の居場所、その場所が、綜夜の
良く知る場所だったからだ。

「紅月君……！？」

キリカが綜夜の異変に気づき、声をかける。

綜夜は頭を振る、思い浮かべた最悪の状況を振り払う。

「クソっ……！ 外れてくれよ、俺のクソツタレな予想よオ……！」

そう、その場所は、そのマンションは、綜夜のクラスメートである、
風下茜の住んでいるマンションだったのだ。

六話『銀の剣を持つ男』（後書き）

綜夜「な、なんか今回詰め込み過ぎじゃないか……？」

酸欠「良いじゃん別に、頑張るのお前だし」ホジホジ

綜夜「うっぜえなコイツ！」

酸欠「あ、キャラクター募集はまだやってます、ドシドシご応募
くださいな」

【次回予告】

怒涛のごとく押し寄せる敵、なのは達と合流した綜夜は、ついに犯
人と対峙する！

そこにいたのは……！

物語が、急速に動き出す！

次回第六話『災、現る』

少年よ、災を狩る刃となれ
！

七話『災、現る（前編）』（前書き）

忙しいので予定より少なめの更新になります、あうあうあー。

ケンさん、omegazerさん、赤黒さん、勇住邁進さん、感想ありがとうございます！

他の方からの感想、キャラ応募、お待ちしております！

七話『災、現る（前編）』

「ギガントオオ・シユラアアアアアアク!!」

無限に湧き出る敵。

「駆けよ隼　シユツルムファルケン!!」

鎧、鉄の外皮のみを持つ、奇妙な襲撃者。

「サンダー……レイジツ!!」

それらを斬る、潰す、爆散させる。

「デアポリック・エミツション!!」

ひたすら、ひたすら、ひたすら。

「デイバイン・バスタアアアアア!!」

何体の鎧を打ち砕いた？　何体の鎧を切り刻んだ？　何体の鎧を塵芥と変えた？

「ておあああああアッ!!」

十？　下るまい。

「クラーヴアイントツ!!」

百？ いや、まだ多い。

「ステインガーブレイド・エクスキューションシフト!!」

千？ もう考えるのも、馬鹿馬鹿しい。

「はあっ、はあっ!!」

息が荒くなる。

魔力は底を尽きかけている。

体力は限界に達しかけている。

だが、心は健在、心は折れない。

何者にも負けぬ輝きを放つ不屈の心、精神、魂。

英雄の条件でもあるそれが、今、なのは達をもっとも苦しめている要因の一つ、だったのかもしれない。

「ぐっ……!!」

諦めてしまえば、無機質な心なき敵に対する恐怖心に襲われる事も無かっただろう。

折れてしまえば、ひっきりになしに飛んでくる刃の応酬から逃げる必要も無かっただろう。

屈してしまえば、体を焼く疲労と痛みにも身を震わせる事も無かっただろう。

「っはあああああああ!!」

だが、諦めない。

しかし、折れない。

それでも、屈しない。

理由などない、ただ、それをするのがもの凄く嫌で、嫌で溜まらな
いからだ。

クロノが、シャマルが、ザフィーラが、シグナムが、ヴィータが、
はやてが、フェイトが、なのはが、全てそう思っていた。

負けるのは良い、ただ、諦めるのだけは、絶対に嫌だ、と。

しかし……現実也是非常にも、その思いを呑み込もうとしていた。

「きゃあああつ!?!」

なのはが接近を許してしまった斧を装備した鎧の一撃で吹き飛び、
ビルの屋上へ叩き付けられる。

それを追い打つかのように、鎧の大群が土煙の上がるビルの屋上へ
群がる。

「なのは!?!」

親友の危機に蒼白となったソニックフォームのフェイトがなのはを
助けようと急ぐ、だがその目の前に鎧達が現れ、道を阻んだ。

「ッ　どけええええええッ!?!」

フェイトはバルディッシュをザンバーモードに変形させ、鎧達を薙
ぎ払う。

しかしその背を突撃槍を持つ鎧が狙っていた。

「フェイトちゃん!?!」

はやての叫び声が付いた時、フェイトはようやくその敵の存在
に気付く。

「え！？」

だが隙だらけのフェイトは避けられないと悟り、防御に集中しようとする。

しかし研ぎ澄まされた槍の刃を受け切れるほど、ソニックフォームに防御力はない。

どれだけ魔力を防御に回したところで、致命的なダメージを受けるのには違いなかった。

(駄目だっ……！)

フェイトは絶望し、身構え、目をつむる。

身を貫かれる痛みが、フェイトの体を襲う……ことは、なかった。

「え……？」

暖かい、誰かに抱かれている。

フェイトはゆっくりと目を開ける。

「大丈夫ですか、テストロツサさん」

「い……イズル先生……！！」

そこには、銀の剣を持つ男にして、フェイトの師、キリカ・イズルがいた。

フェイトは呆然とするが、キリカの腕に抱えられている現状を理解すると、ボン！ と顔を真っ赤に染め上げた。

「あ、えと、そのっ……」

「ふふ、その分だと無事なようですね。流石はテストロッサさんだ」

「は……はい……。っ！なのは……！！ イズル先生、なのはが……！！」

キリカの腕から離れるフェイトは、なのはの事を思い出し、すぐに血相を変えた。

そんな様子のフェイトに対して、キリカはなだめるかのように笑顔を浮かべる。

「高町さんなら大丈夫ですよ、“彼”が来ています」

「彼……？ きゃ！」

ドゴオオオオオオン！！

フェイトは突如鳴り響いたその轟音に、思わず悲鳴を上げた。

赤黒い血のような閃光が、一瞬鳴海の街を染め上げ、なのはへ群がっていた鎧達は跡形も無く消し飛ぶ。

そして降臨する、懺血の守護神ガイディアンが！

「頑張ったな、なのは。こっからは俺がやってやる」

目に見えて憤怒の相を浮かべる綜夜は、なのはを片腕に抱いて、赤黒い魔力のオーラを纏っていた。

「綜夜さん、その力は……」

「まあ、いつかは話そうと思ってたんだがな。今回は後、兄貴分に任せて妹分はそこで休んでな！」

雰囲気完全に別人と化した綜夜に、なのはは不安げな表情をする。だが、綜夜がニツと不敵ないつもの笑みを浮かべると、なのははほっとしたような表情に変わった。

変わっていない、目の前の剣士は、紅月綜夜という自分の友人だと気づいたのだ。

「おいおい、休んでろって言ったろ？」

「まだ、頑張れるよ……！」

なのはは微笑んでみせる、だがその頭を綜夜はコツン、と叩いた。

「あたっ?!」

「休んでろ、無理して頑張られても困るんだよ」

「で、でも……」

「でも、じゃない、休め。何事にも全力なのは良いけどな、それで周りを困らせたり、心配させたりするんじゃない。お前が頑張る分、俺が頑張ってやるからさ」

「……うん、分かった……気を付けてね……綜夜さん」

「任せとけて」

綜夜の説得に、なのはも渋々応じる。

綜夜は不安そうなのはの頭を撫でると、足元に魔法陣を展開させた。

するとなのはのいるビルの屋上を覆うように薄い魔力の膜が張られる、結界である。
なのははじわじわと自分の魔力や体力が回復していることに気付いた。

「じゃ、行ってくる!」

「あ、うんっ、気を付けてね!」

少々あつけにとられているなのはを尻目に、綜夜は鎧の群れがぐぐめく空へ飛翔した。
すかさず鎧達が群がってくる。

「ブラドエッジ……ドライブ!」

バシユウウウウウウウッ!!

ブラドエッジかの刀身に凄まじい魔力のオーラが纏われ、巨大な刃となったそれが鎧達を跡形もなく消し飛ばして行く。

綜夜の一振りで百を超える鎧達が消えてゆく。

遠方のクロノやはやてたちも、その異常な光景を目の当たりにし、驚愕する。

「な……?!」

当たり前だっただろう。

なぜなら彼らが知る最大威力、例えればなのはのスターライトブレイカーの威力とほとんど同じ物が、すぐ近くで振り回されているのだ。

(皆! いったんあのビルに避難するんだ!)

そして聞こえてくる、綜夜の念話。

(あ、紅月、アレは君なのか?!)

クロノが驚愕の声を上げる。

(まあな！ 本局様とやらの増員も来てるぜ！

それより早くビルの結界の中に入れてくれ、あそこなら大丈夫だ
！)

(だがここの敵はどうする?! まさか君一人で片づけるなんて
！)

そんな冗談は言わないだろうな ！

そうクロノが言いかけた時、クロノの視界が一瞬赤く染まった。

そして大気が震える轟音と共に、次々と爆散していく鎧達。

「冗談だろう……?!」

クロノは思わず口に出してしまった。

次々に、あんなに空を覆っていた鎧達が消え去って行くのだ。

しかも自分たちに影響はない、はやてもヴォルケンリッターも無事
だ。

一体どういう魔法を使っているのか、あの冴えない剣士だと思っ
ていた男のどこにそんな力が眠っていたというのか、クロノは眉間に
しわを寄せることしかできなかった。

そんなクロノの目の前に、髪と目を赤く染めた綜夜が、いつも通り
のへらへらした顔で現れた。

「いよう、悪い冗談で悪かったな、クロノ君？」

「ッ まったく本当だ、君と言いなのはと言い……この世界出身の魔導師はどうしてこうも僕を驚かせるんだ……？」

「ははは、褒め言葉かそりゃ？」

「そう受け取っておいてくれ、君の指示に従う、なのは達もそこにいるようだからな」

「 現状を纏めましょう」

キリカが結界の中で声を上げた。

皆それに頷く、キリカは柔らかな笑みを浮かべて、魔力のディスプレイを展開する。

今綜夜達がいるビルの屋上はJ - 19地区、犯人がいるJ - 24地区にかなり近い場所だ。

しかし結界の外には多数の鎧達がいる。

綜夜が掃討して十分と経たない内に、湧いてきてしまった。

しかし綜夜の張った結界の内部には侵入する事ができず、鎧達はその周囲をびゅんびゅんと飛び回っているだけだった。

どうやら敵は無尽蔵、となれば一気に犯人を捕まえるのが得策だろうが、しかし敵の本陣に突っ込んだとしても、鎧達に身動きを止められてしまう可能性は大きい、その上罨がある可能性もないわけではない。

そしてここに留まって鎧達の足止めをする部隊と、敵本陣に殴り込

みに行く部隊、それら二手に分かれることとなった。
しばらくの話し合いの末。

殴り込み部隊は綜夜、キリカ、クロノの少数精鋭。
足止め部隊はなのはをはじめとしたそれ以外のメンバーで構成される事になった。

足止め部隊には、間もなくしてキリカの部下たちが加勢に来るとい
う。

「待ってるよ、風下……！」

綜夜はブラドエッジを握る手を強める。

J-24のとあるマンション、そこに住むクラスメイト、風下茜を
救う決意を固めるように。

七話『災、現る（前編）』（後書き）

酸欠「あばばばっばばば」

綜夜「だめだ、睡眠不足で半狂乱になってやがる……！！」

酸欠「あぶ、カダイ、モウヤリタクナイオ」

綜夜「お前が他の趣味に時間を費やし過ぎたのがいけないんだろ！」

【次回予告】

鎧事件は終焉を迎える。

そして、物語は新たな局面へ ？！

次回、八話『災、現る（後編）』

少年よ、災を狩る刃となれ ！！

八話『災、現る（後編）』（前書き）

お待たせしました後篇です、もうなんか深夜のテンションで書き上げたんで色々おかしいですがスルーの方向でww
なるべく皆様からのキャラとプレゼントを出そうと努力しましたが、駄目でした……スミマセン……。
では、お楽しみくださいませ！

八話 『災、現る（後編）』

「じゃあ、行くぞー！」

綜夜達がそういつてJ・24地区へ飛び立った後、なのは達もまた敵の鎧達を足止めするために、結界の外へ飛び出した。

すぐに大量の鎧が各々の視界を埋め尽くすが、すぐさますべて綜夜の発した赤黒の衝撃派によって微塵に吹き飛ばす。

しかし直後に次の鎧達が現れ始める、が流石にさきほどよりは数は少ない。

「私達も行こう……！」

なのははレイジングハートを構えながら言う、綜夜達の姿はもう見えない。

ここからは首謀者が捕まるまでの無制限サバイバルだ。

現状の戦力は、なのは、フェイト、はやて、ヴィータ、シグナム、シヤマル、ザフィーラの計七人、アルフはリンディとエイミィを守るために結界が張られたテストロッサ家にいる。

ここにいる皆が皆相当の実力者だが、圧倒的な物量の前だとやや不安になる戦力ではあった。

波のように鎧達が迫る、なのははレイジングハートを握りしめる手を強めた。

そして戦いが始まる、と思われたその直前。

「グレイヴ・ディザスター」

カッ！！

暗雲の空を駆ける火炎を纏った蒼穹の閃光。

その閃光は鎧達の波を貫き、決壊させる。

「?!」

なのは達が驚いて振り向く。

そこには黒いショートの髪、そして茶色の狼のような鋭い眼光を宿した瞳を持った一人の青年がいた。

その手にはバズーカと大剣を組み合わせたような外見の武器が握られていた。

「時空管理局空挺派遣調査部隊『ハウンドイーグル』部隊員、
“南雲海”。現場に到着、キリカ“クソ”隊長のありがた〜い直
令にしたがい……お前らを援護してやる」

「は……?」

呆気にとられるのは、他の皆も同様だ。

そして気づく海と名乗った青年の後ろで、鎧が剣を振り上げているのを。

しかし全員が警告の声を上げるより早く、その鎧は何者かに頭を打ち抜かれ、炎上、落下した。

『海、危なかったわね。でもこれで貸し一よ』

そして海の持つデバイスから、女性の声が響いた。

しかしAIの声ではない、どうやら遠くからの通信らしい。

海は面倒臭そうに頭をボリボリ搔くと、バツが悪そうにその声に答えた。

「なんだあ？ 後で温泉にでも連れて行ってか？」

『ふふ、考えておくわ。あら、ごめんなさいね。私の名前は“セリア・ヒューミリアス”。こいつやキリカ隊長と同じ時空管理局空挺派遣調査部隊『ハウンドイーグル』の部隊員よ。今からあなたたちを援護するわ』

「あ、はい、お願いします」

なんだかわけが分からない、といった様子で頭を下げるのは。

「つーわけだ。ま、敵さんがいっぱい来たみたいだから、おしゃべりはここまでだな、言いたいことがあったらこの後キリカのクソ野郎に言っとけ、俺は知らん」

海が握られた愛用のデバイス、“ノートウング”を大剣に変形させながら言う。

そして、なのは達の戦いが始まった。

一方で、綜夜達は鎧達を蹴散らしながら進んでいた。

「それにしても、驚いたな……君は一体何者なんだ……」

綜夜の戦闘能力に、クロノが驚いたように声を上げた。

ここまでの敵はほとんど、というか全て綜夜が蹴散らしている。

百は下らないかと思われる軍団を一撃で消し飛ばしたりと、クロノはまるでこの世の物とは思えないような物を見る気分だった。

「まあ、これが終わったたらゆっくり話すさ……」

綜夜は浮かぬ顔でそれに応えた。

そついうのも、ついに目的地であるマンションに到着したからだ。

異常な光景が広がっていた。

マンションの屋上に、まるで城塞のような建設物が出現していたのだ。

その城塞には幾つかの砲門と、バリスタのような物が取り付けられて、巨大な門は硬く閉ざされている。

要塞は来る者全てを拒む、冷たき翡翠色の城塞。

その砲門は間もなく来訪者である綜夜達に向かって火を噴いた！

「ッ！！」

そこから発射された極大の魔力レーザーを、三人は散開して回避する。

そのばらけた三人を今度はバリスタから発射された、魔力の矢が狙う。

幸いにして狙いは単調、しかし不幸にして発射されるその矢の数は、まさに“弾幕”と言って差し支えないほどの物だ。

「突破する！」

クロノが矢の弾幕と、間隔を空けて発射する砲撃の合間を縫いながら、門にスティングァーブレイドを撃ち込む！

爆発が起こるが、門は無傷！

「予想はしていたが……やはり硬いな！！」

クロノが苦渋に満ちた表情で呟く。

「ここは私に任せてください！」

そんなクロノの隣を突っ切って、キリカが悠然と城塞へ突貫して行く！

矢と砲撃の嵐を華麗に避けながら、キリカは猛進する！

そして城塞の門へと肉薄したキリカは、己の剣、シルバーに青い魔力を込めた！

銀の聖剣が深蒼の輝きを受けて、妖艶に煌めき、光の一閃が走る！！

「貫くは銀の閃光！ アージェント……ステイカー！！」

ガオオオオオオオオオオオン！！

アージェント・ステイカー 魔力と対象の魔法プログラムに干渉、破壊するその放たれた銀の聖剣での突きが、門を打ち貫く！

強固に閉じられた城門は跡形も無く消し飛び、その衝撃で城塞は悲鳴を上げるかのように轟音を響かせた！

「ここは私が引き受けます！ お二人は一刻も早く犯人の確保を！」

キリカが振り向いて叫ぶ、その視線の先には鎧達の大群が迫っていた。

「大丈夫なんだろうな？！」

綜夜が疑問を投げかけると、キリカはフツと口端を上げて頷く。

「危なくなったら逃げますよ、ご安心を！」

「上等！ 行くぜクロノ！」

「っ、ああ！」

そしてクロノと綜夜は城塞の中へと侵入していった。

その背中をキリカは見送ると、敵の大群へと振り向く。

キリカはニタリと口端を上げ、指を鳴らす。

砲台とバリスタが、再び火を噴いた。

懺血の守護神が結界内部へ侵入。懺血の牙の動作良好。“イクサリオン”との接触まで間もなく。イクサリオン、アクティブモードへと移行、同時にメモリーの改竄を続行。

イレギュラー一名を確認。データ照合、空挺部隊アースラ所属、クロノ・ハオラウンと確定。処理は“兇刃”に任せる。

プロジェクトGOA、第二ステップへ間もなく進行します

広き城塞の謁見の間の玉座に座す純白の鎧騎士は、自らの剣を携え静かに佇んでいた。

その記憶を駆け巡るのは、忌まわしき記憶。

守るべき人を、主を、守れなかったという騎士として恥ずべき記憶。鎧騎士は人では無かった、彼は主を守るために創造された人形の騎

士なのだ。

しかしその白鉄と魔導に包まれた体ではあっても、肉を持たずとも、人で非ずとも、鎧騎士には気高き高潔な騎士としての魂が宿っていた。

ゆえに、あの記憶が騎士の高潔な魂に軋みをもたらさず。

人であつたなら、幾度となく身を震わせて嘆き悲しんだらう。

しかしそれはできない、だが、それでいい。

今は守るだけ、新しき主を、この身全てをかけて。

守れなかつた主を迫害し、殺した、あの忌まわしき“血の色をした災厄の剣士”から、そして、全ての魔導師から。

「お前が、この事件の犯人か？」

来た　それも、ヤツが、血色の災厄が　！！

来訪者の登場にガチャリ、と重い音を立てながら、イクサリオン純白の鎧騎士は玉座から立つ。

その手に握られるは騎士王の剣、白熱せし太陽の刃を持つ両刃の剣

“エクスカリバー”。

災厄を迎え撃つために、騎士王は立つ、新たな主を守るために。

その記憶が、偽られた物だとも知らずに。

「イクサリオン！？」

クロノが驚きの声を上げる、綜夜もまた意外そうな表情をしていた。

「クロノ君、知ってるのか？」

「あれは本局の執務官達が血眼になって探しているロストロギアだ……数週間前に封印されていたのが急に起動して、異世界へ逃亡してしまつたんだ、まさかこんな所にあるなんて……！」

「俺としては、現存してたのが驚きだな、先の大戦で全て破壊されたもんだとばかり思ってたが……っと、来るみたいだぜ、気を付けるよ！」

イクサリオンがエクスカリバーを振るう！

そこから発せられるのは白き閃光の斬撃！！

綜夜へと真っ直ぐに向かうそれを、綜夜はブレードエッジを一閃して、薙ぎ払った！

「ぐっ?!」

クロノがあまりの衝撃に、後方へ吹き飛ばす。

素早く受け身を取って顔を上げると、クロノはそこにはもはや自分が入り込める世界が無い事を知る。

若草色を纏った白の刃と、血塗られた赤黒の刃が互いにぶつかり合う。

その度に凄まじい衝撃音と大気の振動が巻き起こり、クロノを戦慄させる。

「は、ははっ……僕は神話の世界にでも来たのか……!?!」

クロノは思わず笑ってしまう。

ぶつかり合う刃の威力は、Sランクは下らぬほどのものだ。

時空震が起こらないのが不思議なほどに研ぎ澄まされたそのパワーは、自分が、ニンゲンが辿りつける域を、はるかに超越している。

まさに御伽草子、子どもが描いたような荒唐無稽な活劇、それを間近で見せられているクロノの心は、驚きも呆れも通り越して、冷静さを彼に与えていた。

「紅月！ そいつが動いているという事は、この近くにそいつの所有者がいるという事だ！ 僕は所有者を探してくる！ そいつは君に任せるぞー！！」

「ああ、任されたッ！」

綜夜が大きく頷く、それを確認したクロノは謁見の間の奥へと向かって行く。

イクサリオンがクロノを足止めしようと、衝撃波を放つが、すかさず綜夜がそれを防ぐ。

「おおっと、ダンスはまだ終わっちゃいないぜ！」

綜夜がブレードエッジで切りかかる、イクサリオンがエクスカリバーでそれに応じる。

鎧の奥に光る赤い瞳には、高貴なる魂の怒りと憎しみが沸き立っていた。

エクスカリバーが光を放ち、綜夜を吹き飛ばす。

クルクルと空中で回転し、姿勢を立て直した綜夜に、イクサリオンは追撃をかけた。

再び懺血の刃と白陽の刃が火炎を散らす。

(コイツの剣、すげえ憎しみが伝わってきやがる……！！)

剣士とは、己が刃に魂を込めて振るうものである。

どれだけ未発達な剣士の刃でも刃には魂が籠るものなのだ。

そして相手の刃に込められた魂は、達人であれば達人であるほど鮮明に理解することができるようになる。

上等の剣士同士ならば刃を交わすことが、そのまま言葉を交わすよ

りも詳しい魂の交流をすることができるとだ。

綜夜はイクサリオオンが振るう刃から、純粹な憎しみを感じ取った。そしてその憎しみが、全て自分に向けられているものだというところも。

綜夜は頭をフル回転させながら、イクサリオオンに関する記憶を思い出す。

しかし、思い当たる節がない。

イクサリオオンという魔導兵器とは、確かに戦った者がいる。

大戦の最中に現れた災を狩る最中に、当時量産されていたイクサリオオンを何体も倒した。

だが、どれもこの魔導兵器に恨みの感情を抱かれるような、そんな事はしていないはずだ。

それに違和感がある。

古代ベルカの技術、それは確かに今見ても目を見張るものだ。

だがしかし、このイクサリオオンの個体は、それにしても強すぎる。持っている剣もそうだ、こんな強い力を持った“宝具”のような剣を、当時のイクサリオオンは持っていなかった。

(特別にカスタムされた機体なのか……?)

綜夜はブラドエッジを振りながら思考する。

剣を通して伝わる憎しみは、エクスカリバーに宿る破壊の光をさらに増幅させているようであった。

「まあ、なんだって良いさ！ お前を足止めして、クロノ君を待つだけだ！」

そのクロノは、ひたすらに長い回廊を移動していた。
空間が圧縮されているのか、凄まじく長い距離を飛行している。

「反応はこの先……待っているよ！」

サーチによって生体反応があった場所へ、クロノは飛行していた。
不自然な事と言えば、反応が一步たりとも動いていないことと、追
っ手も何も来ないことだろうか。

何かの罫だろうが、今進むことに支障がないのならば、好都合だ、
とクロノは考える。

今は時間が惜しい。

早くしなければ、フェイト達の安否が危ぶまれるからだ。

クロノは加速する。

ひたすらに暗かった回廊に、光が差し込んできた、そして反応も近
くなる。

光と反応の元へクロノが辿り着いた時、そこにいた人物に、クロノ
は焦った声をかけられた。

「すみません、そのアナタ！　ここから出してくれませんか！？」

友達を……白^{はく}を止めないと!!！」

そこにいたのは、綜夜の良く知る人物だった。

「^{ヌストイカ}果実酒！」

綜夜は剣戟によってイクサリオンを吹き飛ばす。そしてすぐさまイクサリオンを踏みつけて、そのコアがあるはずのプレートメイルにブラドエッジを突きつけた。

「お前さんの負けだ、大人しくしろい」

綜夜は溜息をつく。

イクサリオンはなんとかして動こうとするが、両手足にバインドをかけられてピクリとも動けなかった。

「白!!」

綜夜の耳に聞き覚えのある声が響いた。

綜夜は驚いて振り返る、そこには茜がいた。

「風下っ、だいじょうぶ……」

「ひゃあ！ 紅月が不良になってやがります!? ああ今はそんな事はともかく！ 白、大丈夫ですか?!」

何か言いかけた綜夜を押しつけて、茜はイクサリオンの元でしゃがんだ。

「ああ、自慢の真っ白ボディが……後で拭かないと！」

「……どゆこと?」

さきほどまでの緊張が一気にほぐれてしまった。

綜夜は肩透かしを食らったような気分で、目をパチクリさせる。

「その子がイクサリオンのマスターだ……はあ……疲れた……」

「おお、クロノ君、大丈夫か!？」

クロノが息を荒げながら現れる。

驚く綜夜だったが、すぐに気を取り直して茜の方へ向いた。

「風下あ、説明してくれ……状況が分からなさすぎる」

「あ、ああ、はい、スミマセン……あ、白、あなたはお座りしてなさい!」

茜が綜夜達の方へ振り向く。

バインドから解除されたイクサリオンのエクスカリバーを振り上げるが、茜の一声ですぐに大人しくなり、正座して頂垂れた。

「ええっと……どこからお話ししましょうか……」。

一か月前、私の家に白が、イクサリオンのがやってきました。

突然光の輪に包まれて現れた白は、その時見た私を所有者として認定したらしくて……それから、白との生活が始まったんです。

白は良い子ですよ、気も利きますし、家事も上手なんです。

ですけど数週間前から、いきなり家の中に結界を張るようになって……私は、それに気付いた時には、あの鎧達を発生させていたんです。

私が止めるように言っても、なぜかやめてくれなくて……今は、良いんですけど……」。

それで、昨日から私は光のケージに閉じ込められて、ハオラウンさんが来るまで、閉じ込められていたんです……だいたい端折ってますけど、ハオラウンさんには詳しく話しました」

「ううん……」

クロノが首をひねる。

「ほ、本当ですよ！ 嘘はついてません！」

「そうだぜクロノ、少なくとも風下は嘘をつくような奴じゃない」

「ああ……疑っているわけではないんだ。外の鎧達も消えたと、フ
イト達から連絡が入ったし……ただ気になるんだ」

「何が？」

「イクサリオンは、とても忠実なデバイスだったと文献や資料に残
っている。それに本局の技術でも干渉できない複雑なプログラムの
元で動いているらしい。
それが、マスターの命令を無視して動くことがあるのか、と思って、
な」

「確かにな……ま、今は茜の言う事を聞いてるみたいだし、いざと
なったら俺が止めるさ」

綜夜が不敵な笑みを浮かべる。

「そうしてくれると助かるよ、どうにも僕には手に負えなさそうだ
からな。

とりあえず、君とイクサリオンは一時的に管理局……といっても僕
の家だが、でまた話を詳しく聞かせてもらおう」

「はい、事情調査ってやつですね！」

「前科持ちになるかもな」

「や、やめてください！ 嫌ですよ！」

ケラケラと笑う綜夜、茜は焦った様子でわたわたと首を横に振る。

「紅月、君もだぞ。その力について教えてもらわないといけない、話によっては君も前科持ちになるかもな？」

「げ、マジか」

「はは、冗談さ。二人とも事件の解決には協力してくれたし、イクサリオンをなんとかすれば、万事解決だ。そうお咎めもないだろう」

「白と、お別れしなくちゃいけないんですか……？」

茜が少し暗い顔になって、イクサリオンを見る。

イクサリオンもまた、茜を見た。

「すまない、それは……」

僕の口からはまだ何も言えない、そうクロノが言おうとした時だった。

「 処刑、さ、今ここで……ね……！」

「ッ！！ クロノ！ 逃げろ！！」

「は？」

グチャ。

水音と切り裂かれる音が、広い謁見の間に響いた。

「な……！？ なぜあなたが……こんな……?!」

クロノが、自分の腹から咲いた真っ赤な花、自分の血を浴びて真っ赤に染まった銀の刃を見ながら言う。
背後から、刺されたのだ、誰に？

「キリカツ！！ てめえええええ！！」

綜夜が叫ぶ。

そう、クロノを刺したのは、他にもない、キリカ・イズルだったのだ！

キリカの表情は口が避けんばかりに笑いを浮かべ、狂気と殺気を周囲にふりまいていた。

クロノの腹から銀剣、シルバーが抜かれ、クロノは力なく倒れる。

「あ……あ……」

茜は怯えきつてへなへなと膝を折る。

イクサリオンが茜を庇うかのように、茜の前に躍り出た。

「フフフ……クロノ執務官、君は“栄誉の殉職”さ」

「?! テメエ何を言って……!!」

倒れたクロノに、キリカは甘く、狂気をはらんだ実に楽しげな声で話しかける。

綜夜が怒りに満ちた声で叫んだ。

「クロノ・ハオラウンは、ロストロギア、イクサリオンを奪った事件の首謀者、紅月綜夜に後ろから刺されて殉職」

綜夜は言葉を失う。

得体のしれない、底知れぬ狂気のおいがキリカからあふれ出ていたのだ。

「その場に居合わせた現地人の少女、風下茜を惨殺する」

そしてキリカは言葉を続ける、まるで物語を紡いでいるかのように。物語、自分にとって都合のいい、最高のストーリー。

綜夜は背筋が凍るのを感じた。

「そして、キリカ・イズルによって討伐される……良い話だ、明日のトップニュースになるだろうね……じゃあ、死んでくれ」

そして、銀剣の切っ先を茜に向け、凄まじい速度で切りかかった!

綜夜がブレードエッジでその兇刃を受け止める！

「意味が分かんねえぞ！ お前！！！」

「ははは！ 犠牲だよ！ 私が“英雄”^{キロ}になるためのね！！！」

「はあ？！」

ガキーン！ と凄まじい音を立てて、二人は距離を離れた。

「私は、キリカ・イズルは英雄になるために生まれてきた……英雄になるには、多くの功績を得なければいけない……そのための犠牲なのさ、君たちは」

「つまり、お前の名誉のために、死ねたのか？！ お前の名誉のためにクロノを？！」

「その通り！ だが彼も本望だろう！ 私が英雄になるための糧となつて死んだのだから！！！」

キリカは笑いながら言った。

もはやその表情に、前までの優しい物は一つもない。

あるのは狂気だけ、純粹な狂気と狂喜だ。

キリカが笑いながら凄まじい威力の斬撃波を、でたために飛ばす！
それは謁見の間の壁を、床を崩し、全てを無造作に破壊して行く！！
その光景はまさにこの世の地獄だった、本性を現したキリカは地獄を作り出す“災”そのものだったのだ！

「クソ！！！」

綜夜が障壁を張ってそれを防ぐ、だが予想以上の威力に、余波が後ろにいたイクサリオンと茜を襲った！

「きゃあああ！！！」

茜が悲鳴を上げる、イクサリオンが茜を抱きかかえるようにして庇った！

そしてイクサリオンと茜の体を、光が包んでいく！

「転移する気か？！」

キリカが怒りを露わにし、一際大きな斬撃波を飛ばす！

「やらせるかああああああ！！！」

綜夜が渾身の一撃で、その斬撃波を食い止める！
凄まじい爆発が巻き起こり、土煙が上がった！！

「…………クソ、クソ、クソ…………！！ 逃げたかつ！！ 逃げたかつ！！」

土煙を吹き払ったキリカは、こつ然と姿を消した綜夜達に気付くと、怒り狂って残された城塞結界を、シルバーの一閃で破壊した。
そして、クロノを見つける。

キリカは近づいて確認する、まだクロノは息があった。

(チ……急所を外したか……いや待てよ……)

キリカはにたりと口端を邪悪に曲げると、クロノをまるで介抱するかのように抱きかかえた。

なぜなら、その背後には、顔面蒼白となったフェイトがいたのだ。

そしてキリカは“とても悔しそうな顔”をして、“涙を流しながら”振り返る。

その表情と、抱きかかえられるクロノを見て、フェイトが手に持ったバルディッシュを落とした。

「フェイトさん……“僕はあなたの大切な人を守れなかった”……」

災は、その炎をゆっくりと広げていく。

懺血の守護神がイクサリオンと転移。計画に齟齬発生、プラン

A-7失敗。プランD-8へ移行し、プロジェクトGOAを再開、

懺血の守護神の現在位置の探索を開始します。

八話『災、現る（後編）』（後書き）

酸欠「ううう、もうだめだ……死ぬる……クロノ君は死んでないけど」

綜夜「これから大変だしな、お前も俺も」

酸欠「そうだよ、次回からは新章突入だよ！　つーか文章と構成がひどすぎてやってらんないよ！　リングとか祝ちゃんとか出せなかつたし！」

綜夜「あ、勇往邁進さんが書いてる魔法少女リリカルなのはアサシンの殺し手ももよろしく！　この作品の三次創作だ！」

酸欠「いや勇往邁進さんホントありがとうございます、楽しみに待ってますんで！」

綜夜「あ、ちなみにキャラ募集はまだやってるらしいぜ！　じゃあまた次回で会おう！！」

【次回予告】

物語は新たな舞台へ！

異世界へ転移した綜夜達は、それぞれの目的のため、旅を始める！
そしてある再会が、物語に新たな色を重ねる！

次回九話『見知らぬ大地へ』

災を狩る刃が行く
！

九話『見知らぬ大地へ』（前書き）

うほほい、回を追うことに雑になっている気がするWW
なにはともあれ皆様ありがとうございました！

（宣伝）

勇往邁進様の作品

『魔法少女リリカルなのはA・S×ファンタシースターポータブル

2 時と空を駆ける戦士』
と

『魔法少女リリカルなのは 閃光の殺し手 アサシン』
もよろしく願います、とっても面白いよ！

九話 『見知らぬ大地へ』

幼いころの夢を見た。

まだ親父もお袋も生きていて、今のアパートより立派な家に住んでいた頃の夢だ。

親父は無愛想だったけど、強くて凛々しくて、俺はその大きな背中をいつでも追いかけていた。

お袋はちよつとおつちよちよいだったけど、美人で優しく、いつも俺を包んでくれていた。

今でも、こうして手を伸ばせば二人に届く気がして　。

むにん。

「……………マシユマロ……………」

綜夜が手にとっても気持ちの良い感覚を握りしめて目を覚ますと、そこには顔を真っ赤にする寿祝（こゝろあがり）と、その手に収まるちよつどよいサイズの胸を服の上から握りしめている、自分の手があった。

「おおう、ラッキースケベ？」

「……………ただの……………スケベ」

スパーン！ と綜夜の頬に見事なピンタが決まったとき。

ひりひりと赤くなっている頬をさすりながら、綜夜は改めて状況を確認した。

覚えている最後の記憶は、イクサリオンの転移機能を利用してキリ力達の前から逃げた、という記憶だ。

そして現在自分がいるのは、地球ではないどこかの世界の町か村の宿屋だ。

どうやら転移自体は成功したらしい、茜も隣のベットですやすやと寝ている。

今現在自分たちがいる世界は、完全に手作りの木造の家や、窓から見える自然たつぷりの未開つぶりから察するに、あまり技術レベルは高くないようだ。

となれば管理局が手中に収めている管理世界でない確率も、無きにしも非ずである。

(やれやれ……また管理局とやりあう事になるとはねえ、何度目だこりゃあ)

綜夜は頭を掻きながら、ため息をついた。

部屋のドアが開いて、祝が入ってきた。

祝が持つ盆の上にあったのは、器に入った何やら見たこともない、湯気を立てる数々の食べ物であった。

「じはん」

「ん、サンキュ」

祝の短い言葉で大体の意味を感じ取ると、綜夜は部屋にある小さなテーブルに座った。

そして懺血の守護神としてもお初にお目にかかる料理の数々を食べ始めた。

「んん、こりゃ塩味がきいててうまいな。お、こっちは栗っばいぞ！」

歓声を上げつつほおばる。

どうにも食事という文化は世界ごと、歴史ごとに形を変幻自在に変えてくれて面白い。

懺血の守護神の中にある大量の記録、それが一千年だろうと一万年だろうと、食べ物新しく、より奇抜により優雅により泥臭くその形を変える、飽きないものだ、食事というのは。

そんな事を考えながら食べていると、あっという間に食事が終わって、綜夜はふう、と一つ安堵したように溜息をついた。

「……しっかし、なんでまた祝ちゃんがこんな所にいるんだ？ 雰囲気もなんかいつもと違うし」

ふと、綜夜が切り出す。

綜夜は学校の制服のままだったが、祝はどことなく民族衣装というか、古風な旅の服のような物を着こんでいて、いつもよりも少しだけ柔和な雰囲気を漂わせていた。

祝は少しだけ虚空を見つめた後、綜夜のほうへ向きなおる。

「……この子が、私をここに。そして私は、強くなるために……」

首のチョーカー、いつもの祝と唯一変わらないその装飾品が、ピカリと控えめに光る。

綜夜は、なんとなく察した。

「なるほどね、詳しい事は聞かないほうがいいか」

「今は……綜夜は、なんで……？」

「ん？ ああ、実はな……」

祝の疑問に、綜夜はこれまでの事を話した。

懺血の牙の事、茜の事、そしてキリカの事……聞いていく内に、祝の顔色は少しづつ険しくなっていた。

「……どうするの……？」

「風下を安全な場所にかくまって、キリ力を倒す。んでもって懺血の牙を狙ってる奴らを徹底的に潰す」

綜夜は拳を握りしめる。

「クロノ君がやられちゃったのは、俺の責任だからな……もう少し早く動いてれば……」

クロノは無事なのだろうか、綜夜の頭の中に一抹の不安がよぎる。だが相手はあのキリ力だ、あれほどの狂気の持ち主なら、何をしても不思議ではない。

もしクロノが生きていたとしても、キリ力がそれを利用しないはずはないだろう。

綜夜は自分の至らなさにわずかながら苦悩していた。

「……つとまあこんな所だ」

綜夜はニツと微笑んでみせる。

祝の赤銅色の瞳は憂いを帯びて、懺血の守護神を見つめている。

「そんな顔すんなって、いつも言ってるだろ、女の子は笑顔が一番だって」

綜夜は少し物悲しそうな祝に対して、いつものように頬を釣り上げたりして、ふざけてみる。

祝は思わずぷつと噴出した、綜夜は満足げに口端を上げる。

「そうだ、祝ちゃん、さっき強くなりたいて言ってたよな？」

そして綜夜は思いついたようにポンと手を叩く。

祝は少し戸惑うが、大人しく正直にうなずいてみせた。

それに綜夜、懺血の守護神はこう言ってみせた。

「じゃあ、ちよつとの間、俺が鍛えてやるよ」

ハウンドイーグル所属し型時空航行艦“ストウームレイド” 医務室

クロノは昏睡状態にあった。

医師は内臓に激しい損傷を受け、その上で何か“呪い”のような物を埋め込まれたのではないか、と言っていた。

フェイトは最近、クロノの眠るベットの隣で、いつ目が覚めるか分からない兄の覚醒を待ち続けていた。

だが、クロノは目を覚ましてはくれない、微笑んでくれない。

フェイトの心は、小さな軋みと悲鳴を上げていた。

(どうして…… 綜夜……)

綜夜、紅月綜夜　この事件の真犯人にしてクロノを傷つけた張本人。

友人の裏切りと家族の半喪失。

この出来事は、フェイトの心に眠っている小さな小さな傷跡をゆっくりと広げて行く。

実母、プレシア・テストロツサが遺したその傷が、今になって血を流し始めたのだ。

そして、その傷跡を埋めようと、災が花束を持って現れる。

「フェイトさん、ここにいましたか」

「イズル、先生……」

ニコリと“悲しい”微笑みを浮かべながらキリカが現れる。

「フェイトさん、みなさんが心配していますよ……“私”です」

「……」

「……認めたくないのは、分かります。“私”も紅月さんが犯人だと
は、認めたくありません”」

「先生……」

「ですが、目を逸らしてはいけません、執務官たるもの、“真実”を見極めるために、行動しなければいけないのです」

キリカは、そつとフェイトの手を取る。
フェイトの顔が、僅かに朱に染まった。

「共に行きましょうフェイトさん。“ 真実を見極め” 今闘うべきものは、何者なのかを」

そしてキリカは、フェイトの耳元でそうささやいた。
フェイトは、少しだけ涙を浮かべたが、きつと前を向いて真っ直ぐに答える。

「はい………!」

「“ ありがとう”、フェイトさん」

ニコリとキリカが微笑む。

握られた手から、フェイトは『自分の中に何かが芽生えるのを』感じた。

そして物語の歯車は、軋みを上げながらゆっくりと動き始めるのだった。

どこか、遠い遠い世界で

「……………」

一人の『キャスト』が、自室の隅っこで、何やら膝を抱えたままションボリしている。

「……………ううっ……………これでも、二回『グラール』を救った男で『リトルウィング』の稼ぎ頭なんだぞ、俺は……………」

涙に袖を濡らす彼の傍らには一枚の置き書きが転がっている。

「皆でしばらく休みを取ってバカンスに行くてくるカラ、その間留守番よろしくおねがいネー」という趣旨のメモだ。

最初、会社に誰もいないときは、焦りに焦ったが、このメモを見つけた時に思わず自分でも良く分からない悲鳴を上げてしまったのは内緒だ。

置いてけぼりを喰らう機械の英雄は一人だれもない部屋の片隅で、おそらく彼の人生上ベスト3に入るぐらいみじめな気持ちになっていたのだった。

「はやて……………うう……………優しいお前が懐かしいよ……………」

そして機械の英雄は一人虚空を見上げて呟く。

その言葉を聞き入れたのか、世界は、彼の座っている真下に……………。
ガポン！

「……………は？」

大きな穴をあけましたとき。

「聞いてな……………うわああああああああああ！！！！」

“時と空を駆ける戦士”は、再び魔法の世界へと足を運び入れる事になるのだった。

九話『見知らぬ大地へ』（後書き）

酸欠「話があんまり進まなかったよ」

綜夜「いやまあまだ第2章が始まったばかりだしな」

酸欠「つーわけで今回は勇往邁進様無双ですな（出演キャラ的な意味で）」

茜「私ねてるだけでしたよね」「ドヨンドヨン」

綜夜「あ、諦めるなって！ 出番あるよ！ きっと！」

【次回予告】

剣と剣がぶつかり合う時、道は示される！

綜夜の目の前に現れたその道とは？！

そして暗躍する災、キリカ……！！

災の焰を果たして綜夜は止められるのか？！

次回十話『氷切に咲く花』

災を狩る刃が行く ！

十話『氷切に咲く花』（前書き）

皆様、感想ありがとうございます！

たびたび更新が遅れている気がする、うわああん（涙）
そして今回もあんまり話が進みません、ナンテコッタ。

十話『氷切に咲く花』

「さあ、どっからでも来い！」

綜夜がブレードエッジをクルクル回しながら、はむじ相対する祝に言う。

場所は宿屋の前の開けた土地だ、そこに綜夜が結界を敷いて、小さな不可視かつ不干渉のリングを作った。

小さな、といっても外から見た話であり、空間圧縮によって結界内
部はかなりの広さを誇っている。

タツ、と祝が地面を蹴る。

そして跳躍、その瞬間に祝の空拳に一本の長剣が握られる。

その赤銅色の刃はしなりとした曲線を描いており、分かりやすく例えるのなら、中東の刀剣類に似通った姿をしている。

ヒュオン！！ と空を裂く音と共に曲刀が振るわれる。

斬撃の軌跡にはほのかに雪のような微粒子が纏われている。

キーン！ とブレードエッジが曲刀の刃を受けとめる。

「打ち込みが弱いな」

「自覚は……してるッ！」

祝が余裕たつぷりの綜夜からいったん距離を置いた、と思えば瞬間的に距離を再び詰めて、今度は先ほどの剣閃とは見まごうほどの素早さで、連撃を繰り出した！

キンキンキン！！

細い金属同士のぶつかり合う音が何度も間を開けずに響く。

「手数で勝負する型か」

綜夜がにやりと口端を開く。

まるで一流のシェフが、最高級材料を目の前にした時のように、綜夜の頭の中にバチリと電流が走り、思考を活性化させる。

その電流は一瞬でその“材料”が調理をされた最強の完成形を描き、そしてそこまで至る最高の過程を紡ぐ。

そうして出来上がった調理方法をもとに、綜夜は料理^{レッスン}を開始する！

「レッスン！」

「!?!」

綜夜の一撃によって、祝の体が大きく弾かれたかに思えば、綜夜はすぐさま姿勢を正してその目の前に肉薄していた！

「攻撃はより早く！」

ブン！ と綜夜がブラドエッジを振りかぶる！

祝はすかさず曲刀を構え、その一撃を受け流す。

しかし息つく間もなく、というよりも与えられず、次の、そのまた次の、そしてまたその次の流れるような連撃が祝を襲う！

「そして、よりダイナミックに！」

次の一撃は今までの一撃よりも強い一撃だった。

ガキーン！ と音が弾けたかに思えば、祝の全身に痺れが走る

！！

「ッ！！」

強い力を中途半端に受けた反動が、痺れとなって祝の体を襲ったの

だ。
気が付けば綜夜はすでに、吹き飛ばされる祝の後ろに回り込んでいた！

(速い！！)

祝は思わず、自分が思ってしまったことにハツとする。
祝はスピードならば、誰よりも早い、そう自負していた。
が、綜夜はそれより速く、そして強い。
己を遥かに凌駕する綜夜の、懺血の守護神ガーディアンの力を、祝は身を持って体感するのだった。
そして吹き飛ばされる祝の体は、綜夜によって優しく受け止められる。

「どうよ、分かった？」

片腕で華奢な祝を抱えながら、ケロリと笑って見せる綜夜。

「……鍛え方が足りないっていうのは、分かった」

祝はフツと、その口元に僅かな微笑をたたえながら答えるのだった。
だが、その瞬間、祝は綜夜の表情に陰りが指すのを確認する。
綜夜の片腕から離れ、祝は体勢を立て直す。
綜夜は刺すような視線を空に向ける、結界はいつの間にか解除されていた。

「……祝ちゃん、宿に戻って風下を起こして来てくれないか」

「え……？」

「頼む」

「わ、分かった……気を、付けてね」

「任せな」

初めて見る綜夜の重く静かな雰囲気、祝はただならぬ物を感じ取り、宿へと向かう。

その最中に振り向いて見た綜夜の背中には、赤黒い魔力が背負われていた。

「ワンウェイ・ヘイト……か、相も変わらず趣味の悪い男だ」

何も見えないほど暗い部屋、ただそこが恐ろしいほど広いとだけ分かる、そんな冷たい場所で、何者かの声が響いた。

バン！とスポットライトが当てられたように、暗い部屋のそこだけに光がさす。

そこにはキリカが立っていた。

キリカはいつになく不機嫌な様子で、部屋の奥の方を見つめていた。

「なんとも言うのが良いさ」

「ならば言わせてもらおう、あんな小娘にどれだけの利用価値があるのだ？」

「貴様には無いだろうよ。だが私には、私の目的には必要なのさ」

「そのために禁術を我が“ライブラリ”から盗んだと？」

「ああ、もちろん。貴様には必要のない物だと判断したのでね」

「……フフ、お前はやはり面白い男よ、キリカ・イズル……我を堂々と利用するとは」

「利用してやっているのさ、用が済めば真っ先に殺してやる」

キリカは腰に掛かったシルバーの銀色の刃をちらつかせる。

「フフフ……そうすればいい。もっとも、殺せば、の話だがな」

「ち、好きなだけ言っている」

「クク、では行け、先ほどの世界に懺血の守護神はいる」

「指図されなくとも行くさ」

キリカは捨て台詞を残すと、いつもの“優しい表情”に戻って、つかつかと部屋から出て行った。

残された“何者か”は、静かに部屋の奥のさらに奥へと消えて行った。

静寂と闇が、ただただその世界に残った。

空が歪み、何者かが“落ちて”くる。

綜夜は身構えもせず、その来訪者を待つ。

そして、来た！

「ぬわあああああああああああああ？！」

綜夜は初めて身構える。

なぜなら落ちてきた者は確実に戦いの空気を纏っていたからだ。

ズズウン！

土煙を上げて落ちてきた者は、すぐに体勢を立て直し武器を構えた。手に握られているのは二丁拳銃だろうか、ともかく周囲を警戒するその様子からは、歴戦の強者であるという事は見て取れた。

しかしなんだろうか、その“男”から感じ取れるのは、有機的な生命力では無く、どこか無機質なエネルギーだ。

綜夜は首を傾げつつも、その男の様子をみる。

そしてもう一人の来訪者が、裂けた空から現れる！！

すかさず男は落ちてくるその相手へ、二丁拳銃を連射する。

だが効いていないらしい、真っ直ぐに男に向かって落下してくるそのオレンジ色の閃光は、その勢いを失わずに進む！！

「チイツ！」

男は大きく跳躍して落下してきた閃光を避ける。

凄まじい土煙と衝撃が発せられるが、男は怯まずに手に持った二丁拳銃を土煙の中へ乱射する！

その土煙をぶち破って、第二の来訪者が姿を現した！！

「！！！」

緑の髪、紅いツリ目、凶暴にあげられた口端。

ボディラインがくつきりとでる戦闘服をきたような外見をしたその“女”は、手に持った鎌のような湾曲した刃と、真っ直ぐな長剣のような刃を持つ武器を、真っ直ぐに男へ振り下ろした。

瞬間、男の手に握られていた武器は二丁拳銃では無くなる。

右手には真っ赤な刃の、左手には特徴的なフォルムを持つ、二つの刃が握られ、女の一撃を防いでいた。

「何者だ、貴様ッ！」

「だあかあ、言ってるでしょ、おれはファルティスⅡザⅡレッドラム。ファルって呼んでいいよ、って」

「いきなり攻撃してくる奴を愛称で呼べるか！」

「ちえ、つまない奴。まあいいや、それよりもっと楽しもう！」

こんなに食べ甲斐のある獲物は久しぶりだからねッ！」

そんなやり取りを二人が追えた後、女、ファルティスⅡザⅡレッドラムが再び男に飛び掛かり、鎌剣の連撃を繰り出す。

野蛮で品の無い、野性たつぷりの剣閃が男を狙うが、男も負けじと二振りの刃で応戦する。

だが男のパワーがファルティスに一步劣るのか、大きな一撃を喰らい、男は吹き飛ばされてしまう。

そのまま男は受け身も取れず地面に叩き付けられ、獲物の剣も無様に弾き飛ばされて霧散してしまった。

そこへ、ファルティスが狂気じみた笑みを浮かべながら、鎌剣を叩きつけようと跳躍してくる。

死の刃が、男の体をばらばらに引き裂くかに思えた。

が。

「これで、終わりだあ！」

「お前が……なッ!!！」

男の手には既に新たな武器が握られていたのだ。

それは武器というにはあまりに大きく、握られているというよりも抱えられていると言った方が良いかもしれない。

“レーザーカノン”……大火力の砲撃兵器、その巨大な砲口が、まさにファルティスを呑み込まんと大きく口を開けていたのだ！

「ヘヴィパニツシャー……喰らええッ!!！」

そして発射される、圧縮加速されたフォトン粒子の塊！

「う、うわああああああ!？」

急激をしかけていたファルティスは、それを避けることができず、光の帯に飲み込まれていった！

しかし男は警戒を解かず、体勢を立て直した後もレーザーカノンを構え、辺りを見渡す。

「どこへ行った……あの程度で倒せるわけが……」

「逃げたぜ、やっこさんは」

「!!！」

男は不意に向けられた声に反応し、レーザーカノンをそちらに向ける。

「おいおい、やめてくれよ。俺あアンタとドンパチやるって気は無いんだ」

無論、その声の主は綜夜だ。

綜夜はブレードエッジを地面に刺し、大きく両手を開いて、敵意が無い事を示す。

男は、しばらく警戒したあと、綜夜に敵対する気がないと判断したのか、レーザーカノンをどこかへしまうと、大きく溜息をつけてその場に座り込んだ。

「まったく、今日は散々だ。これが仕事だったら、追加報酬が好きだけふんだくれるぞ」

「はは、そうだな。おっと、俺の名前は紅月 綜夜だ。アンタは？」

「……ラングだ」

「ラング、早速だが どうもそんなに長くは休んでられないみたいだぜ？」

「らしい、な」

綜夜がブレードエッジを手に取り、再び空を仰ぎ見る。

ラングも腰を上げて、やれやれと言った様子で綜夜と肩を並べた、その手には大剣が握られている。

二人の後ろから祝と、寝ぼけた様子の茜が近づいてくる。

ピキピキピキ……！！

空が軋み、そして裂ける。

そこから現れたのは一つ目の巨獣。

「GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!!!!」

趣味の悪い外見をした、十メートルほどの巨獣は綜夜達を見つけると、大きく咆哮する。

「話はコイツを倒してからだ、行くぜ！」

綜夜とラングは、大きく大地を蹴って、巨獣へ突撃していった。

十話『氷切に咲く花』（後書き）

綜夜「華麗なタイトル詐欺だな」

酸欠「仕方ないだろ、色々出すために祝ちゃんは犠牲になったのだ……」

茜「じ、次回は台詞の一つぐらいあります、よね?!」

酸欠「わっかんね」

茜「コンチクショウ!orz」

酸欠「それにしてもいろんな人からキャラを送ってもらえたなあ」

綜夜「まだ全員出せてないけどな」

酸欠「なあに、これからこれから。あ、まだキャラ募集はやってますよい、どんじゃん送ってください、その度にひいひい言いながら出番とか考えますんでww」

綜夜（マゾだな）

【次回予告】

グラールからやってきた戦士、ラング。

彼を加え、綜夜達は旅を始める。

目的地はとある研究施設、しかしその道中、綜夜の前にある人物が

立ちほだかる！

次回第十一話「ワンウェイ・ヘイト一方通行の憎悪」

綜夜「聞こえないのか、俺の声が?!」

災を狩る刃が行く　　!!

十一話『一方通行の憎悪へワンウェイ・ヘイト』 前篇 (前書き)

うへえ、また前後編使用だべ、許してくれい……。
今回は全部戦闘シーンだよ、やったね！！

十一話『一方通行の憎悪へワンウェイ・ヘイト』 前篇

バゴオオンー!!

閃光が走り、大気が轟き大地が抉られる。

赤い空 現世と隔絶された懺血の守護結界の中で、激しい戦いが繰り広げられていた。

「コード“ナギサ”!!!」

Code “NAGISA” approved

飛び上がった機械の英雄、ラングが日本刀のような意匠を持つ大剣を振り上げ、一つ目の巨獣へと振り下ろす。

その刀身に走る力強い蒼光は、ラングの持つ精神エネルギーの証。轟として振るわれた大剣、^{ソート}ステイルハーツ?の刃が巨獣の左足をやすやすと切り裂いた。

ラングは立て続けにステイルハーツ?を振り、巨獣を幾度も切りつける!!!
だが。

「GGGGGGGGAAAAAHHHHH
HHHH!!!!!!!」

「チイツー!!!」

巨獣が咆哮を上げると同時に、左足を振り払ってラングを吹き飛ばした。

同時にスタスタにされたその鋼鉄のような皮膚は再生し、ダメージはゼロに戻る。

「驚いた……こいつは厄介だな」

空中で体制を立て直し、地上へ着地したラングはぼそりとつぶやく。確かに彼は腕利きの戦士で、恐らくは元いた宇宙の中でも指折りの戦士だ、様々な戦いの経験を積み、乗り越え成長してきた。

その戦いの経験の中には、今対峙している巨獣よりも大きく、巨大な敵はいくらでもいる。

だがしかし、この滅茶苦茶な容姿の化け物は、それまでの経験の中でもかなり上位に位置している。

四足歩行、足は全体の比で言えばそこまで長くはない、だがそれでもラングを軽く越えるほどの長さだった。

顔はまるで爬虫類のようで、体表の色は黒の生地の上に黄色や赤、青などをぶちまけた様な不規則な斑点模様が不気味だ。

そして尻尾は異様に長く、無数に枝分かれしており、それを伸ばして攻撃をしかけてくる。

しかし突出すべき点は他にあり。

「キャストの俺が言うのもなんだが、まるで機械仕掛けの玩具だな……」

そう、ラングが言うとおり、この怪物は肉を持っているはずなのに、どこかが、何かが生物としておかしいのだ。

動きが機械的？ いや生命力あふれる動きだ。

体表が無機質？ いや肉感に満ちた姿だ。

ではどこが？ そこが、分からなかった、そこが、違和感の根源なのだ。

その違和感を見るものをとて不快感にさせる、ラングとて例外ではなかった。

「……」

ラングは思考する。

目の前にあるこの化け物を消飛ばしてしまうのには、どうしたらよいかと。

生半可な攻撃では先ほどのようにすぐ再生されるのが落ち、ならば再生する暇すら与えずに、一気に蒸発させるのなら……？

だが、それにはかなりのエネルギー……フォトンが必要だ、それでは足りない、あと一歩足りない。

その一歩を埋めるためにはどうする？

(“アレ”を、使わないと駄目、か)

何かを決意したかのように、ラングは構えをとる、だが。

「ラング、大丈夫か？」

「！ 綜夜か」

綜夜が空中から隣に降り立ってきた。

どうやら綜夜も苦戦したらしく、苦笑いを浮かべている。

「はは、参った参った。どうにも手加減して勝たせてくれる相手じゃあないみたいだ」

「らしいな、で、何の用だ？ 冗談を言うのを待ってくれる相手でもないぞ」

ラングはおもむろに大弓を出現させ、こちらを向いて咆哮する怪物へ光の矢を放った。

綜夜も同時にブレードエッジで剣閃の波動を飛ばし、巨獣へ同時に衝突した二つの光は炸裂、凄まじい爆音を上げて爆ぜた。

「ああ、ちよつと手を貸してくれないか？」

「構わんが、奴を倒す方法があるのか？」

「なきや相談しないさ」

「はわわ……紅月君達は大丈夫なんでしょうか……？」

「……」

闘う二人の様子を、茜と祝はやや遠くから不安げに見ていた。

その二人の周囲はより強力な結界に張られている、これもまた綜夜が作り出したものだ。

「それにしても……あのでっかいカメさんはホントに生き物なんでしょうか……」

「……あなたも……違和感を？」

不安げな様子と、不気味げな様子を混同させた声色で、茜が呟く。祝はそれに同意するかのように声を上げる。

茜は無言で頷いた。

バスン！！と音が響き、土煙が上がる。

何事かと祝と茜は綜夜達の方へと向き直る、その視線の先には、怪

物に向かって飛翔する綜夜の姿があった！

「アイツ……何をするつもりなんだ……？」

綜夜は飛翔する前、ラングに言った。

「思いつきりデカイ大砲みたいなのを出せるか？」
と。

ラングはそれを肯定した、すると綜夜は。

「じゃあそいつを俺に貸してくれ！」

と言い残すと、思い切り地面を蹴って飛翔して行ってしまった。

確かに、できないわけではない。

座標を計算し、そこへデータ化した武器を転送すれば、綜夜がその
“大砲みたいなの”を使う事は出来る。

ラング自前の“デバイス”にはそれが可能だ、だが、綜夜はそれを
知っているはずがないのだ。

会って一日はおろか、一時間も経っていない。

そんな時間の中で、自分の持つ能力を見極めたとも言わんばかり
の行動だ。

相手が自分の思った通りに行動するとは限らない、あまりにも大胆
不敵すぎる、ラングならば、しないだろう。
それこそ、相当のバカか、お人よしか。

ラングの頭のなかに、亜麻色の毛をした少女の姿が映った。

「紅月、綜夜か……」

ラングは口端をにやりと上げた。
そして両腕を大きく天に掲げる。

「ブラストゲージ、解放！ グロームバースト、ゲットセット！」

ブラストゲージ 戦闘中に発生する特殊フォトンを貯蓄する、キヤストならではの器官。

それに貯められた特殊フォトンを解放し、召還するのはキヤスト必殺の武器にして、一撃必殺の大砲！

Ready!

「座標入力……受け取れよ、綜夜!!」

GO!

「来た来た来たあッ!!」

綜夜は自らの周囲にソレが来たことを感知すると、綜夜は高く跳躍した!

化け物が触手を伸ばし、綜夜を追撃するが、それはことごとく切り伏せられる!

周囲にデータの粒子が転送され、その武器が展開される!

綜夜の両手に装着されたそのキヤノン砲は、ずっしりと重く、人間の手に余るものであると綜夜に実感させる。

まさにキヤストの武器 鋼鉄の魂を持つ種族こそが持ちうるに相

応しい武器なのだ。

だから綜夜はそれを“作り変える”。

内部構造を解析し、それを構築するパーツ全てに力を注ぎこむ。

その力は懺血の牙の力　そう、懺血の守護神力ガーディアンそのものを注ぎ込む。

その力は鋼鉄の兵器“グロームブラスター”を根底から作り変える。
キャストの兵器を、守護神の牙に　。

「っしゃあ！！　完成だ！！」

今ここに誕生するのは懺血の守護神の新たな力。

全てを薙ぎ払う紅光の砲。

「クラウ・ソウル！　行けエエエ！！」

強大な紅き太陽が解放される。

内蔵された特殊フォトン^①は懺血の牙の力を受けてより強力な未知のエネルギーへと変貌していた。

その破壊力は絶大にして、まさに必殺と呼ぶに相応しい　！！

解放された球状のエネルギーは深紅を纏って、怪物へと猛進する！

そして　！

ドワオツ！！　溢れんばかりのエネルギーの奔流が爆発を起こし、
怪物は悲鳴を上げる間もなく爆散と共に蒸発した！

「……………はっ……………こいつはすごいな……………」

ラングが遠くから怪物を一発で消し去った火柱を眺めていた。

そこへ、綜夜が再び舞い降りる。

「へへ、どんなもんよ!」

「ああ、確かに凄まじいな……だが、どうする気だ、ソレ?」

ラングは徐々に結界が溶けて行くのをかんじながら、綜夜の持つ変わり果てたグロームバスターを顎で指した。

「あ」

「あ、じゃねえ。返せっ、安いもんじゃないんだぞ」

「はは、冗談だよ。ほら」

ラングは溜息をつきながら元に戻ったグロームバスターをデバイスに収容する。

「で、これからどうするんだ?」

綜夜がラングに問いかけた。

ラングは少し考えたが、すぐに考える余地も無い事を思い出して溜息をつきながら答えた。

「まあ、行くあてもないしな、お前さんたちに付いていくとするよ」

こうして、ラングの新たな物語が始まったのであった。

十一話『一方通行の憎悪へワンウェイ・ヘイト』 前篇（後書き）

ろくしんがったくらい！！

いやスンマセン、割と追い込まれてるもんで面白い話が書けません
ww

落ち着いたらまた更新します、落ち着かなくても多分更新します。
キャラ募集、待ってるよ！！

次回予告は前回のまんまだよ！コンチクショウめ！

綜夜「誰に怒ってるんだよお前」

自分……かな？（キリリッ

【次回予告】

グラールからやってきた戦士、ラング。

彼を加え、綜夜達は旅を始める。

目的地はある研究施設、しかしその道中、綜夜の前にある人物が
立ちほだかる！

次回第十一話『ワンウェイ・ヘイト一方通行の憎悪 後編』

綜夜「聞こえないのか、俺の声が?!」

災を狩る刃が行く ！！

十二話『一方通行の憎悪へワンウェイ・ハイト』 中編『(前書き)』

話の長さか更新速度なら、俺は更新速度を取る！

というわけでまさかの中編、お付き合いくださいまし。

十二話『一方通行の憎悪へワンウェイ・ヘイト』 中編

「さて……？ これからどうするか、だな」

綜夜達は宿屋の一室に戻り、会議を始めていた。

しかし初めて三十分と経たない内に頓挫、早速会議は難航していた。

「しかしまあ、どうしようも無さすぎるな」

窓際の綜夜が両手を上げる。

祝がこの世界については最も詳しい、ハズなのだがその情報もあまり役に立たない物ばかりだった。

この世界の名前や、文化、どんな原生生物が存在しているか……などは今の所あまり必要性のない情報だった。

「でも、管理局が関わってない世界だっていうのは分かったじゃないですか」

ベッドに腰掛ける茜が、ミニチュア化して機能を一時停止しているイクサリオンを、ハンカチで拭きながら言う。

イクサリオンは転移にエネルギーを使い過ぎたらしく、しばらくはこのままらしい。

綜夜にとってはある意味で好ましいことだった、今こんな状況で襲われるのは厄介だったからだ。

ラングは興味深そうに、茜の手の中のイクサリオンを見つめていた。

「確かにな。祝ちゃん、本当にこの世界に管理局はないのか？」

「うん。少なくともこの世界にはいない……はず」

椅子に座った祝が、コクリと頷いた。
綜夜は腕を組んで考え込むように呟いた。

「好都合なのか不都合なのか……単純な問題じゃねえな」

「……どうして？」

「ああ、好都合なのは管理局の追っ手から少なからず逃れやすい状況ってことだ」

「不都合なのは？」

「懺血の牙を追ってる奴を探すのに手間がかかるってことだな」

懺血の牙を追う者達……綜夜に牙を託した少年が監禁されていたあの研究所を持つ者、そして不気味な怪物たちを送りつけてくる者のことだ。

何が目的かは知らない、だが、倒さなければならぬ存在なのは確かだ。

「どうして……？ 管理局と繋がりと決まったわけでもないのに……」

「管理局はこの時空世界の中で、目下一番大きな組織だからな。データバンクにアクセスすりゃ、大なり小なり何か手がかりはあるだろう」

綜夜はそう言い終わると窓の外を見やる。

村は牧歌的で、平和な雰囲気包まれている。

畑仕事をしている男や、家事に追われる女、子供たちは村中を走り回ってはしゃいでいる。その平和な雰囲気には安堵感を覚える綜夜の目が、違和感を見つけて鋭くなる。窓から身を乗り出し始めた綜夜に、部屋にいる全員の視線が集中した。

「何かあったのか？」

ラングが警戒する。

「村に誰か入ってきた、怪我をしてるみたいだ。少し様子を見てくる！」

「あ、待って綜夜！」

綜夜は窓から宿を飛び出す。

驚いた様子で祝がその後を追った。

綜夜が見た通り、村の入り口で男が倒れていた。重傷を負っているらしく、息が荒く衰弱している。

綜夜は男を抱え上げる、男の腹から出血があり、衣服を赤く染めていた。

「おい、大丈夫か？ くたばんじゃねえぞ！」

綜夜が男に声をかける。

村人が何事かと寄って来た。

綜夜は村人に向かって呼びかける。

「怪我人だ！ 宿まで運ぶのを手伝ってくれ！」

村の男たちが尋常でない雰囲気を感じ取り、どよどよと集まってくる。

そして数人が綜夜と共に男を宿まで運んだ。

「綜夜、この人は……？」

「見ての通り怪我人さ、ちょっと手当をする」

手を貸してくれた村人に礼を言い、綜夜は途中で合流した祝と、怪我をしている男を運んだ部屋に入った。

男はベットに寝かされている。

綜夜は男の出血している腹部に手をかざす。

そして意識を集中させ、赤黒の小さな魔法陣を形成した。

（裂傷に魔力の残留があるな、魔導師とやりあったのか……？）

パキパキという音と共に男の傷口がふさがり、出血も止まり始める。傷が治ったことを確認すると綜夜は魔法陣を消して、男に呼びかけた。

「返事はできるか？」

「あ……あ……」

それに、男はうめき声が混じった声で頷く。
男はよろよると上体を起こした。

「何があつたか教えてくれるか？」

「ここから南に、銀色の……建物が……そこで……見たこともない、
化け物に……仲間は、皆……やられた……」

「銀色の建物……？」

祝が視線を下に落とす。

「大きな……建物だった……見たこともない……箱みたいなの……ぐ
うっ……。頼む……仲間の、仇を……」

「分かった仇はとる、アンタは休め。手当はこの村人に頼んでお
く」

「……」

男は綜夜の言葉に安心したのか、意識を手放して眠りに落ちた。
綜夜と祝は部屋を出、宿屋の主に男の手当のための代金を渡すと、
自分たちの部屋に戻った。

「紅月君。あの人、大丈夫でしたか？」

「命に別状はないよ。あと、情報が手に入った。多分重要な情報だ」
茜の質問に答えると、綜夜は話を始める。

「南に向かう。そこに何かの研究所があるらしい」

「銀色の箱のような建物……あの人はそう言ってた」

「ずいぶんタイミングのいい話だな。畏かもしれんぞ」

ラングがいぶかしげな表情をして言う。

「畏だとしても行くしかないさ。犠牲者も出てる」

「……お人よしだな」

「まあな」

ラングの呆れ顔に、綜夜はニヤリと口端を上げてみせた。
フツ、とラングも口端を上げると、綜夜の肩に手を叩いて部屋を後にした。

「さあ、行くうー！」

綜夜も続いて部屋を出る。

茜と祝も綜夜の後を追った。

十二話『一方通行の憎悪へワンウェイ・ハイト』 中編『(後書き)』

イエエイ、テスト終わった！

テストがやっと終わった……感想お願いします、ワシは寝る。

十三話『一方通行の憎悪へワンウェイ・ハイト』 後編『(前書き)』

ようやくこの話が終わった。

あ、募集もしてます、新作も書きました、よろしくね！

十三話『一方通行の憎悪へワンウェイ・ヘイト』 後編

村を後にして、数十分後、茜が思い出しかのように口を開いた。

「ところで紅月君、南に行くとは言いましたが、詳しい場所は分かるんですか？」

「……」

「め、目を逸らさないでください！」

「か……勘だ、勘でなんとかする！」

がはは、と冷や汗を垂らしながら豪快に笑って見せる。どう見ても詳しい事は考えていない、完全に行き当たりばつたりの行動だったようだ。

「えー……なんですか、それ……」

茜が溜息をつく。

黙ってそのやり取りを聞いていた祝も、カクンと頭を垂れて落胆した。

「まあ、意外となんとかなるもんだ、こういうのはな。休憩にするか？」

ラングが明らかにどよよんとした空気を醸し出し始めた綜夜達に話しかけた。

結局そのラングの提案に乗って、綜夜達は近くにあった河原で休憩

を取ることにした。

「ふう……それにしても結構歩きましたね」

茜が靴を脱いで川に足を付けながら一息つく。

「風下は現代っ子だからな、疲れたか？」

「風下家、家訓の“弱音は吐かない”ですよ！」

「そんなのあつたか？」

「今作りました！」

えらく自信たっぷりな茜に、なんだよそれ、と綜夜は苦笑いを浮かべる。

「でも歩いてばかりっていうのも、現代人からしてみれば不便ですよね」

「……で、なんで俺を見るんだ？」

ラングが茜の視線から逃げるようにそっぽを向きながら言う。

「ラングさんなら、便利な乗り物を出せるかな。と思ひまして」

「出せないこともないが……」

「マジですか！」

「キャスト専用だからな、生の人間ヒューマンが乗ると多分……」

急に声のトーンを落としたラングに、茜は不安げに肩を竦める。

「た、多分……？」

「Gに耐えられなくてペチャンコだ。それでもいいなら乗せてやるぞ」

茜はその言葉を聞いた時、まさに背筋が凍る感覚を覚えた。

「じじじじ遠慮しますー！」

「はは、そうした方が良いな」

ふう、と茜が溜息をついて視線をやや落とす。

その時、ラングの腰辺りに、何かの小さなケースのような物が付いている事に気が付く。

「……ラングさん、それ、なんですか？」

「ん？ ああ、“パートナーカード”か」

「パートナーカード？」

聞きなれない単語に、茜は首を傾げた。

ラングはああ、首を縦に振る。

「まあ、仲間内で渡し合う名刺みたいなもんさ。見るか？」

「あ、はい！ 拝見させていただきます！」

ラングはケースからパートナーカードを取り出すと、茜に手渡した。パートナーカードはただの名刺ではなく、一種の連絡端末のような役割も持っている。

これを使って仲間を呼べたら大変心強いのだが、そう簡単にはいかないらしい。

元の世界、グラールとは完全に連絡が取れない状況だ。

二年前と同じ状況……しかしラングは別段絶望などしていなかった。むしろ、その時に出逢った“仲間”と再び会えるかもしれない、そんな希望を持っていた。

そんな事を考えるラングの隣で、茜が黄色い声を上げた。

「何ですかこの子たち！ もの凄く可愛いです！！」

「ああ、そいつらか」

茜が手にしているカードには、白と黒の猫……のような姿をした、かわいらしい人形のような何かが映っていた。

どうやら感性に触れる物があったらしく、茜はきゃあきゃあと“かわいい”を連呼する。

ラングはその姿を見て、なんとなく元の世界にいた、自分が英雄となるきっかけを作った少女の事を思い出す。

「そんなに気に入ったなら、持ってって良いぞ？」

「マジですか！？」

「ああ、今は別に必要ないしな」

「ありがとうございます！ 落ち着いたらプリンでも！」

「はは、期待してるぜ」

茜が嬉しそうにカードを眺める。

その隣で綜夜は、何者かが来る気配を察知して、立ち上がった。

ハウンドイーグル所属し型時空航行艦“ストウームレイド”

綜夜の居場所が分かったとして、その事件を追うのはとはやてがブリッジに来ていた。

「もう綜夜さんたちの居場所が分かったんですか？」

なのはが意外そうな声を上げる。

その声にこたえるのは、この艦の長にしてハウンドイーグルの長、キリカだ。

「ええ、うちのオペレーターは優秀でしてね。いや、それ以上に…」

…

「それ以上に……？」

「紅月君の反応は分かりやすいんですよ」

「どづいづいことですか？」

はやてが疑問に首を傾げる。

「彼はロストロギアを持っている可能性がある、という事ですよ」

「あんちゃんが……？」

はやては驚く。

自分も確かに“闇の書”と呼ばれるロストロギア持っていた、それが原因で事件も起きた。

しかしロストロギアを持っている人間は、管理外世界である地球にいないだろうと思っていたからだ。

「疑問に思いませんでしたか？ なぜ彼が二年前のユーノ・スクラ
イア君の呼びかけに応えなかったのか。そして、あなたの騎士達ヴォルケンリッターによる魔力蒐集を逃れたのか……」

「それは……私は、あんちゃんを……」

「いえ、攻めているわけでは無いですよ、はやてさん。誰だって友人は信じてあげたいものですから」

はやてが黙り込む。

キリカはニコリと“慈愛に満ちた”表情ではやての頭を撫でた。

「だからこそ、でしょうね。フェイトさんが“無断で出撃してしま
った”のは」

その言葉を聞くと、なのはの表情が険しくなった。

そう、フェイトは“偶然”なのは達よりも早く綜夜の居場所が分か
ったことを知ると“キリカの制止を振り切って”出撃してしまった

というのだ。

「あ、あの、フェイトちゃんを責めないであげてください！」

「分かっていますよ。彼女は兄を……。ですからなのはさん、はやてさん。早く行って“支えて”あげてください」

懸命にキリカに訴えるなのはを、キリカは諫めながら、ポータルパネルを操作した。

ポータルが唸りを上げて起動する、場所は綜夜達のいる世界の、フェイトが転移したすぐ近くの場所だ。

なのはとはやては急いでポータルに入る。

「私はここから指示を出します。先ほども言った通り、紅月綜夜はロストロギアを所持している可能性が高いので、“注意”してくださいー！」

「はい！」

なのはとはやてが転移していったのを見届けると、キリカは椅子にざんぶと腰を下ろした。

そしてパチン、と指を鳴らすとディスプレイに現場の様子が映し出される。

キリカはニヤリと口端を上げる、まるで映画を見る観客のように。

「通信は何者かに妨害され使用不可能」……」

ディスプレイに高速で移動する人影が写ると、キリカは楽しげにその名を呼んだ。

「楽しませてくれよ、フェイト……？」

「何かが来る……。皆、気を付けろよ」

綜夜がそう言いながらブレードエッジを起動させると、一瞬でその場に緊張感が走る。

「狙いは……俺か……！」

綜夜はそう言うと、真っ直ぐにその向かってくる金色の閃光に向かって駆け出した！

「紅月君！」

「そこで待ってる！ ラング！ その場の防衛は頼むぞ！」

ラングが頷いたのを確認すると、綜夜はさらに加速する。

金色の閃光は綜夜に向かって真っすぐに突撃してくる、綜夜はそれをブレードエッジで受け止めた！

ガギーン！ と凄まじい音が響き、金の閃光の動きが止まる！

そこにいたのは、激しい憎しみの表情で綜夜に得物であるバルデッシュを振り下ろさんとする、フェイトの姿があった！

「な……！！？」

綜夜は驚きのあまりに絶句する。
フェイトの纏っていた雰囲気は、別人と見紛うほどに全く違ったのだ。
言うなれば怒り狂った猛獣のようなオーラを、今のフェイトは纏っていた。

「綜夜……紅月綜夜アアア!!」

フェイトは絶叫すると、バルディッシュを出鱈目に振り回し始める！
いつものフェイトからは想像もできない無茶苦茶な攻撃、綜夜はブラドエッジでそれを防ぐが、未だに混乱していた。

「どうしたんだフェイトちゃん!？」

「うるさいッ!! お前がクロノを……義兄さんをッッ!!」

フェイトは怒りのままに魔法陣を綜夜の至近距離で展開させ、その魔法を発動させる。

「サンダアア……スマツシャー!!」

直線に束ねられた雷が綜夜を狙った!

綜夜はそれを瞬間移動に近いほどの驚異的なスピードで回避する！
受けるのも良かったが、受ければその衝撃は使用者のフェイトすら傷つけてしまうからだ。

「やめるフェイトちゃん! そんな戦い方、自分を傷つけるだけだぞ?!」

「黙れッ!! 私はクロノに誓ったんだ……どんなに傷ついてでも

！ 私がッ！ お前をッ！ 討つとッ！！」

「どうしちまつたんだ……フェイトちゃん……?!」

明らかに今のフェイトは正気ではなかった、目の焦点は合わず、声色も怒りと憎しみに囚われて不安定。

まるで何かの悪霊に憑りつかれているかのようなフェイトの姿は、まさに幽鬼の復讐者アウエンジャーと呼ぶに相応しかった。フェイトが怒号と共に綜夜に切りかかる！

「違うんだ、俺じゃない！ キリカだ！ キリカがクロノを……！」

フェイトの乱撃を綜夜は弾きながらフェイトを必死に説得する。ギイン！！ と一際大きくブラドエッジとバルディッシュが衝突して、二人の距離が開く。

綜夜がフェイトを見る、フェイトは俯き、ピタリと動きを止めた。

「フェイトちゃん……!!」

綜夜がフェイトへ手を伸ばす、言葉は 。

「あは……あははははははは!!」

届いていなかった。

フェイトは大空を仰いで大声で笑う、その笑い声は綜夜に対する嘲笑、そして怒りの表れ。

再びフェイトが綜夜を見る、その表情には先ほどよりも深く、熱い憎しみと怒りの色が現れていた。

「ここまで来て言い訳……落ちぶれたね、綜夜……。いや、化けの皮が剥がれたって言った方が良いのかな……？」

「聞こえないのか……俺の声が……！！」

フェイトが吐くは呪詛と怒りの灼熱、その瞳に紫色の暗黒が宿った。綜夜はそこで確信する。

（ワンウェイ・ヘイト 一方通行の憎悪 ……！！）

魔法の中には、あまりの効果の強さと凶悪さに、その使用を禁じられた物も存在する。

禁術 ワンウェイ・ヘイト その中の一つである一方通行の憎悪が、フェイトを幽鬼の復讐者アヴェンジャーに変えていたのだ。

一方通行の憎悪 ワンウェイ・ヘイト それは対象となったものの心の中にある“憎しみ”の感情を、果てしなく増幅させる魔法。

この魔法が禁術たる理由はそれだけでない。

真の理由、それはその増幅した憎しみの矛先を、使用者自身が決める事が可能という点にある ……！！

かつてはこの魔法を使用した、代行殺人が横行したこともあった。

子供までが、言いようのない憎しみに駆られて使用者の敵を刺す…

…この魔法は、人の悪意を象徴するかのような魔法だった。

「もう捕まえたりなんてしないよ……私の人生がどうなったって良い……紅月綜夜、お前を ……」

憎しみの禁術の証である、紫色の暗黒を瞳に宿したフェイトが、ゆっくりと口を開く。

「 殺す 」

瞬間、フェイトは閃光になり、綜夜を亡き者にせんと黒斧を振るう。綜夜は呆然と立ち尽くしたまま。

フェイトは、その刃を綜夜の首元めがけて振り下ろす。

「 さようなら、綜夜 」

鈍い肉を裂く音が、響いた。

「 ごめんな、フェイトちゃん 」

綜夜の首は繋がっていた。

代わりにその右腕が、地上へと落下していく。

まるで償いのように、綜夜は自らの切り傷から溢れる血を眺める。

「 ぶじいっことだッ……！！ あれほどの反応速度なら避けれたはず……なぜッ……！！ 」

「 田くらし……ねー 」

綜夜は切断された右腕の断面から出る血しぶきを、フェイトに浴びせかける。

フェイトはそのおぞましさに、一瞬動きを止める。

瞬間、綜夜の髪が紅く染まり、切断された右腕が再生する。

そして、その真っ赤に染まった右腕が、フェイトの頭を掴んだ。

「は……はな……せえッ……!!」

フェイトがもがくが、その体にはバインドが仕掛けられ、身動きが取れない。

綜夜はフェイトの身体を調べ、禁術の種がどこにあるかを探す。

守護神の力を持って、一方通行の憎悪の呪縛を解除しようとして試みたのである。

(見つけた …!!)

そして、その禁術を解呪しようとした瞬間だった！

桜色の閃光が綜夜の背中に直撃し、綜夜は体制を崩す！

フェイトはその一瞬の間を見つめ、綜夜から逃げ出した！

「チイツ……邪魔をするな!!」

解呪はならず、綜夜は悔しげな表情で妨害をした者を見やった。そこにいたのは。

「なのは!!」

「綜夜さん……!!」

なのはは怯えきった様子で、レイジングハートを綜夜に向けていた。その隣にははやてが、夜天の書とシュベルトクロイツ？を構えている。

「綜夜さんっ、教えて、どうしてクロノ君を……つきゃあ?!」

なのはが何かを言おうとした瞬間、なのは達と綜夜の間を切り裂くかのようにして、砲撃が撃ち込まれた!

綜夜が見上げる、そこにいたのは海だ。

「おい、ガキども、退却だよ」

「で、でも!」

海という言葉にフェイトとなのはが噛み付く。

「隊長命令だ」

隊長、という単語を聞いた瞬間、フェイトの表情から力が抜ける。そしてフェイトが無言で去って行くのを皮切りに、なのは達も口惜しそくに去って行く。

「ま……!」

綜夜が制止をかけようとした瞬間に、海が無茶苦茶に砲撃を放つ。

「く……!」

綜夜は外套を出現させてそれを防ぐ、再び正面を向いたときには、

もう誰もいなかった。

悔しさに俯く綜夜、しかしその脳裏に祝の声が響く、再びあの怪物が現れたという。

「分かった、今いく！ …… フェイトちゃん、いつか …… その呪縛から助ける …… ！！」

綜夜は決意を新たに、仲間の元へ急ぐのだった。

十三話『一方通行の憎悪へワンウェイ・ヘイト』 後編『(後書き)』

キリカ「他人の不幸で飯が上手い！WWW」

綜夜「うぜえ！！」

【次回予告】

なんとか研究所に辿り着いた綜夜一行。

しかしその場所は魔窟と化していた……！

そして茜に危機が訪れるとき、白黒の猛獣が現れる！！

次回十四話『猛牙乱舞』

茜「私に力を貸してください！」

災を狩る刃が行く ……！！

一四話『猛牙乱舞』（前書き）

ふへっへへへ、休ませてくれ〜ww

「エターナル・カタラクト、ゲットセット！」

《GO!!》

掲げられたラングの両手から、彼の体内に存在するありったけのフォトンが特殊な装置と共に空中へ発射される。

空中へと発射されたフォトンは、特殊装置、軍事衛星の代わりに果たす小さなフォトン増加装置を通し、再び地上へ降りてくる！
そう、敵を滅する破邪の雷光となって、猛々しく舞い降りるのだ！
轟音が猛り響き、落ちた羽虫を一掃して行く！

そして光が降り注ぎ終わった時、周囲を飛んでいた羽虫達は一片も残らず消し飛ばされていた。

「……風下は？」

綜夜は戦いが終わったことを喜ぶそぶりも見せず、異変を口にする。茜が、いないのだ。

ラングが気まずそうに口を開いた。

「さらわれちゃった。あの化け物どもに、な」

一瞬、綜夜の紅くなった瞳が揺らぐ。

しかしその揺らぎはすぐに収まった、隠すかのようにして。

祝は、綜夜のその顔の様子を、心配そうに見つめていた。

「……場所は分かるのか？」

「ああ、あの子に渡したカードが役に立ってる。多分だが、行先は俺達の目的地だ」

「そうか……」

「綜夜、風下さんは大丈夫なの……?」

「分からん。だけど、必ず助ける……俺が皆……!」

綜夜の瞳に力が籠る。

祝はそれを見て察した、何か、自分の知らぬところで綜夜に何かがあったことを。

祝はそんな綜夜に手を伸ばそうとした、だが、すぐに引っ込める。

(駄目、私にはその“資格”はない……。今の私じゃあ……)

祝は瞳を閉じた、その瞼の裏には“ヤツ”の影が……。

「祝ちゃん?」

「あ……なんでも、ない……」

「おい、急ぐぞお前ら、付いてこい!」

走り出したラングに続いて、綜夜も駆け出した。

祝は追いかける、綜夜という光を見失わぬように、その力を、追い求めるように。

綜夜達が出発した一方で、なのははストウームレイドの数少ない息抜きの場、喫煙室で飲み物を片手に呆然としていた。はやては哨戒任務に出撃し、フェイトは無断出撃についてキリカと話している。

まあつまるところ、なのはは今、やることがなかったのだ。

「……………私は、信じてるからね、綜夜さん……………」

ギョツと飲み物、オレンジジュースが入った缶を握る。

なのはは、艦に戻ってきたフェイトの口から出た言葉を、未だに信じられずにいた。

いや……………言葉よりも、フェイトの目に籠った憎しみの光を、なのはは信じられなかった。

私は綜夜^{アイツ}を許さない……………絶対に……………！！

激しい憎しみと怒りが入り混じった形相のフェイトは、彼女と戦った記憶を持つなのはでも見たことがないものだった。

憎み、怒り、それを持ちすぎる者にどんな未来が待っているのか、若すぎる少女は数々の体験から身をもって知っていた。

自分は、フェイトの中にあんなに激しい感情があったことを、知らなかった。

そしてそれを気付いてやれなかった。

なのはは自分が、情けなかった。

「フェイトちゃん……………」

なのはは心配そうに友人の名を呼ぶと、天井を仰ぎ見た。

暗い色をした鉄の天井、そして部屋を照らす照明の光が見える。

喫煙室の狭さと静けさがあったか、それとも自分の沈んだ気持ち

あつてか、なのははまるで自分が牢屋に入れられたような気分になった。

(こんな顔してるところ、誰にも見せられないな……)

不意にドアが開いた。

「……お前……」

「海さん……」

そこには、南雲 海がいた。

海はチ、と舌打ちを鳴らすと喫煙室に入ってくる。

そして自販機で缶コーヒーを購入すると、なのはの隣に座った。

いや、そこしかなかった、といった方が正しかったか。

海は無言で缶のプルタブを開けると、クイと一口飲む。

「あ、あの……。海さん、煙草を吸いに来たんじゃないんですか？」

「……」

なのはが、ぶつすりとした海の顔を恐る恐る覗き込みながら言う。

「わ、私お邪魔だったら出てきますけど……」

「……」

反応がない、なのははますます不安になってきた。

「あ、あの……?」

「だああつるせえ！　気が変わったただけだ、勘違いすんな」

海がその視線を振り払うかのように、声を張り上げる。

なのはは一瞬びくりと肩を強張らせるも、気が付いたかのようにぴよこんとツインテールを揺らした。

「あ、でも煙草は吸うつもりだったんですね」

「う……。ったく、うざったいガキだぜ……」

「にゃはは……ごめんなさい」

海はそう言つと缶コーヒーをぐいと煽り、飲み干した。

先ほどよりかは落ち着いた表情になっているとなのはは感じた。

「そんなしよぼくれた顔しやがって……」

「……」

ふう、と海は溜息と同時に悪態をつく。

しかしなのはの反応が思ったよりも暗い事に気付いたのか、海は思わずなのはを覗き込む。

「……どうした？」

「あつ……なんでもないです。にゃ、にゃはは……」

なのはの反応は明らかに物憂げだった。

海はそんななのはの表情に、懐かしく寂しい既視感を覚えた。

海が眉間にしわを寄せて見ていたのが原因だったのかどうかは分からないが、なのはは席を立った。

「それじゃあ、お先に失礼します」

そしてぺこり、と海にお辞儀をすると出口へ向かっていく。海はそんななのはの背中に向かって声を投げかけた。

「……潰れんなよ」

「え？」

なのはが足を止めて振り返る。

海は飲み干した缶を、少し寂しそうな目で眺めながら続けた。

「たまには、誰かに甘えろってことだ」

「海さん……？」

「……お前には沢山いるだろ。仲間タチがよ」

なのはは海の顔をじっと見ていた、目が、離せなかった。

海の表情から読み取れるのは、悲しみの感情だった。

しかし、その感情はなのはには向けられていない、海自身に向けられた物でも無かった。

その海の感情は、なのはが良く知るものだった。

それは“喪失”と“孤独”の色を持つ悲しみ。

海は孤独からくるその感情を、失ってしまった“なにか”に向けているのだ。

「……海さんにも……」

だから、目を離せなかった。

自分よりも年上のこの青年に、なのはは幼いころの独りだった自分が重なっていた。

「あ………?」

海はなのはの方へ顔を向ける、そこには空色の目が、いつもと違って深い色をしたような、なのはの目があった。

海は驚く、なのはの目は 誰の悲しみも等しく受け止めるその目は、海の人生を変えた者の目と、全く同じだったからだ。

「海さんにも、います。だから、そんな寂しそうな顔、しないでください」

「……お前」

海が何か言いかけた時、アラームが艦内に鳴り響いた。

「スクランブル……!?!?」

ピピ! と海の通信機器に連絡が入り、一方的につながる、相手はセリアだ。

《海! 地上にいる哨戒部隊から援護要請が入ったわ! ポイントはG-1、先に言ってるから今すぐ来て!》

「海さん!」

「話は後だ、行くぞ高町！」

海は空き缶をゴミ箱へ投げ捨てると、立ち上がる。そしてなのはの目から逃げ出すように、声を上げ、喫煙室から出る。

「は、はいっ！」

なのはも、その後へ続いた。

地上では、綜夜達が目的地へと辿り着いていた。

広大な森の中に存在する高大な山。

その表面が不自然に切り拓かれ、作り出された人口の洞窟の中に埋め込まれるように、その銀色の箱のような建物はあった。

明らかにこの世界はそぐわない、工場のような姿だ。

しかしおかしなことにその建物は至る所が焦げ、崩れ、壊れ、半壊の状態であった。

外からの攻撃ではなく、内側から破られたような、そんな姿。原因はすぐに分かった。

先ほどの羽虫や、見たこともないタイプの怪物達はその建物から出たり入ったりしているのだ。

ラングは眉間にしわを寄せた。

「反応は確かにあの建物の中で止まっている……。だがなんだあのザマは、廃墟じゃないか」

「なんだって良いさ、あの建物のどこに風下がいるんだ？」

綜夜がせかすように言う。
ラングは腕のディスプレイに目を移す。

「上の方だな、屋上の手前の階つてところか」

「行くのか？」

「……ああ、二人はここで待っていてく……」

綜夜が言いかけた瞬間、その腕を祝が掴んだ。

「私も、手伝う」

「祝ちゃん……危険なんだぞ……？」

「分かってる……。でも、あなただけに任せきりは、嫌。あなたが、
例え守護神^{ガーディアン}だったとしても」

祝の瞳は真っ直ぐだった。

綜夜はその強い瞳の迷いのなさに、嬉しさと同時に不安を覚える。

「そういう事だ、綜夜。曲がりなりに俺達はチーム、協力してい
こうぜ」

ラングもまた、綜夜の肩を叩く。

「……分かった……！ 力を貸してくれ！」

綜夜は力強く頷くと、ブラドエッジを構える。

「綜夜、コイツを持ってけ」

ラングが、綜夜に赤いカードのような物を二枚渡す。

「これは？」

「そいつは武器だ、特別派手な、な。お前さんのそのシンプルな得物じゃ、囚われのお姫様を救い出す騎士ナイトにゃ似合わんだろう」

「はは……そいつもそうだな」

綜夜はラングの冗談に軽く笑い返すと、受け取ったカードを懐にしまっ。

「それとだ、この建物には結界が敷いてある。外部からの侵入は入り口から出ないと無理だ、お前さん以外は、な」

「大丈夫さ、すぐに終わらせる」

「頼りにしてるぜ。じゃあ今から俺達が内部で敵を引き付ける、その間に……」

「外から侵入して、風下を助ける！」

「そういう事だ、じゃあ……行くぜ！」

「綜夜、気を付けて……！！」

ラングと祝が建物の中へ入って行く。

こんなに走ったのは何時ぶりだろう、呼吸が荒い、足が痛い。へろへろになつていたが、しかし茜は立ち上がると、部屋を見渡した。

暗くて良く見えないが、それなりに大きな部屋だった。

よるよると歩いてその部屋の中へ入り込んでいくと、バン！ という音と共に、その部屋の一か所がスポットライトのように照らされる。

そこにあつた物は、液体のような物が入ったポッドが一つ。

茜はそのポッドの中にある物を見て絶句する。

「は、白……！？」

白^{はく} 彼女がそう呼ぶ古代の騎士型デバイス、イクサリオンと同型の物が、そこには入っていたのだ。

しかしよく見ると各所が違う、鎧としてのデザイン、色、大きさ……もっと根本的な所で言えば、中に“人間”が入っているところか。茜はポッドへ近づくと、その鎧の首から、小さな翠色をした宝石が輝いている事に気づく。

茜が首を傾げてそれを眺めていると、部屋の奥からズズウン！ と激しい音が響いた。

「わわわっ……！」

茜は反射的に後ろに猛ダッシュで下がり、その部屋を後にした。

「……………リ……………ヴィエ……………」

幸い直撃はしなかったものの、茜は吹き飛び、ホールを転がる。茜はうつぶせで倒れる。

痛みをこらえて必死に前を見ると、そこにはイクサリオンと、ラングからもらった、二枚のパートナーカードが散らばっていた。

「あ……」

茜はそれに手を伸ばす、その向こうで怪物が虎視眈々と茜を狙う。

「白……！！」

もうためだ、茜がそう絶望した時に口から出た名は、イクサリオンの……白の物だった。

その言葉、主の最後の言葉になってしまいそうな、その言葉が、届いたのか。

動けぬはずの白騎士の体から、光が溢れ出した。

その光は純白、輝く白き太陽の光　！！

暖かいその光は、落ちた二枚のパートナーカードへ降り注いでいく。怪物が驚きおののく、それほどの力だった。

「は、白……！？」

その光を受けて、パートナーカードが宙に浮かぶ。

そして光は大きさと輝きを増して行く、だが、まだ何かが足りない。

茜は、よろよると立ち上がった。

白が、自らを助けてくれようとしている。

おそらく、この行為は白自身の力、この行為は白自身の意志の力。自らを守ってくれる守護騎士は、決して諦めていなかったのだ！

「はあ……はあ……そうですね……くっ……。私も、諦めません……」

…諦めて、なるもんですか……!!」

茜はその光に手をかざし、意識を集中する。

傷ついたイクサリオンを修復させるときやっていたように、茜はその光へ自らの魔力を注ぎ込む。

主と従者の魔力が、パートナーカードを包む光をより強くし、その光は形を成して行く　!!

イクサリオンの代わりに、主を守る牙が今誕生する　!!

「私に　力を貸してください!」

茜が気高く叫ぶ、それに応えるかのように、二匹の大きな獣が光を破り現れる!!

それぞれ白と黒の“装甲”に包まれた、猫のような巨大な姿……“機獣”とも呼ぶべきか。

茜とイクサリオンを守るかのように、その二匹の機獣は怪物の前に立ちはだかった!

「遠慮はいりません、やっっちゃってください!!」

《バオオオオオオオオオオ!!》

主の名を受けた時、二匹は咆哮し、怪物へ飛び掛かって行った

!!

一四話『猛牙乱舞』（後書き）

茜「全然牙が乱舞してませんよ！」

酸欠「タイトル詐欺、ってやつなのよな！」（ドヤア）

酸欠「ああ、それはそうと、最後に出てきた二匹、まだ名前が決ま
ってないんだ、もしかしたらもしかすると、名付け親になれるかも
……」

【次回予告】

新たな力を得て、合流した綜夜達。

しかしそこに、再び管理局が！

綜夜達、管理局、怪物 混戦を極める戦場に、現れるは過去の因
縁と災厄とそして 黒き流星！

綜夜「こいつは楽しくなりそうだな！」

次回、一五話『災禍と流星』

災を狩る刃が往く ！

怪物が叫びを上げて黒の獣を追おうとするが、その足は途中で止まる。ずる、と怪物の体がずれ、そのまま怪物の体は細切れになり、霧散する。

《フン……》

一度黒の獣はニヒルに鼻を鳴らすと、霧散していく怪物に背を向けた。

一方で白の獣はというと……。

《ゴロゴロ……》

「きゃはは！ くすぐったいですよ〜！」

あろうことか、すっかり警戒を解いて喉を鳴らし、茜にじゃれ付いていたのだ。

戦闘中の威厳と風格はどこへやら、今の白の機獣はほとんど特大サイズの飼い猫となんら変わりなかった。

《ガフ……》

黒の獣は呆れたようにため息をつく。

その時、ずずうん！ と建物が崩れる音が振動とともに響き、機獣達は咄嗟に茜の周囲を囲んで警戒する。

茜も次なる脅威がどこから来るのか警戒し、待機状態のイクサリオンをぎゅっと握りしめて警戒する。

そして、新たな脅威が現れた！！

『VOOOOOOOOOO!!!』

壁をぶち破って現れたのは先ほどと同じタイプの怪物、だが色は白を基調としたタイプだ。

茜とその従者たちはさっと身構える。

しかし、様子がおかしい。

『VOAAAAAAAAAAAAAAAA……!!!』

怪物は茜たちの方へと二、三步歩いたかと思えば、真っ赤な炎に包まれ一瞬で灰となったのだ。

そしてその灰となった怪物の背後から現れたのは、茜がよく知る人物 綜夜だった。

「紅月君！」

「風下！ 感動の再開は後だ！ まずは祝ちゃんとラングの二人と合流するぞ！」

綜夜の手握られた紅き二振りの剣、煉獄の怨嗟、紅蓮が唸りと共に獄炎を吹き出す。

敵対する怪物達、羽虫のタイプの怪物が大量に綜夜の背後から現れたからだ！

「ミディアムに行くぜ！ インヴォルティーン 肉の包み煮!!!」

綜夜はその羽虫の大群に対し、炎を吐く二振りの煉獄刀をファンのように回転させる！

そうして生み出した獄炎の焰渦に羽虫たちは巻き込まれ、次々と消し炭になってゆく！

「ミディアムどころか黒焦げじゃないですか……わわっ」

茜がややひきつった表情で突っ込む。

そうこうしているうちに白の機獣が茜をぐいと器用に自らの背に乗せ、走り出した。

黒の機獣はすでに移動を開始していた。

「おい待て黒いの！ 一緒に行くぞ！ 白いの、茜を落っこすんじゃないぞ？」

《ウウオウ！！》

「ったく……こいつは、楽しくなりそうだな……！」

綜夜はあくせくと指示を出しながら、その場から離れるべく二対の機獣と移動を開始した。

ポイントG - 1上空。

「あの……海さん……」

哨戒部隊が助けを求めたポイントまで、海と二人で移動していたのはが気まずそうに口を開いた。
海はなのはの正面を飛んでいて、その顔がどんな物か分からなかった。

「ポイントG-1だ、来るぞ」

海がなのはの言葉を遮るように呟く。

なのはは何か言おうとしたが、思わず押し黙ってしまう。

《警告、敵正反応多数》

《接触までカウント》

なのはの首に下げられた待機状態のレイジングハートと、海の胸ポケットに入った待機状態のノートウングが警告を発した。なのはは少し迷ったような表情を、すぐに引き締める。そして、なのははレイジングハートを起動させる。

海も同様に待機状態のノートウング、渋い銀色のライターを取り出して起動させた。

「行くよレイジングハート……セット・アップ！」

《All right my master . set up》

「仕事だ、ノートウング」

《Okey-doke》

なのはの手には紅き宝玉の聖杖、レイジングハートが。

海の手には銀鋼の銃大剣、ノートウングが握られ、二人の体は防衛バリアジャ服ケットに包まれる。

ノートウングを通して、セリアから通信が入る。

《二人とも気を付けて！ こいつら結構手ごわいわよ！》

瞬間、二人の目の前に羽虫の怪物の大群が現れた。その異形に、なのはは思わずぎよっとする。

「チ……セリア、今どこだ！ 哨戒部隊の奴らは！？」

近づいてきた羽虫の一匹をノートウングで叩き斬りながら、海は吠える。

《私はそこから南西の山の中！ 哨戒部隊はあんたの目の前、五百メートルほど先に！》

「あ、あのっ！ はやてちゃ……じゃなくって、哨戒部隊の人達は無事なんですか？！」

なのはが砲撃で羽虫たちをけん制しながら、セリアへ通信をつなぐ。

《なのはちゃんね？ はやてちゃん達は大丈夫、今ポイントG-2にに向かって撤退中よ》

セリアのその報告を聞くと、なのはの表情はより一層引き締まる。

《早く行ってあげて。近づく虫けらは私が撃ち落とすから！

「はいっ！」

なのはがセリアの言葉に勢いよく答え、海と共に哨戒部隊の元へと急いで行く。

その遠くで、セリアは愛用のスナイパーライフル型超遠距離攻撃用デバイス“アリア”を構え直す。

「さあ、行くわよアリア」

《L r a n g e m o d e A c t i v e . い つ で も ど う ぞ、
御主人様》^{ミナス}

セリアは愛銃の引き金を引き、相棒と可愛い後輩の道を開くため、
広範囲射撃を放った。

廃墟、中層階。

ラングと祝は怪物ひしめくこの地獄のような廃墟を、派手な戦闘と
共に駆け抜けていた。

「氷華……一閃！」

祝が氷の魔力をまとった一撃を、トカゲ型の怪物に叩き込み氷結粉
砕する。

しかしその一撃の後、祝はその場で膝を折ってしまう。

魔力と体力が底を尽きかけているのだ。

「ハア……ハア……！」

そんな祝を襲おうと、今度は四足歩行の獣型の怪物が飛び掛かる。

祝は一瞬身構えるが、その怪物は次の瞬間頭を打ち抜かれて吹き飛
んだ。

「大丈夫か、祝！」

ラングが両手にハンドガンを構えながら祝を引っ張り上げ、立ち上がらせる。

「綜夜達の所までもう少しだ、気張れよ！」

《スターアトマイザー、散布》

ラングはそう祝を励ましながら、自身のデバイス“クラッドRR”から範囲回復剤スターアトマイザーを散布する。

「あ、ありがとうラング……！」

祝は少し体にまとわりついた疲労が取り払われたことを感じ、再び剣を握り直す。

ラングは駆け出した祝の後ろを援護するが、何か悪い予感が彼の頭の中を駆け巡っていた。

（なんだか……嫌な予感がするぜ。何か、何か強大な何かがかっちに向かつて来てやがる……）

歴戦の勇士としての感覚が、こちらに向かってくる大きな力を感じ取る。

その感覚はチクチクとラングの機械の肌を通して、警告を与える。

（それも一つじゃねえ……チ、厄介なことにならなきゃ良いが……！）

近づいてくる小型の怪物たちをツインハンドガンで撃ちぬきながら、ラングはその強大な気配に対して警戒を強める。
今この場は、着実に熾烈な戦いの舞台へと変わりつつあった。

廃墟、???

ポッドの中に入った黒い騎士は、喧騒と騒乱の音とにおいによってか、徐々にその目を開きつつあった。

その様子をアジサイ色のロングヘアの女性を傍らに侍らせた白衣の男が、まるで開花する花を見る様なうっとりとした表情で見っていた。

白衣の男は、何やら白い布にくるまれた大きな何かを抱えている。

「おお……見たまえ……彼が目を覚ましつつある……!!」

「ドクター、危険ですので早く脱出を」

恍惚とした表情でポッドの中の騎士を見つめる“ドクター”とは対照的に、女性はやや冷めた様子だ。

しかしドクターはそんな事を気にしている様子は微塵も無い。

「まあまあ、もう少しだけ見させてくれ。なんていったって私が遺跡の中、氷漬けにされていた“彼”を“聖骸布”と共に発見し、彼を何とか目覚めさせようと今まで頑張つて来たんだ。それが達成できて私は今、感動しているんだよ」

「はあ。そういえば、“短剣”はどうするおつもりで？」

何かのスイッチが入ったのか、勝手に一人で盛り上がるドクターを尻目に、女性は至って冷静に言葉を紡ぐ。

ドクターはその“短剣”という単語を耳にすると、やや困ったような表情となりながら、興味がなさそうに答える。

「ああ……あれか……うん、そうだな……。ま、そのままにしておこうか、完全に研究し尽くしたし……“スポンサー”もあの結果で納得しているようだったしね。もっとも……私はアレに興味は無かったんだがなア」

「了解しました」

「……まあ今回の“守護神”ガーディアンも頑張ってくれるだろう、歴代のよう
にね。さあ、行こうか“娘”よ、まだ見ぬ君の“妹達”の元へ！」

ドクターはそういうと、目覚めつつある騎士の前の台に、その白い布にくるまれた“何か”を優しく置いて、白衣を翻した。

「フフ……君の“お姫様”はそこに置いておくよ。約束通り頑張っ
て守ってあげてくれたまえ。ではさらばだ、流星の黒騎士」スタードライバー

最期にドクターはポッドの中の騎士に、妖艶な笑みと共にその言葉を投げかける。

そして女性がドクターの肩を掴むと、二人の姿は一瞬にして消えた。白い布がはらりと取れ、その“何か”が姿を現す。

それは、一人の幼い“少女”であった。

「……！」

騎士の目が少女を捉えた時、その体は大きく反応する。
なぜならば、その少女は騎士にとって最愛の。

ゴゴゴ！！

一際大きく廃墟全体が揺れ、騎士達のいる部屋に一匹の恐竜型怪物と羽虫型怪物数十体が、壁をぶち破りながら侵入してきた。双方は激しく争っており、無造作に暴れまわってところ構わず破壊を振りまいている。

『VAVOOOOOOOOOOOO！！』

恐竜が咆哮し、紅い棘を周囲に発射する。

羽虫達はそれに打ち貫かれ、消し飛んでいくが、それでも残った羽虫達は恐竜へ群がり、その肉に牙や爪を立てる。

それに対し恐竜はもはや狙いなどつけず、でたらめに棘を飛ばしまくる。

その棘のうちの一つが、狙いを大きく外れて少女へと向かっていく。あわや少女の棘に貫かれそうになった瞬間、強い紅色の光がその棘を弾き飛ばし、部屋全体を覆った　！！

ゴオオオオオオオオ！！

その光の奔流は部屋にある、あらゆるものを無に帰して行く、ただ二つ　少女と騎士を除いて　。
光の奔流が止まる。

ポッドに入っていた時身に着けられていた鎧は、外れていた。

今の騎士の姿は黒い装束、胸には翠色の宝玉。

そして肩と胸部を守るプロテクターが付けられた、シンプルな戦士

の姿。

唯一違和感があるとするれば、左腕に何かを隠すように黒い布を被せている所か。
ともかく、永き眠りから目覚めた騎士は、目覚めぬ少女を腕に抱いて、その場に立ち尽くしていた。

「……………俺は……………ここは……………？」

騎士は考える、なぜ自分がここにいるのか、ここはどこなのか、そして自分が抱える、小さく息をするこの少女は一体誰なのか。
しかし騎士がいくら考えようと、どれ一つとして分からなかった。だが、今自分が何をすべきか　それはすぐに分かった。

『G U U U U U U U U U U U ! ! !』

いつの間にか騎士と少女の周りを、怪物達が囲み、狙っていた。

騎士は、少女を片手に抱いたまま、胸の翠色の小さな宝玉を取り、上空に投げる。

「フィルディング！」

騎士が相棒の名を呼ぶ、すると宝玉　フィルディングは光を放ち、彼の刃となる！

永き眠りから覚めた騎士剣は、ギラギラと得物を求めて鈍い光を放ちながら、主の手に握られた！

「弱きを助け、悪しきを挫く」　だつたよな、オリヴィエ」

騎士はそう呟くと、少女を守るように抱き直し、フィルディングを怪物達へと向ける。

そして深呼吸をすると、怒号と共に怪物達へ向かって行った。

「ゼロ・エルグランド……参る!!」

そう、彼の名は“ゼロ・エルグランド”。

数百年からの眠りから覚めた、古代ベルカ王国の遺児は、“約束”を胸に抱き、新たな物語を作り始めたのだった。

一五話『災禍と流星 集結〜目覚め』（後書き）

あ、ちなみに機獣の名前募集まだやってます。

今の所龍神さんがくれたやつだけなので、選ぶ悩みが無くて若干寂しいですww

ちなみに現在募集しているのをまとめてみました、参考にどうぞ。

?完全フリー。キャラでもデバイスでもロストログアでもなんでもござれ。ただし現在色々と手一杯の状況なので、使えるかどうかは分かりませんが、でもなるべく出すようにします。

?先代の守護神達。オリジナルの守護神を、簡単なストーリー付きで募集しています。応募して下さいったキャラを使用して、短編を書きます。本編にもたまに絡むかも……？

?白と黒の機獣二匹の名前。カツコよくても可愛くても、どんな名前でも、ただし下品なのは駄目よ。

応募方法はなんでもかまいません、メッセージでも感想でも、一番やりやすいのを選んでくださいね。

では、お待ちしております！

【次回予告】

多くの勇士たちが集結し、戦場は混乱を極める。
そんな中、災禍を纏いて現れる影が、ある一人の戦士を狂狼に変える……！

綜夜「ここからが本番ってどこか……!!」

次回一六話『災禍と流星 乱戦』呪縛』

災を狩る刃が行く !

一六話 『災禍と流星 乱戦と呪縛』 (前書き)

今回は文章量の割に早めに更新できた……のかな？

晩御飯の後に書き始めたのに空が明るいや、駄目だこりゃ。

ではどうぞ、今回はアクション多めだよ！

一六話 『災禍と流星 乱戦と呪縛』

ポイントG-2、山頂。

殺戮の色に染まった残酷なフードを深々と被った戦士風の男が、廃墟のある近くの山頂から廃墟を見下ろしていた。

山 といっても切り立った崖のような場所だ。

「ねえねえ、行かないのキース？ 私、早く戦いたいな！」

そこにじつと立ち尽くす男 キース・デイジイの背中に、紅目のファルティスが声をかける。

見た目に反して、かなり幼げな声色と問いかけであった。

「……………」

「ねえってば〜」

しかしキースは答えない。

ファルティスはぶく〜、と頬を膨らませ不機嫌な様子だ。

「おかしい」

「え？」

不意にキースが口を開く。

抑揚のない、死人のように低く生氣のない声だった。

「数が少なすぎる。…………先客がいたのか？」

その言葉はファルティスに向けられた物では無く、ほとんど男の独り言であった。

「くんくん……でも強そうな“におい”ばっかりだよ！ そいつら殺つつけたら、沢山“ページが埋まる”んじゃない？」

しかしファルティスはお構いなしに……というより、自分に話しかけられていないのを知らずに、笑みを浮かべながら言う。

その言葉に少しだけ思うところがあつたのか、キースは少し俯いて考える素振りを見ると、一言だけ呟いた。

「お前にしては良い指摘だ……」

それを聞いたファルティスは、子どもが親に褒められて喜ぶのと同じ満面の笑顔を浮かべる。

しかしキースはファルティスのそんな笑顔など、見向きもせず、無言で崖のような山頂から飛び降りた。

「あ、待ってよキース！ もっかい褒めて〜！」

ファルティスは子どものような言葉と共に、しかし楽しそうにキースの後を追って、崖を飛び降りた。

廃墟、上層部、更地と化した研究室。

ゼロは再びフィルディングを起動させると、怒号と共にその怪物へ向かって行った。
その姿はまるで、流星のようだった。

ポイントG-2、廃墟前。

「大丈夫か、はやて！」

鉄槌の騎士、ヴィータが甲殻類型怪物の堅牢な体を、鉄槌グラーフアイゼンで叩き割りながら叫ぶ。

その体は傷だらけで、今まで激しい戦いを繰り広げていたことがはつきりと見て取れる。

「一応は……！ 皆は！？」

同じくボロボロのはやてが、傷だらけのシグナム達を気遣う。

「なんとか！」

この哨戒部隊ははやてとヴォルケンリッター達で構成されていたのだ。

恐らく、これ以外のメンバーが哨戒部隊であれば、怪物達の奇襲により、最低でも半壊の状態にされていただろう。

今まで一人の欠落も無くここまで来れたのは、ヴォルケンリッター達の戦闘技能の高さと、はやての潜在的な指揮能力の高さにあった。しかしそれでも無数の敵を相手にするのは、絶対的に不利な物。

いくら一騎当千の騎士達の集団であろうと、疲労し、摩耗していく。今、はやて達は危機に瀕していた。だが、その危機を打ち砕く一筋の光が、彼方より飛来した！

ズドオオオオオ！！

その桜色と蒼穹の光は、はやて達の周囲に纏わりつく怪物達を一掃し、吹き飛ばす！

「みんなー！！」

「なのはちゃんー！」

現れたのは、紅玉の金杖を携えし純白の織天使と、宝剣を持つ狼剣士！

なのはと海が、はやて達の危機を救わんと駆け付けたのだ！

「間に合ってよかった……！」

「いた、いたた。な、なのはちゃん、抱きしめてくれるのは嬉しいけど傷が……」

「あー！」「じゅめんー！」

なのははすぐさまはやての元へ降り立つと、感情のままはやてを抱きしめた。

しかしはやての少し情けない声を聴くと、あたふたしながらすぐにはやてから離れた。

「氣イ抜くな！ 高町ー！」

海の怒号がなのはの耳をつんざく。
なのははすぐに緊張感を取り戻すと、レイジングハートを構えなおした。
すぐさま新たな敵がやって来たのだ。

「っ　あの建物に避難を！」

はやてが叫び、弓引かれたかのように一斉に廃墟へ向かっていくー
同。

追う敵の一群を遠くからセリアの魔弾が撃ち抜くが、それだけでは怪物達の勢いは止まらない。

流石のスナイプ型デバイス、アリアでも、遠すぎて威力が減退しているのだ。

（海！ 私もそっちに向かうわ！）

（馬鹿かお前！？ 帰艦してろ！）

セリアからの念話が海に入る。

海は思わず大声を上げるが、セリアは引かない。

（私だけ安全な場所でのんびりしてろっての?!）

（ああそつだ！ 風呂にでも入ってりゃいいだろ!!）

（バカ！ あの艦のお風呂は入り心地、サイアクなのよ！ それに
ね!）

（なんだ！ 洗剤が安物だつてい　　）

(アンタを置いて行けるもんですか！ 私達はパートナーよ！)

(！！)

(と・に・か・く！ 今から全速力で向かうから！)

そこで念話が切れる。

海は何か胸にモヤモヤした物を引っ搔けたまま、なのは達の後を追うのだった。

廃墟、中層部、通路。

茜を乗せて走る白い機獣“ミカエル・F・ヴァイス”ファウストを、黒い機獣

“サタン・C・シュバルツ”クラウンが援護する。

そしてさらにその一人と二匹を、懺血の守護神“紅月・綜夜”ガーディアンが守護する。

まさに鉄壁の守り 火焰と斬撃を繰り出しながら進む彼らの前では、少々の怪物達の群れなど薄皮一枚同然だ。

《フン！》

前進から出した刃で敵を切り裂きながら軽いステップで進むサタン。対照的にミカエルは、まるで重戦車のような勢いと重量感、そして全身に張った硬いバリアで、近づく障害物を弾き飛ばしながら進んでいる。

二匹は対照的だった。

ミカエルはパワフルな動きと重い一撃、そして堅牢な守りを持った機獣。

サタンはトリッキーかつスピーディな動き、そして鋭利な多数の刃を持つ機獣。

性格も温厚で懐っこいミカエルと、クールなサタンとお互いに足りない部分を補っているかのようだ。

しかし真逆な二匹にも、共通する部分がある。

それは“主”を守る、という強い目的意識だった。

その意志が、二匹の絶妙なコンビネーションを生み出しているのだ。

「ミカエル、サタン、頑張ってください！」

《ウオオオウー!!》

「つとオ！俺も忘れんなよ風下！」

背後から迫る怪物を、綜夜が煉獄の二振りによる斬撃波で焼き尽くしながら言う。

目的の場所まであと少し　　綜夜は二人の仲間の存在を近くに感じていた。

だが、その行く先を防がんとするように、瓦礫の壁が目の前にふさがる。

しかしそんな物で止まるほど、懺血の守護神と機獣達は軟ではない。すぐさま綜夜は、その瓦礫を吹き飛ばそうとぐんと足を上げる。

「でええいッ！」

その足をサッカーボールを蹴る時の要領で、思い切り跳ね上げ、瓦礫を綺麗に吹き飛ばした！

そして瓦礫の向こうの、大きなホールのような場所に出た！

「なっ！？」

それと同時に驚いたような声が、瓦礫の向こう側から聞こえてきた。

「綜夜！」

「ラング、祝ちゃん、待たせたな！」

そこには、祝とラングがいたのだ。

「皆さん！ ご迷惑をおかけしました！」

「か、風下さん。そ、それは……？」

祝は茜が乗っているミカエルを見て、少しギョツとした様な顔をする。

ミカエルは甘えたような声を上げて、茜を見つめていた。

「私の新しいお友達です、乗ります？」

「あ、いや……乗せてくれるなら……」

祝はチラチラとミカエルやサタンを見ながら、少し遠慮がちに言う。

「じゃあサタン、祝ちゃんを乗せてあげてください！」

《《ガウ?!》》

サタンが思わず不満そうな声を上げた。

「そんな嫌そうな顔しないでください、女の子には優しくしないと駄目ですよ」

《ウウ……》

そんなやり取りの後、不満げな顔をしながらも、サタンはなんだかんだ祝を乗せる。

一方でラングは、綜夜と先ほどから感じている“強力な気配”について話していた。

「嫌な予感がしてならねえ……引くにしても潰すにしても、一旦ここから脱出した方が良い」

「ああ、そうした方が良さそ」

綜夜が同意しようとした、その瞬間だった。

「ラング？」

ラングにとって、とても懐かしい声が彼の名を呼んだ。その声に、ラングは急いで振り返る。

「はやて？」

海は綜夜を見かけると、苦虫を噛み潰した様な顔をした。

綜夜が海の方へ振り向く、海は警戒を強めた。

しかし海にとつて意外なことに、綜夜は無防備にも真っ直ぐ海へ近づいてきたのだ。

「テメエ、的になりに来てんのか?!」

「残念だけどそんな趣味はないな！ 初対面だから自己紹介をしようと思つてさ！」

途中、牙を立てて襲つてきた怪物を綜夜は軽々と切り裂くと、海の後ろへ回り込んだ。

「俺の名前は紅月綜夜！ アンタは？」

あっさりと後ろに付かれたことに、海は驚きを覚える。

資料通り いやそれ以上の実力を、海は綜夜から感じ取る。

(だが殺気は感じない……なんだコイツ、単なるバカか?)

砲撃モードのノートウングから放つ一撃で、多数の敵を巻き込みながら海は舌打ちをしながら、綜夜に応える。

「俺は南雲海 早速聞くんが、なんだこの怪物どもは、お前のペックか?!」

「こんな気味の悪いペックいらねえよ！ ちなみに俺は犯人じゃねえぞ、つと！」

「綜夜さん!」

「おおなのはちゃん、無事か！」

「うん！」

なのはが嬉しそうな顔をしながら二人に近づく。

いつの間にか三人は、それぞれ背中合わせの体系をとっていた。

「チ……まさか容疑者に背中を預けることになるとはな」

海が不満げな声色で、怪物をノートウングで貫く。

「だから俺じゃねえっての！」

綜夜は大声で弁明しながら、怪物を魔力の槍で粉碎した。

「そつだよ海さん！ 綜夜さんはそんな事しない！ 綜夜さんは…

…！」

なのははレイジングハートからの砲撃で、近づく敵を破碎しながら、海を説得する。

「証拠がねえ！」

「確かに、な！」

海が苛立った様子で吠えながら、砲撃で敵を蹴散らす。

しかしその攻撃を逃れた数体が、海を引き裂こうと接近する！

綜夜はどこか楽しげな声色で陣形から抜け出すと、海に近づいた敵に飛び蹴りの応酬を喰らわせ、吹き飛ばした！

「！」

海は目の前に現れた綜夜に、すかさず銃口を向けた！

「やめて海さん！」

なのはが悲鳴に近い声を上げた。

だが海は無言でノートウングの引き金を引く！

ドオン！

低く重い銃声が響くと共に、撃ち抜かれたのは 綜夜の背後に迫っていた怪物であった。

「おっ、わりいな！」

綜夜がニツとはにかむ。

海はキツとその笑顔を睨みつけると、ジャコンとノートウングを近接モードに切り替え、綜夜の隣に並び、構える。

「フン、容疑者に死なれちゃ困るだけだ」

「海さん、ありがとう！」

嬉しそうな様子のなのはが、その隣に並ぶ。

海はちらりとその表情を見るが、すぐに視線を眼前の敵に向け直す。その時、地上からの銃撃が敵を貫いた。

「海！ 大丈夫……って、紅月綜夜……！？」

「セリア！ 話は後だ！」

「ええと……ちょっと状況が読めないけど……。分かったわ！と
にかく怪物をやっつけりゃいいんでしょ！」

ガチャリ、とセリアは空中の敵に向けてアリアを構える。

「行くぜっ！」

綜夜が叫び、敵の群れの中へ突っ込んで行ったのを皮切りに、乱戦
が幕を開けた！

「ラング！」

「ああ！」

一足早く怪物との乱戦を行っていたラングが、シグナムの声に応え、
暁の大刀を振り上げる。

シグナムの持つレヴァンティンが唸りと共に紫電の焰を発する。
向かうは大型の恐竜型怪物

！

「紫電！」

「双閃！」

轟！！

剛なる二つの斬焰の軌跡が、怪物を切りつけた！

怪物は悲鳴を上げながら、切り口から炎上し、消滅する。

だがラングの猛攻は止まらない

！

「氷牙、千刃！」

《ウオオオオオ！！》

その小型の怪物達は黒き機獣、サタンと、褐色の剣乙女、祝の無数の刃によつて切り裂かれ、地に落ちてゆく！

仲間達の援護受け、ラングとヴィータは敵に肉薄した　　！！

「俺謹製の炸裂弾だ！　釣りはいらねえ　全弾持つてけ！！」

不敵な笑みを浮かべるラングは、驚異的な速射でマガジン内の炸裂弾を怪物へ打ち込んでいく！

そして宣言通り全弾撃ち尽くすと、後退し、ヴィータとすれ違つ！

「打つ潰せ！　ヴィータ！」

「ああっ！　任せろ！！」

ヴィータが巨人の鉄槌を振り上げる！

そしてそれを、怒号と共に振り下ろした！

ドツゴオオオ！！

巨人の鉄槌が振り下ろされると共に、怪物の内部の炸裂弾が一斉に爆発する！

怪物は微塵も残されず粉碎された！

だが間髪入れずにまた新しい怪物が現れた！

「まったく、おちおち再会を喜んでもらえそうにないな……！！」

ラングはマシンガンから大剣へと武器を換装しながら悪態をつく。はやてがその隣へ降り立ってきた。

「せやな……それにしても、なんでラングがここに？」

「分からん、またどこぞの旧文明人の仕業か……」

かつて、ラングははやての元へ降り立った事があつた。孤独だったはやてにとって、ラングはすぐに掛け替えのない“家族”となつた。

そしてラングが元いた世界の“旧文明人”の野望や、“闇の書”事件を通して、ラングははやてと、そしてヴォルケンリッター達と強き絆で結ばれるようになった。

一度は涙の別れを告げたものの、まさか再開がこんな形になるとは、ラングもはやても、ヴォルケンリッターたちも予想していなかった。だが、それでもはやては嬉しかった。

ラングは、そんなはやての頭に、ポンと手を乗せた。

「ラング？」

機械の体だったが、ラングの手は優しかった。

「背、伸びたな」

「えへへ、ちよつとは大人っぽくなったやろ？」

「前よりは、な」

一瞬だけ、二人の間に安らかな時間が流れた。

それは戦士には十分すぎる休息の時だった。内側から溢れる力を
感じながら、ラングはすぐさま臨戦態勢を整える。

「さあ、行くぞはやて！ 付いて来い！」

「うんっ！」

光の軌跡を描きながら、二人は空へ駆けあがって行った。

血染めの刃　ブラドエツジの一閃が敵を裂き、鋼色の砲剣　ノ
ートウングの一撃が敵を砕く。

銃弾の乙女　アリアの銃弾が敵を貫き、紅玉の金杖　レイジン
グハートの砲撃が敵を粉碎する。

海とセリアの二人を除いて、共闘を初めてにする四人の間には、い
つの間にか奇妙で絶妙なコンビネーションが出来上がっていた。

「綜夜ア！」

「っしゃああ！」

海が蹴り飛ばした敵を、綜夜の拳が砕く。

一方で彼らに迫る敵は、全てセリアが放つ弾丸によって打ち貫かれ
る。

その銃撃を阻止しようと向かってくる怪物はすべて、なのはの砲撃
によって倒されていた。

「まったく海のヤツ、あんなに楽しそうにしちゃって！ 昔みたいね
！」

「海さんの昔、ですか？」

なのはがセリアの隣に降り立ち、砲撃を撃ちながら疑問符を浮かべた。

セリアは少し困った表情をしてみせるが、敵を蹴散らす海を援護しながら言葉を紡いだ。

「ええ、なのはちゃんに話しても大丈夫そうね、アイツは昔

」

だがその言葉はそれ以上続かなかった。
セリアの腹を、黒い弾丸が撃ち抜いたのだ

！

「えっ………?!」

《御主人様?!》

「セリア!!」

アリアが声を荒げた。

その場に力なく崩れ落ちるセリア、腹の傷からは黒ずんだ血が流れ出している。

なのはは絶句するも、セリアを撃ち抜いた敵がどこにいるのか辺りを見渡す。

海はいつもの彼とは、明らかに違う必死の形相でセリアの元へ向かった。

が！

「ッ！ 海！ 避ける!!」

綜夜の叫び声が聞こえた瞬間、海は自分めがけて飛来する殺意の塊の存在に気付く！
それは黒い破壊の閃光、海はギリギリでそれを避けるが、バランスを崩して地面に落下した。
海に避けられた黒の閃光は、怪物達を巻き込んで悲鳴と共に蒸散させる。
地面に転んだ海はすかさず体勢を立て直し、セリアを、自分を攻撃した相手を発見した。

ドクン。

その時、海には自分の鼓動の音が、やけに、良く聞こえた。

「て めえ」

「あはは残念、避けられちゃったね」

空中に固定した鎌剣、ビーストファンクに座りながら、いたって純粹な笑みを浮かべるのはファルティスだ。

しかし海の眼中にその雌獣の姿は無い。海が見開いた目で凝視するのは、その隣。

その隣の、フードを深くかぶった、海のノートウングと良く似た銃大剣型のデバイスを持つ男。

「キース……デイジイ……！！」

ゆっくりと崩壊して行く、海の理性。

彼の瞳の奥に、燻っていた炎が燃え上がる。それは、邪悪な憎しみの色をしていた。

「か……海……だめ……！」

セリアが痛みを耐えて悲しげな声を上げる。

しかし、その声は海には届かない。いや、届いていても、無意味だったのかも知れない。

海は満月の光を浴びて、殺戮を楽しむ怪物、狼男に変貌するかのようになり、その表情を変えていく。

「俺の　全てを奪った男　……！」

憎しみの焰が、完全に海の理性を焼き尽くした！

「うあああああああああッッッッ……！」

海はノートウングを手に、真っ直ぐにキースへと突っ込んで行った！
悲しみと憎しみで滾る炎を瞳に宿して。

一六話 『災禍と流星 乱戦と呪縛』（後書き）

話が進んだような進まないような……そしてタイトル詐欺である、なんだよ呪縛って。

まあいいや、今回で機獣の名前募集は終わりです！

なんか並べたら微妙にゴロが良かったような気がしたので全部使わせていただきました、素敵な名前をありがとうございます！

あ、イクサリオン最近空気だ……次回で活躍する、のかな？

その他二つの募集はまだやってます、ドシドシご応募ください！

【次回予告】

ついに現れた災禍。

過去の復讐に燃える海の過去を、セリアはなのはに語り始める、その時なのはは……？

そして虚構の復讐者と銀剣の災が来襲し、綜夜は窮地に立たされる。しかしその時、一筋の流星が……！！

次回一七話 『災禍と流星 過去を襲撃』

綜夜「昔から変わってないな、ゼロ！」

災を狩る刃が往く……！

一七話『災禍と流星 過去』（前書き）

すみません皆さん、私、活動報告で嘘こきました（汗）

しかも完成させられずに割と中途半端なところで終わってるし、大分駆け足気味だし……やってらんねえーっ！

……とにかくこれから週末には更新できるように頑張って行きたいと思しますので、もうしばらくお付き合いのほどよろしくお願いいたします。

もう少しつっても全然終わる気配がないけどな！（マジキチスマイル）

一七話 『災禍と流星 過去』

「おおおおっ！！！」

怒りの声を上げて海がキースに向かってノートウングの刃を振り下ろす。

しかしその一撃はいとも簡単にキースの持つ大銃剣“ヴァン・ヘルシング”によって弾かれる。

「ねえキース、私あっちに行つてていい？」

「好きにしる」

まるでそこに海がないかのように、キースはファルティスと言葉を交わす。

ファルティスはビーストファンングを構えると、ラング達のいる場所へと向かう。

海は体勢を立て直し、再びキースへと向かう。

だがキースは海を見もせず、海の顔面に蹴りを叩き込んだ。

「がっ！！！」

短い悲鳴を上げて地面に激突する海。

そこへ綜夜が駆け寄る。

「海、大丈夫か？！ 一人じゃ無茶だ！」

「ッるせえっ！！ 手エ出すな！！！」

鬼の形相の海は、差し出された綜夜の手を振りほどく。そしてまた怒号と共にキースへと向かって行った。

「待てよ！」

綜夜は急いでそれを追おうとする。

しかし、視線の端に傷ついたセリアがいることに気づき、後ろ髪を引かれる思いでそちらに向かう。

「セリアさんが……！！！」

「安心しろ、手当するから」

綜夜はダクダクと血を流すセリアの腹部の傷に手をあてがう。

セリアは傷に触れられた痛みで顔を歪ませる。

だが傷に触れた綜夜の手が赤黒い光を放つと、その痛みは徐々に和らいでいった。

綜夜が手を放すと、傷は塞がっていた。

「今はこれぐらいしかできねえ………安静にしててくれ。なのはちゃん、頼むぜ」

「う、うんっ！」

綜夜はそう言い残すと、なのはとセリアのいる場所に小規模の境界を張った。

そしてブラドエッジを一度クルクルと回し、苦戦する海の元へと向かって行った。

その背中を境界の中でセリアを抱えるなのはは、緊張した目で見つめた。

一瞬で激変した状況、なのはは混乱していた。
セリアがうめき声をあげる、なのははハッとする。

「うっ……な、なのはちゃん……」

「セリアさん?!」

セリアはすっかり衰弱している様子だ。

恐らく先ほどの魔力弾はただの攻撃ではないのだろう。

綜夜の施した手当によって、命の危険は無いように見えるが、それでも辛そうであることが見て取れる。

額に汗を垂らしながらも、セリアはよろよると上半身を立たせ、なのはの目を見た。

「なのはちゃん……聞いてくれる……? アイツの……海の過去……」

「……はい!」

セリアは、ゆっくりと語り出した。

「喰らええええッ!!」

海がノートウングの砲撃モードで、キースに砲撃を撃ち込む。
惜しげもなくカードリッジを連発し、威力を加速させた砲撃だ。

ドウツツ！！

蒼い閃光が走り、爆発、煙を巻き上げた。

海はすかさずノートウングを大剣に切り替えて、怒号と共に煙の中心 キースに向かって行く。

「おおおおおおおおお！！」

その一振りは巻き上がった煙を全て吹き飛ばすほどの勢いだ。しかし 空振りに終わっていた。

「な ？！」

一秒とも経たぬ内に感じる、背後からの殺気 ！

キースは刃を振り上げ、今まさに海を真っ二つに引き裂かんとしていたのだ！

ゴオオツ！！

放たれたヴァン・ヘルシング殺戮の一撃は。

ガキイン！

血塗られた刃、ブレードエッジの一振りによって防がれていた。

綜夜は受け止めた刃を思い切り弾き飛ばす！

予想以上の力によって吹き飛ばされるキースは、フードの上からでも分かるように少し驚いていた。

「その感じ…… “災禍の台帳” だな」

綜夜がブレードエッジをキースに向けながら言う。
瞬間、赤黒い魔力の嵐が吹き荒れ、綜夜の姿は制服姿から古代の戦士の装束に変わっていた。
その姿を見、キースは身を震わせた。
いや、キースでは無い、キースの中の“何か”が、身を震わせたのだ。

「懺血の守護神ガイディアン」

キースが濁った声で呟く。

海が振り向き、変貌した綜夜の姿を見る。

「デメエ……？」

「海、悪い事は言わねえ、下がっててくれ」

「んだと？」

綜夜の一言に、海は齒を食いしばって怒りを露わにした。

「アイツはロストロギアを所持して」

「るつつせえ！！」

あくまで冷静な綜夜の言葉を遮って海が吠えた。

「アイツは俺から奪った！ 全てをな！！ だから俺が……俺が！！」

海は荒い息で肩を上下させながら叫ぶ。

その瞳には、燃えたぎり荒れ狂う、悲しみと憎しみの焰が燃え上がっていた。

まさに復讐者の瞳　それは綜夜が良く知る一人の少女に良く似ていて。

海はカードリッジをロードすると、瞬間的に凄まじいスピードを發揮して再びキースへ飛び掛かる。

「海！」

綜夜の制止を振り切って海は渾身の一撃を放つ。

再びキースはそれを難なく避け、反撃する。

しかし海も歴戦の勇士、早くもその反応スピードに対応し始め、ヴァン・ヘルシングの刃をノートウングで防いだ。

ギリギリと互いの刃がぶつかり削り合い、激しく赤熱し火花を散らす。

「忘れちゃいねえ……四年前の“あの日”……！！！」

海が忌々しく口を開く。

ノートウングがカードリッジを無作為にロードし、海は力を増す。

キースが押され始め、刃と刃のせめぎ合いの中発生した衝撃波によって、深くかぶったキースのフードがはだけた。

その下の　一切の希望を捨て去ったかのような、混濁した灰藤色の目が、ドロリとした眼光で海を見ていた。

「そうだ、テメエが……テメエが俺から奪った　！！！」

海がキースの刃を弾き、間髪入れず怒りの大剣を振り下ろす！

「仲間を、家族を！！！」

キースはその一撃を軽くないなし、海へ横一線の斬撃を放つ！
ガギン！ と重い音と共に、海はそれを防御の魔力を込めた左腕の
バリアジャケットで防ぐ！

「おおおおおおおおおっ！！！」

焦熱の怒りを吐き散らしながら、海はガラ空きになったキースへノ
ーディングを振り下ろした ！

「海さんが、反管理局組織に？」

「ええ……」

セリアが腹の傷を抑えながら、ゆっくりと語る。

地球出身の海は、早くに両親を亡くして、施設暮らしだった。

その施設は、劣悪な環境 まさに生き地獄と言っていいほど最悪
な環境だった。

外の世界と完全に遮断された監獄のような場所で、海は暗い幼少期
を過ごした。

しかし海が九歳になったある日、その外界との交流を断つ壁が崩れ
る。

施設の重く錆びついた壁を崩したのは、当時の時空管理局が追って
いた人造魔法生物だった。

人を喰らって成長、強化されていくその化け物の一体は、地球にも

降り立っていたのだ。

海はその怪物に追われ傷を負い、絶体絶命の危機に陥る。それを救ったのは、一人の魔導師だった。

「それが“ウルフ”　なのはちゃんも、名前ぐらいは聞いたことがあるでしょ？」

「は、はい、確か有名な反管理局組織のリーダーだった犯罪者だつて……」

「陸士訓練校じゃ……そう教えるでしょうね……」

セリアはやや遠くを見つめながら、寂しそうに言う。

「セリアさん……？」

「ごめん……何でもないわ……。続けるわね」

ウルフに助けられた海は、彼に導かれ、反管理局組織“ワーウルフズ”の一員となった。

海はそれまで孤独だった。

ワーウルフズのメンバーはそんな海に、仲間と、そして家族というものがあるか、教えてくれた。

彼等もまた、海と同じく身寄りのない者達だったからだ。

仲間と家族を得た海は、同時に自らに眠っていた魔法の才覚も目覚めさせていった。

気付けば、海はワーウルフズの中でも有数の戦士の一人となっていた。

その頃には、海にとってワーウルフズは、自らの帰る場所であり、仲間であり、家族となっていた。

しかし、海がワーウルフズに入ってから六年後　突如として、全てが消えた。

「ある日……ワーウルフズの拠点が襲撃されたの……海は偶然、ウルフと一緒に任務に行っていていなかった……」

セリアが辛そうに顔を逸らす。

「ワーウルフズは、その襲撃　たった一人の襲撃によって全滅……海が駆け付けたころには、ウルフも……」

「そんな……」

啞然とするなのは、セリアは言葉を続ける。

一瞬で全てを失った海は、その後、間もなく管理局に拘束される。

しかし管理局は海を罰する事は無かった　彼の実力を惜しんだのである。

短い拘束期間と書類上だけの罰則が処された後、海にはすぐさま管理局員のバッジが与えられた。

無論、海がワーウルフズの構成員であった、という事実は社会的に抹消されていた。

そしてワーウルフズが全滅した、という噂は管理局によって改竄され、気付けば全てが管理局の手柄となっていた。

やがて海はキリカがそれに目を付けられ、ハウンドイーグルに所属する事になったのだ。

「でも、海は管理局の仕事なんかより、ずっと仇を、キース・デイジイを探していたわ……」

「海さん……だからあの時……」

お前には沢山いるだろ。仲間タチがよ。

海という言葉がなのは頭の中にこだまする。

なのはが海の瞳に見た“喪失”と“孤独”の色は、その過去によるものだったのだ。

「海と私が出会ったのは、そこでよ。私は、海を一目見て気付いたわ、彼がワーウルフズの生き残りだって」

「え……どうしてですか？ さっき、海さんの過去は……」

なのはが疑問を浮かべた、セリアは、悲しげに眼を細める。

「ウルフは」

ガギイン！！

海の必殺の一撃が、キースの拳によって無残に弾き返される。

「があっ！！」

体勢を大きく崩した海に、キースの拳が叩き付けられ、海は大きく吹き飛ばされた！

キースはヴァン・ヘルシングを射撃形態に変形させると、海へと向

け、幾つもの黒い追尾弾を放つ！

(まずい……!!)

避けることも、防御することもままならない。

海は確実に襲ってくるダメージに対して、歯を食いしばった、その瞬間！

「シュート！」

キースの追尾弾を、現れた桜色の追尾弾“デイバインシューター”が迎撃する。

二つの魔力弾は炸裂し、煙を上げる。

海は思わず驚くも、急いで体勢を立て直した。

顔を上げると、そこには強い瞳でキースを見据えるのがいた。

「ッ……馬鹿野郎！ 手を出すんじゃ……!!」

「馬鹿は海さんです！」

「な!？」

なのはの喝に、海が呆気を取られる。

「話は、セリアさんから聞きました」

「セリア……無事なのか……?!」

海はセリアの名を聞いたときに、思わずそんなことを口走る。

なのはは頷いて、レイジングハートを構える。

「海さん、私に言ってくれましたよね“潰れるな”って……。それって、一人で悲しい気持ちを背負い過ぎちゃダメってことですよね」

「高町……お前……」

「だから、私、一緒に背負います、海さんの気持ち」

微笑みを見せるなのはの瞳には、強い決意の力が込められていた。

その瞳に宿る光　それは、海の恩師である“ウルフ”と、全く同じものだった。

ウルフも、こんな瞳をしていた。

強く、希望に満ち、その希望を他者にも与える強く優しい瞳。

まさしくそれは“英雄”の光。

昔、ウルフの瞳に見ていた物と、同じものを、海はなのはの瞳に見ていた。

「それに、私だけじゃありません、セリアさんだって背負ってくれます」

(そうよ、気づいてないだなんて言わせないんだから)

セリアの声が、海の頭に響く。

セリアは傷の痛む体を押して、結界内からアリアを構え、キースに向けていた。

《御主人様、あまり無茶をなさらずに》

「無茶しないと、だって私は、海の」

「セリア……高町……」

海は少し俯く。

しかし海は、ノートウングをおもむろに振り抜いた！

キースの放ってきた斬撃波に、自分の放った斬撃波をぶつけて相殺したのだ！

海は、先ほどとは打って変わって落ち着いた瞳でキースを見据える。

「……行くぜ……！！」

（ええ！）

「はい！」

そして静かに呟く。

なのはは頷き、セリアはアリアを構えなおす。

海は再びキースに向かって行った！

一七話『災禍と流星 過去』（後書き）

前書きにも書きましたけど、かなり駆け足気味でございます。

そして予告詐欺、もうだめだこりゃあ。

言うほどドロドロにならなかつたね、仕方ないね。

でも言い訳させてください、お話的にやらなきゃいけないことが多いすぎて、こうでもしないと收拾が付かないんです、ふへへ。

と、まあ次回はついに今まで空気だった皆大好きキリカが登場するぞ！

キリカの活躍にこうご期待！

あ、ゼロ君とフェイト（憎）も出るからよろしくね！

【次回予告】

虚像の復讐者は、偽りの敵を前に狂踊する。

そんな少女を救おうとする守護神をあざ笑う銀剣の男

絶体絶命

の危機に流星の黒騎士が　　！！

次回一八話『災禍と流星 憎悪』

一八話 『災禍と流星 憎悪』 (前書き)

もう書いてる自分でもわけわからなくなってきたぞ！

一八話 『災禍と流星 憎悪』

海がなのはとセリアの援護を受けて戦い始めたのを見て、綜夜はホッと胸を撫で下ろした。

その瞬間感じる……自分に向けられる果てしない憎悪を。

綜夜はそのドロドロと煮えたぎった感情を捉える。

その感情を発する源は、既に自らの背後に。

ギーン!!

綜夜は背後からの一撃を、振り向かぬまま背負ったブレードエッジの刃で受け止めた。

難なく止めた一撃を、“重い”と感じたのは綜夜の心に積もった自責の念か。

一撃の主は小さく舌打ちをすると、金の稲妻となって綜夜から離れる。

綜夜は振り向き、その一撃の主を補足する。

「綜夜……紅月、綜夜……!!」

そこにいたのは、紫色の暗黒を瞳に宿す少女 フェイトだった。

一方通行の憎悪、増大する憎しみの禁術に駆られた少女は、虚像の敵を討たんとその体に雷を纏っていた。

禁術に憑りつかれた彼女は、幽鬼のように負の感情の籠った声色で、綜夜の名を呼ぶ。

「殺す、今ここで …!!」

綜夜は紅色に染まった瞳で、フェイトの嫌忌の瞳を見返した。
フェイトはバチバチと感情のままに、己が身を焼くほどの雷をその
身から放っている。

綜夜がブラドエッジの切っ先をフェイトに……いや、フェイトを覆
う憎悪の根源へ向けた。

「フェイトちゃん……助けるからな　今ここで！」

瞬間、フェイトの体が閃雷を発すると共に消える！

あまりに早い移動故、姿が補足できないのだ。

まさに雷速。

電光の軌跡を尋常ならざる速さで描きながら、フェイトは一秒も経
たぬ内に綜夜へ急接近した！

「はあああああッ……！」

そして力のままに、死神の鎌の如く形態を変えたバルディッシュを
綜夜の頭蓋めがけて振り下ろした！

しかし　その程度の攻撃が届くほど、ガーディアン守護神の地位は低くは無い。

キーン！

電撃と憎悪と怨嗟を込めた、渾身の一撃。

魔力の消費効率も自らに由来する反動も、全てを無視したその斧撃は、
威力だけならばフェイトの使用する攻撃魔法の中でもトップに入る
だろう。

だが、それは軽く、あまりにも軽く　まるで軽羽根をはたくかの
ように、綜夜に弾かれた。

「クッ　……！」

「なっ?!!」

前回と違つと綜夜が気づいたのは、フェイトがもがき苦しみ始めたからだ。

綜夜は苦虫を噛み潰したかのように、歯を食いしばる。

フェイトを助けようとする全ての者に対して、あざ笑うかのように、第二の罫は仕掛けられていたのである。

(“禁術” を “禁術” で保護してやがる !!!)

フェイトに懸けられた憎悪の禁術・一方通行の憎悪。ワンウェイ・ヘイト

それ自体は解呪しようと思えば、出来なくもない魔法だ。

しかし、それは今、綜夜でさえ、懺血の守護神でさえ難しくなつていた。ガーディアン

理由は一方通行の憎悪を覆うかのように、第二の禁術が存在していたから。ワンウェイ・ヘイト

その禁術の名は“悪意の錠前”。

呪いを保護するその禁術は、保護された呪いが解呪されようとしたとき、呪いが掛かっている者に、死に等しい苦痛を与える。

そして最悪 いや、多くの場合死に至る。

呪いを解けば助かる。

そんな淡い希望を、希望を持つ自らの手で断ち切らせ、絶望させる。あまりに残酷な禁術が、フェイトをさらに縛り上げていた。

「くそっ!」

綜夜はフェイトの頭から手を離す。

無理矢理に解呪すれば、フェイトは死んでしまう。

完全に解呪ができないわけではない、しかしここでは場所も、状況も悪すぎる。

（どうするっ！？ “全力”はここでは出せない！ 悪意の錠前の効果を完全に鎮圧させるほどの結界じゃあ、そもそもフェイトちゃんに耐えられねえ！！）

綜夜は思考をグルグルと回らせる。

しかしどれも駄目、失敗、最悪の結果になる未来しか見えない。守護神の力を、人の悪意が上回っていた。

「クソッ……………！！ 目の前の女の子一人救えないで、何が守護神だ……………！！」

“牙”は、巨悪と“戦う”力を与える。

それ以外……………回復や結界、そして解呪はおまけのような物だ。

それでは、悪意の錠前に守られた禁術を破る事は出来ない。

ねっとり絡みつく人の悪意の前に“戦う力”だけでは、神の名を冠する守護神であろうと太刀打ちは難しかった。

（こんな時に……………殺し手アサシンがいれば ……！）

綜夜は珍しく心の中で弱音を吐く。

目の前のフェイトは、悪意の錠前の効果の所為か、呆然としている。そんな彼女の肩を、ポンと叩いた者がいた。

綜夜はその者の姿を見ると、長考を止めて素早くブラドエッジを構える。

「キリカ……………！！」

「お久しぶりですね、紅月君」

キリカはニコリと“優しさに満ちた”表情で会釈をした。しかし綜夜には分かる、その表情の裏側には、絶対的な悪意が潜んでいる。

だがその悪意は巧妙に、厚く隠されていて、見抜くことは難しい。それを見抜けなかった自分が、綜夜は憎らしい。綜夜はその怒りを力に変えるかのように、ブレードエッジを握る手を強めた。

「ああ……久しぶりだな、見ない内に随分フェイトちゃんと仲良くなったもんだ」

「フフフ……元から仲は良いですよ、彼女とはね」

「いず……せんせ……」

「フェイトさん、ここは私に任せてください」

キリカはフェイトをそっと空中に描いた結界の中へ降ろすと、綜夜へ向きなおった。

その手に握られた銀剣、シルバーの刀身が不気味に光を放つ。

怪物達も、その威光か、キリカの底知れぬ悪意に充てられてか、それとも別の理由か、キリカには近づこうとしなかった。

綜夜が先手を打ち、キリカの元へ飛んだ！

「でええええいつ！！」

ギューイイーン！！

不気味に笑みを浮かべるキリカは、綜夜の剣戟をシルバーで受け止

めた！
赤黒と深青の火花が散り、綜夜とキリカは激しく鏝迫り合いを始める！

「フフ……随分と力を抑えているようですね？」

「テメエ……！！」

キリカの言う通りだった、綜夜はかなり力を抑えており、本来の十分の一以下すら出せていないのだ。

ガギン！

キリカがにやりと邪悪に口端を上げ、綜夜を吹き飛ばす！
キリカがそれを追い、突きの連撃を放つ。

一瞬にして繰り出される無数の刺突を、綜夜はブレードエッジの刃で何とかを防ぐ！

「牙の力は大きいですからねえ！　こんな閉所で使えばお友達もただでは済まないでしょう！」

「ク……！！！」

綜夜は外套を翻し、キリカの目を眩ますと、いったんキリカの傍から離れる！

圧倒的　まさにその言葉が似合う。

力を抑えているとはいえ、守護神をこつも押す者は、過去においても滅多に存在しなかった。

キリカは不気味な笑みを綜夜に向ける。

「……ですが、^{ガイディア}守護神に力を出してもらわなければ、“こちら”も少々困るんですよ……」

「デメエ……」

綜夜はキリカ・イズルという男の体から、かつてないほどの悪意が漏れ出している事に気が付く。

「いったい何者だ……なぜ牙の事を……!？」

綜夜が驚きを隠せぬ様子であることを尻目に、キリカは結界の中からおぼろげな瞳でこちらを見つめるフェイトに、シルバーの切っ先を向けた。

「フェイトちゃん!!」

綜夜が焦燥感のままに身を乗り出して叫んだ。

「おおっと、“落ち着いて”ください紅月君」

キリカは至って冷静に、満面の邪悪な笑みを浮かべながら、綜夜を諫める。

「フフ……良く聞いて下さい紅月君……私はねえ、彼女をいつでも殺せるんですよ」

「んだと……!」

「私がこ刃から剣閃を飛ばして真っ二つにして殺すことも、彼女に“死ね”と命じて殺すことも、彼女に懸けられた呪いを無理矢理解呪して殺すことも……」

キリカは楽しげに、そう、子供のような好奇心に爛々と目をぎらつかせながら意気揚々と語る。

綜夜はその言葉一つ一つが、己の中の真っ赤な感情を目覚めさせようとしているのが分かった。

「……………！！！」

「おお、最後のは良いですね。“美談”になるとは思いませんか？」

キリカがぱあ、と表情を明るくしたのを見た瞬間　　綜夜は咆哮した！

「いい加減に　しろよ！！！」

刹那、恐ろしいまでの魔力がホールに吹き荒れる！

その血のような紅色をした光は、暴力的なまでの魔力を周囲全てにまき散らす！

「フフフ……………そうですね、それですよ紅月君……………もつと、もつと力を使ってください」

キリカはその紅色の閃光に打たれながらも、涼しい顔でシルバーを綜夜に向け直した。

綜夜は暴風のようにあふれ出る魔力を身に纏い、フルドライブ化したブレードエッジを構えて、キリカに爆発的な速度で切りかかった！先ほどのフェイトの雷速など、もはや鼻で笑えるレベルの速度での一撃　キリカは真っ向からシルバーで受けて立った！

ドオウツ！！

剣同士のぶつかり合いというより、強大な風同士の衝突といった方が良い轟音が響く。

状況は 拮抗！

キリカは押され気味ながらも、綜夜とは対照的に青く光を放つシルバーの刃で、しっかりと綜夜の一撃を受け止めていた！

「そう……！！ それでこそ……！！ それでこそ……！！」

キリカは狂喜に打ち震え、叫んだ。

その声に呼応してか、シルバーの刃が次第に大きく形を変える！

美麗だった刃は禍々しくうねり、湾曲し、まるで無数の生物の牙が生えたような凶暴な見た目へと変貌する！

麗しの銀剣シルバーは、もはや剣と呼ぶにはおぞまし過ぎるほどの怪物性と邪悪さを以って、綜夜の血肉を貪らんと剣圧を増した！

「……！！」

しかしキリカが相對するのは守護神の力、無限の力。

この程度で止まるはずも無し！

綜夜と血染めの刃の力は、キリカの銀の邪剣シルバーの剣圧を丸々と呑み込むと、容赦なく猛攻を叩き込む！

ブラドエッジが振るわれる度に、ホール全体が力の余波によって唸りを上げる。

その紅色の剣閃を受けるキリカは、受ける度に身が削れて行くような感覚に襲われていた。

痛みより狂おしく体を覆い苦痛を与えるその感覚は、常人ならば一撃で倒れ伏してしまうだろう。

だがキリカはその苦痛の感覚すら楽しむかのように、頬を釣り上げ、邪悪な笑みでブラドエッジの剣戟に応じる！

「おおおおおおおおッ！！」

綜夜が咆哮を上げて、渾身の一撃をキリカへと叩き込んだ！

ズドオオ！

空間が破裂するかのように悲鳴を上げる！

激しい力と力のせめぎ合い、黒き赤と青の奔流の中　　綜夜の中の
守護神はキリカの瞳に、久しい邪悪の気配を感じた　　。

「がああああッ！！」

力の収束が弾け、大きく吹き飛んだのは　　綜夜だった。

綜夜はバウンドするほど凄まじい勢いで地面に叩き付けられる。

「ぐっ……キリカツ……お前……?!」

「……これが“牙”の力……なるほど“ヤツ”が欲しがるわけだ」

驚く綜夜の視線の先にいる傷だらけのキリカは、左の掌に宿った赤黒い光をまじまじと眺めていた。

「貰いましたよ紅月君、牙の力　　その一片をね」

その光は、そう、懺血の牙からあふれ出る守護神の力だ。

先ほどの衝突の一瞬、ほんの一瞬の隙を付いてキリカは綜夜からその力を抜き取ったのだ。

「くっ……！！」

綜夜は苦しげに立ち上がる。

体がいう事を聞かない、懺血の牙が傷ついた己の体を修復しようと

しているからだ。

キリカはゆっくりと剣を身動きの取れない綜夜に向けた。

「これだけ手に入れば十分です、それでは、紅月君にはご退場願いますでしょうか」

シルバーの刃に青い魔力が纏われて行く。

確実に綜夜を殺すだけの威力が、シルバーに纏われて行く。

「それでは」

キリカはそう一言だけ言うと、必殺の剣閃を綜夜に向けて飛ばした。綜夜はブラドエッジを構え、その一撃を防御しようとした！致命的な一撃が、綜夜を切り裂くかに思えた、その時　！

「ヴェスフレオ・カノーネ！」

キリカの剣閃を、何者かの砲撃が相殺した！空中で爆散する二つの閃光、綜夜とキリカは、介入してきた第三者の方へと顔を向けた。

「お前は……！」

綜夜は意外な表情をする。

その介入者の顔が、懺血の牙に刻まれた太古の記憶の中にいた者と一致したからだ。

その名は　。

「ゼロ……ゼロ・エルグランドか！」

戦局は 加速して行く 。

一八話 『災禍と流星 憎悪』（後書き）

【次回予告】

加速し、収束して行く戦場。

最期の煌めきは、全てを終わらせるに足る光か。
物語は、新たなステージへ向けてゆっくりと動き出す。

次回一九話 『いざなう光』

災いを狩る刃が往く！

十九話『いざなう光 前編』(前書き)

そして前後編になるという、うへへ、サーセンww
でも、もしかしたら後編は今日中に上げるかもしれません。

十九話『いざなう光 前編』

懺血の守護神と、銀剣の男の間に割って入った黒騎士は、二人を見やる。

綜夜は、その黒騎士の顔を見て驚く。

過去 いや、太古の昔に、懺血の牙の記憶に刻まれた男と、目の前の黒騎士の顔が一致したからだ。

「ゼロ……ゼロ・エルグランドか?!」

「お前……なぜ俺の名を？」

腕に少女を抱く黒騎士 ゼロ・エルグランドは、少し警戒したような顔で、自らの名を呼んだ綜夜を見る。

「いや……そんなことはどうでも良い」

しかし、すぐにゼロは上空にいるキリカへと、その殺気の籠った視線を送った。

そして腕に抱く少女を守るように、ティルフィングを構える。

キリカは、そのゼロの視線をあざ笑うかのように、シルバーを腰に収めた。

「お前……何者だ？」

「君こそ何者ですか？ せっかく“悪党”を退治しようと思ったのに」

「ほぞけよ……」

ゼロはキリカの手が、腰に収めたシルバーの柄に伸びるのを瞬間的に察知すると、ティルフィングから翠色の斬撃波を放つ！
キリカはニヤリと口端を上げると、目にも止まらぬ抜刀でその斬撃波を切り裂き、消滅させる！

「危ないですねえ、あと一步反応が遅れていたら真つ二つでしたよ」

「それはお互いにだろうが、クソ野郎が」

ゼロの武人として研ぎ澄まされた感覚は、すぐにキリカの裏側に有る悪意を読み取っていた。

対するキリカもまた、突如として出現したゼロの中にある、自らとは正反対の性質を感じ取っていた。

全く別々の性質を持つキリカとゼロの間には既に、“敵”という一つの共通意識が生まれていた。

「ゼロ、気を付けろ、ソイツは……！」

「ああ、なんとなくだが分かってきた。だが『お前』がやられるとはな、以前とは違うのか？」

「八割は俺が不甲斐ないのが原因だろうな、後の二割は……」

「……確かにあの殺気、ただの人間じゃねえ」

綜夜の持つ、人ならざる者の気配。

それによって揺り起こされるゼロの記憶。

“忌まわしき英雄の塔”の記憶が、ゼロの脳内にありありと再現される。

そう、その場所で、その塔で、かつてゼロは懺血の守護神と共に死線ガイティアンをくぐったのだ。

もっとも、それは過去の話であり、現在の守護神である“紅月綜夜”という男は、今初めて見た、という形になるのだが。

そんな綜夜はズキズキと痛み、牙の自己修復能力によって赤々と赤熱する鉄のように熱い体を動かしながら、ブラドエッジを構える。

「く………!!」

「おやおや、紅月君、無理はしない方が良いですよ。牙の力を使えない今の君は、ただの人間なんですから」

キリカがフラフラとおぼつかない足取りで刃の切っ先を向ける綜夜をあざ笑う。

言葉を返す代わりと言わぬばかりに、綜夜は未だ衰えぬ闘志の焔を宿した瞳をキリカに向けた。

しかしその闘志とは裏腹に、キリカの言葉通り、綜夜の体からは懺血の牙の力の象徴である血紅色が抜け、古の戦衣も霧のように消えてしまった。

牙は完全にその全機能を自己修復に向けた、今の綜夜は、キリカの言う通りただの人間である。

「それでも俺は、テメエをブツ倒す！」

だが、この紅月綜夜、無駄に“牙”に選ばれた人間ではない。

この少年の持つ無限大ともいえる勇気とバイタリティ、それは牙の力なくしても衰えぬことの無い黄金の光を放つ精神そのものである。ゼロは、そんな綜夜の横顔を見て、フツと口端を上げた。

「変わんねえな、守護神ガイティアンつてのは」

「ゼロ……?」

「俺を手助けしてくれた守護神もそうだったぜ、馬鹿で愚直で……どこまでも真っ直ぐな奴だった」

ゼロはニヤリと上げた口端のまま、綜夜の前に立つ。

そして、自分の腕に抱えた少女を綜夜へ手渡した。

「この子は……?」

「分からん、俺は永い間眠りについてた。今がいつかは知らねえが、多分、その子が今俺が守るべきものなんだと思う……少し、頼むぜ」

「……分かった」

綜夜はゼロから託された少女を、綜夜はしっかりと腕に抱く。

ゼロはそれを確認すると、クルリとキリカの方へ向き直り、ティルフィングを構えた。

「おや、長いお話は終わりでしょうか?」

「ああ……待たせたな」

その言葉を皮切りに、ゼロはキリカの元へと猛然と飛翔する!

そして、両手で握りしめたティルフィングを、キリカへと振り下ろした!

ガギーン!

翡翠色を放つ流星の如き一撃、キリカはそれを受け止める。

だが、その一撃で終わらないのがゼロ、流星の黒騎士と呼ばれた男！

「はあああああッ！！」

ゼロは荒れ狂う嵐のような縦横無尽の乱撃をキリカに叩き込む！

柔と剛を兼ね揃えた剣戟は、一撃一撃が必殺の威力を持つ！

一見すればゼロが優勢に見えるかもしれない、だが、戦いの流れは、確実にキリカが捉えていた！

キリカはゼロの必殺の斬風の一撃を受け流すと、シルバーの邪悪に輝く一閃をゼロに向かって放つ！

ゼロの体をシルバーの刃が裂く　かに思えた。

確実にゼロを捉えていたシルバーの一撃は、空しく中を舞っていた。

「！！」

「ソニッククレイブ　！」

ゼロは、すでにキリカの背後に回り込んでいた！

そして紅色の残照が煌めく音速の^{ソニッククレイブ}一閃を、ガラ空きのキリカの背中へ放つ！

ザンッ！

「ぐ……！！」

キリカの顔が歪む。

ソニッククレイブの一撃は、確実にキリカにダメージを与えていた！好機を掴んだゼロは、そのチャンスを逃すまいと、さらに高く飛び

「あれ、は……!?!」

キリカが“それ”に向かって吠える。

ゼロと綜夜は、空間を揺らし、空を裂くようにして空中に現れた“それ”を見て驚愕した。

「アハハツ！ 楽しいね!!」

「チ、相変わらず面倒な奴だ　!!」

ラングがはあちこちに飛び回りながらこちらを攻撃してくる、ファルティスの攻撃をかくくりながら悪態をついた。

「ラング、あの女とどんな関係なんや?!」

「んなこと聞いている場合か!」

ガギイン!!

ラングは瞬時に出現させた片手剣で、はやてと共にファルティスが繰り出した鎌剣、ビーストファングの一撃を受け止める。

そしてもう片方の空いた手にハンドガンを出現させると、間も開けずにファルティスに向かって乱射する!

ドウドウドウツ!!

「わたたたたつ!!」

ファルティスは間の抜けた悲鳴を上げながら吹き飛ぶ、しかしダメージは浅いようで、すぐに体勢を立て直した。

「やったな……うえ!？」

「吹雪け銀鷲、白銀の光と成って我が敵を穿て！」

ファルティスは顔を上げて再度敵を見据えると同時に、間抜けな驚きの声を上げた。

視線の先では、既にはやてが追撃の一発を放たんと、大魔法の詠唱を追えて騎士杖シュベルトクロイツの切っ先を自らに向けていたからだ。

「ヴェズルフエルニル！」

銀色の閃光が、刃の如くファルティスへと向かう！

ファルティスは避けることが叶わないと判断したのか、ビーストフアングを盾にして、それを防御する！

銀の閃光は、ビーストフアングに防御され、湾曲していく！

「っ……!!」

はやては顔を険しくした、思ったよりもファルティスの防御力が高く、有効な打撃足りえないからだ。

悲鳴のような軋みを上げ始めたシュベルトクロイツを、はやてはギョツと握りしめる。

「ふふ、案外弱いね！ 跳ね返しちゃうよ！」

ファルティスの体が淡くオレンジ色に光り始める、反撃の合図だ。

先ほどよりも威力が何倍にも膨れ上がったヴェルズフェルニルは、ファルティスを押す！
そして、防御が崩れ去ると同時に、ファルティスの体はその銀色の閃光に飲み込まれていった！

「やった?!」

はやてがラングに支えられながら、ファルティスを見やった。
ファルティスは相当のダメージを受けたらしく、プスプスと煙をいたる場所から上げて横たわっている。
それを見て、ラングは眉間にしわを寄せた。

(アイツ、人間ヒューマンじゃない　!?)

「あはっ、あははははは……!!」

ラングの驚きなどよそに、ファルティスが笑い声をあげてゆっくりと立ち上がる。
いたって純粋な笑い声だった、楽しくて楽しくて仕方がない子供のような純粋無垢な笑い声。

ファルティスの、まるで買ってもらったばかりの玩具を見る様な目は、はやては戦慄する。

「アハハハハ!!」

バチバチと火花の散る体を構わずに、グルグルとビーストファンクを回しながら笑うファルティス。
はやてを降ろし、ラングはファルティスの前に出る。

「はやて、下がってる」

なのはが弾丸を避けながら海に目配せをする。

海は頷くとそれを間一髪でかわしながらキースへと肉薄、突きでの一撃を叩き込む。

ガイン!!

鈍い鉄肉のぶつかり合う音、キースに防がれたノートウングの刃が、赤熱して火花を散らす。

「はあああああああ!!」

エクセリオンモードのレイジングハートを真っ直ぐに突き出したなのはが、キースへと突貫する!

キースはすかさず片方の手でそれを防ごうとする　だが。

「させないわ　アリア!!」

Strike bullet fire!

アリアの砲口が火を噴き、防御しようとしたキースの片腕を弾いた! 防御を免れたレイジングハートの切っ先が、キースの脇腹に接触する!

バリアジャケットに阻まれてゼロ距離とまではいかなかったが、十分すぎる距離　!!

「全力!　全開!!」

「ドライブ!!」

海は瞬時にノートウングを砲撃形態に変形させ、魔力を集中させる!

「デイバイン!!」

レイジングハートがカードリッジをロードし、急速に必殺魔法のチャージを完了する！

「バスタアアアアア！！」

カツ！！

凄まじいまでの閃光と爆発が、辺りを覆った！
なのはを小脇に抱えた海が、爆発の中心地から抜け出してくる。

「こ、このヤロウ……ガキのクセして何て戦法考えやがんだ……！」

「じゃ、じゃははは……ごめんなさい」

コチン、とボロボロの海はなのはの頭を叩く。

なのはは冷や汗をかきながら苦笑いをして、海から離れる。

しかしすぐに面構えを整えると、なのははチャキ、とレイジングハートを構える。

あの攻撃には、今発動し得る、そして相手にダメージを与えることのできる最善の手。

瞬間的な火力だけで言えば、彼女の超必殺魔法に匹敵すると言っても差し支えない。

かなり無茶の過ぎる　　良く言えば「なのはらしい」無茶苦茶な攻撃だ。

それでも　　。

「うそ」

地上から見ていたセリアが、驚愕の声を上げる。

キース・デイジィ　　災禍の記載者は、あの攻撃を喰らっても、ま

十九話『いざなう光 前編』(後書き)

現れる暗黒　そして現れる、謎めいた敵の正体。
戦いのサイコロは、新たな振出へと向かって転がる。
。

次回二十話『いざなう光 後編』

災を狩る刃が往く　！

二十話『いざなう光 後編』(前書き)

やっと二部が終わりました。

でもお話自体はじえんじえん進んでません、やってらんねえ!!

あ、でも書くから、頑張つて書くから!!

募集もまだやってるから!

『二十話』いざなう光 後編

おどろおどろしい闇、暗黒、深淵。

「あれは……?!」

ある者はその来訪に驚き。

「なに……あれ……」

ある者はその登場に戦く。

その闇は、世界の悪意を詰め込んでそのまま煮詰め腐らせたような、怖気の走る黒い存在は、ゆっくりと、有りもしないはずの“瞳”を開いて。

「何を……遊んで……いる……キリカ……イズル……」

五臓六腑に重々しく響き渡る、うめき声を上げた。

Langside。

異変は、すぐに俺の第六感^{Lang}を刺激した。

周囲を飛び交っていた怪物達は動きを止め、一斉に“そちら”を向いている。

周りでシグナム達が戦っていた音も失せ、完全な静寂がホールに訪れていた。
だが、その静寂は平和や勝利によるものではない、もっとおぞましい物だ。

はつきりとは分からない、センサーにも異常はない。

人造の体を持つ、機械キヤストの一族である俺が、こんなことを言うのもおかしいのかもしれない。

だが、言いようもない不安に駆られた俺は、すぐに振り返る。

目の前にいる明らかな脅威フルフェイスを無視してまでも、その異変の方を向かざるを得なかった。

それほど、その異変は、圧倒的な物だったのかもしれない。

はやても、同じようにそちらを向いていた。

その先には見たことも無い、えげつないほどの邪悪な世界が、パツクリと口を開けてこちらを“見て”いた。

海side。

奴キスが、俺の目の前で動きを止めた。

なのはとの連携攻撃が効いたのだろうか、呆然自失と虚空を見つめる奴を見つめ、俺は考える。

だがすぐに思考を破棄する。これは好機だ、今こそ奴を討つ！
俺はノートウングを構える。が、しかし。

その瞬間に、感じたことの無い無数の嫌悪感が、俺を襲った。

鼻の奥を死体の放つ腐臭に似た、気持ちの悪い刺激臭がつつく。

耳の奥底、鼓膜のすぐ近くで、小さな悪魔が下手糞なギターをかき鳴らすかのような幻聴が聞こえる。

冷たい、熱い、温い、肌を伝わる温度が波打つかのように変化して行く。

肌のすぐ下、筋肉と皮の間を、血管を蹂躪しながら、小さな無数の蛇がのたうつ。

何かの意味があるのか、ないのか意味不明な幾何学模様が目の前で浮かんで消えてゆく。

声すら上げられなかった、全身を怖気が走り、血が凍りつく。

何かが、何か圧倒的な存在が、俺の背後に、奴の視線の先キスにいる。

隣で振り向いたなのはが肩を抱いて震え、怯えきった目で何かを見つめている。

俺は振り向くまでの一瞬が、永遠にも感じられるような恐怖を持ちながら、ゆっくりと、恐怖の源に目を向けた。

「貴様……余計な事を……！」

キリカが怒りの噴煙を口の端から溢れさせながら、眉間に皺を寄せ
る。

その視線の先に有った物は、まさしく闇、暗黒の世界そのものであ
った。

まるで、全く別の世界を、そこにだけ持ってきたかのような違和感。
空間の隙間から顔を覗かせる、その圧倒的な暗黒は、アメーバのよ
うに流動し、胎動し、蠢いていた。

まるで、その暗黒の世界自体が、一個の生命体であると言わんばか
りに、気味悪く這いずりまわっていた。

「貴様こそ……早く……“欠片”を……こちらに……持ち帰れ……」
暗黒の声は、まるで今にもこと切れそうな老人のような、涸れ切ったうめき声のような物だった。

「……貴様の命運……は……私が……握っているのを……忘れたのか……？」

「……チ……！ 化け物が……！」

暗黒の挑発に、キリカは腹の底から悪態をつく。

「ま、待て……！」

その背中へ、綜夜が声を投げつける。
キリカが、振り向く。

「紅月君、今日の所はここでお終いです。ま、せいぜい療養を……」
歯を食いしばる綜夜に、キリカが嫌味をつこうをした瞬間だった。
漆黒の魔力弾が、その言葉を遮るかのようにして、暗黒を襲ったのだ。

「あああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああ……！」

それと同時に狂気に満ちた絶叫が、暗黒の元へ飛来したのだ。

その声の主は キースだった。
ヴァン・ヘルシングを真っ直ぐに構え、今までにないほど感情を露出させたキースは、暗黒の世界へと切りかかって行った。

一瞬、キースとキリカがすれ違う。

だがキリカはキースを止めようともしなかったし、キースはキリカを気にも留めなかった。
ヴァン・ヘルシングの刃が、暗黒へと振り下ろされる。

ザンツ。

「災禍の台帳……その……類の……力は……もう……… 必要ない」

だが次の瞬間、鮮血を噴出したのは、キースだった。

右肩から左の脇腹までバツサリと切り裂かれ、キースは暗黒へ突撃して行った時よりも激しい速度で暗黒の前から弾かれる。

そして壁に叩き付けられ、血を周囲にまき散らしながら倒れる。

「キースっ!!」

ファルティスが悲鳴に近い声を上げ、すぐさまキースの元へと向かう。

「ドミナント……第三世代型……か……… 過ぎた技術だが……… 必要はない」

暗黒がそうつぶやくと、今度はファルティスに向かって、暗黒の弾丸が放たれる。

「! ……のお!!」

不意を突かれたファルティスは、数か所に掠らせながらもなんとかビーストファンクでそれを弾く。

そして重症のキースを抱えると、砕かれた壁から外へ逃げ出した。

「……」

キリカは一部始終を、まるでつまらない茶番を見たかのように鼻で笑って一蹴する。

そして気を失ったフェイトを抱えると、暗黒の中へ身を沈めようとしたが。

「待てよ、隊長　その化け物は何だ?!」

「フェイトちゃん!?!」

海と、それに続くなのは声が、その足を止めた。

「……お二人とも、落ち着いてください」

「!?!」

キリカが“ニツコリと笑って”二人を諷めようとする。

だが、その笑顔は、あまりにも不自然に、不気味に見えた。

まるで人間の皮をかぶった、醜悪な悪魔が、無理やり微笑んでいるかのような。

なのはと海は、思わずキリカへ武器を向けた。

「“誰”だ、お前……!?!」

海が思わず口走る。

海もなのはも今まで、数多くの人ならざる敵と戦ってきた。

だがしかし目の前にいる“不自然”の塊と、凄まじい暗黒の前に、未知の存在を前にして、恐怖は拭えなかったのである。

「誰」……?」

その恐怖の言葉を前に、キリカが、ピクリと反応を見せた。

「私は」

キリカは静かにシルバーを構えた。

そして、その銀剣の刃を、呪われし暴虐の爪に変えながら
一閃
した。

「私だ!!」

ドウツ!!

「ぐあああつ!!?」

青い閃風が巻き起こり、海となのはは吹き飛ばされそうになる。

だがその攻撃は、海となのはに届く前に、防がれる。

白の機獣、ミカエルとその主、茜が盾のように二人に向かう攻撃を
防いでいたのだ。

「大丈夫ですか?!」

「あ、ああ……なんとかな……」

顔を上げる海だったが、キリカはすでにいなくなっていた。

だが、目の前に鎮座する果てのない暗黒は、品定めをするかのよう
に、場に残った全ての者を見回していた。

「海！」

セリアが、傷口を抑えて海の元へ向かう。
ラングが綜夜の隣にはやてと共に降り立つ。

「綜夜、何だありゃあ……」

「分かんねえ……だけど、アイツは……危険だ……！」

綜夜が歯を食いしばる。

ゼロはフィルディングの切っ先を暗黒へ向けている。

暗黒は、未だ静観を決め込んでいる。

不気味な静寂。

綜夜が、ラングが、茜が、祝が、海が、セリアが、ゼロが、なのはが、はやてが、ヴォルケンリッターが、意識しない内にその暗黒へ武器を向けていた。

「……………」

暗黒が重苦しいかすれ声を上げる。

皆、身構える。

地獄から響くような重々しい声は、ゆっくりと語り出した。

「私の……名は……“ライブラリ”……」

「ライブラリ……?!」

「何が目的だ!? 何の目的でキリカと手を組む!?」

ライブラリ、と名乗った暗黒に対して、綜夜が吠える。

「進化の……ため……だ……ヤツは……我が駒に……過ぎん……」

「進化だと？」

ラングがいぶかしげな表情をする。

ライブラリはそれに応える。

「全てを見……全てを知り……全てを産み出し……そして滅ぼす者……管理者へ……」

「何やそれ……神様にでもなるつもりなんか?!」

「ヒトの……理解の範疇では……そうなる……かもしれない……」

「まるで意味が分からんぞ……!!」

「理解する……必要も無い……全ては……我が“プラン”の元……進められている……だが……」

カッ!!

ライブラリは蠢く暗黒から波動を、一斉に解放する。

その波動は緩やかな黒き瘴気となって、綜夜達を襲う。

ホールの至る所が崩れ落ち初め、残っていた怪物達が悲鳴を上げながら弾けん飛んで行く。

「お前たちの……存在は……イレギュラー……に……成り得る……故に……ここで始末する……障害は……排除する」

「かつ……はっ……?!」

生気が体の節々から、その暗黒の波動に飲まれて行くかのような感覚が全員を襲う。

綜夜はびりびりとした感覚　死が近づくその感覚を、鋭敏に感じ取っていた。

この瘴気はまさに、ゆるやかな“死”そのもの　全てを見境なく殺す兵器なのだ。

(このままじゃ……全滅しちゃう……!!)

綜夜は、何か起死回生の手はないかと探る。

今でこそ使えなければならぬ懺血の牙の力も使えない。手を伸ばそうともつかめない希望が、そこにはあった。

(やっぱり俺は牙の力が無けりゃあ……ただの人間なのか……?!)

「チクシヨウっ……!!」

綜夜は歯を食いしばる。

意識が遠のく、消えかかって行く視界の中で、綜夜は　光を見た。

「……?!」

綜夜の腕の中で眠っていた少女、ゼロの守るべき者、その少女の今まで閉じられていた瞼が、ゆっくりと開いたのだ。

少女が瞼を開くと同時に、綜夜を覆う瘴気が失せてゆく。

ほのかな極彩色の七色の光、少女から発せられたその光を受けて、綜夜は次第に自らの力が回復して行くのを感じ取る。

「君は……!？」

驚きを隠せない様子で、綜夜は少女を見るが、少女は虚ろな瞳で綜夜の目をみるだけで、答えようとはしない。

綜夜は少女の瞳から目を離すと、ゆっくりと立ち上がった。ライブラリが驚いたように“瞳”を見開いた。

「その……力……?」

しかし綜夜は気にも留めない。

ゆっくりと綜夜は遙か古代の言葉で魔法の詠唱を始めた。

それは、今できつる最善の手、皆を死の瘴気から避けるための、唯一の方法　!!

「我らを導くは、遙かなる者の意志　混沌を越え、我らを運命へ
呼びこみたまえ　!!」

「転移魔法……?」

ライブラリが、ゆっくりと暗黒の“手”を綜夜に向ける。
だがしかし、もう遅い。

綜夜達を導く遙かなる魔法の詠唱は、すでに完成している　!!
紅い光が、綜夜達を包み込み、飲み込む!

その光は、導き手の光　綜夜達を新たな物語のステージへと運ぶ
光だ。

光が、暗黒の瘴気を、手を振り払い、崩れ行くホールすらを呑み込む!
む!

ゴゴゴゴゴゴ!!

一瞬、眩いばかりの光の柱が空へ上がった。
そして、光が消え去った後には、すでに綜夜達も、暗黒も、怪物も、
施設も、何もかもが無くなっていた。
。 。
紅い光の残照、やがて消えゆく、それだけを残して
。

二十話『いざなう光 後編』(後書き)

物語はまた新たなステージへと移行する。

懺血の守護神が行き着いたのは、禁断の地、アルハザード。

綜夜はそこで“冥王”と名乗る少年と出会う。

新たな出会いは、何を生むのか。

「このままじゃあ、駄目だよな……」

次回二十一話『冥府の王朝』

災を狩る刃の切っ先は、どこへ向かう？

二二話『冥府の王朝 前篇』（前書き）

いやっほい！年内に何とか更新できたぜ！！

ただし例によって分割仕様……良いんだよ、俺は更新速度をとったんだ（二度目）。

天空 翼さんのキャラが登場します、それでは！

二二話『冥府の王朝 前篇』

気が付けば、綜夜は暗闇の中にいた。
。 淡い血の色をした光だけが、どこからともなく虚構を照らしている。

「いよう、お目覚めか？」

隣から声がして、綜夜ははっとそちらに振り向く。

古ぼけた戦衣に身を包み、背を向けて立つ男がそこにいた。

誰だ、お前。

綜夜は問いを投げかかる。

男は振り向きもせず、くつくつと肩を揺らして笑う。

「誰だ、か。ひどいもんだ、いつだって一緒にいたろ？」

男の言葉に、綜夜は困惑して首をかしげた。

紅い髪の男は構わずに言葉を続ける。

「ああ、そうか……わかんねえのも仕方ねえか、“会う”のは初めてだしな」

男は綜夜をあざ笑うかのように、わざとらしく両手を広げる。

その瞬間、男からだだならぬ気が漂い始めたのを、綜夜は感じ取る。

これは……?!

綜夜は驚愕する。

その力の感覚　匂いでも言うのべきか　ともかくそれは、綜夜にとってなじみの深い物だったからだ。
男は綜夜が驚愕したことに満足したらしく、再び肩を震わせて綜夜をあざ笑った。

そして、男はついに振り返る。

「初めましてだな、ガーディアン相棒？」

不気味な笑みを浮かべる、その男の見慣れた顔は、紅月綜夜そのもので。

「っ…！」

「きゃ?!」

少女の悲鳴と共にガシャンと音がして、盆が床に落ちた。

綜夜は少女の悲鳴で、自分が無意識の内にブラドエッジを握りしめていることに気が付く。

さっきのは夢だったのか　綜夜はブラドエッジの感触を掌に感じながら、うつすらと思考する。

「どうした、プレシ」

悲鳴を聞きつけ、急いで部屋まで駆けつけた青年が、警戒の色を濃くした。

綜夜は青年の焦燥の瞳が、明らかに自分をさしていることに気が付

き、そこでようやく自分が何をしているか理解する。

「わ、わるい……寝ぼけてた……」

綜夜は少女の白い首筋に、ブラドエッジの冷たい刃を突き付けていたのだ。

急いで綜夜はブラドエッジを待機状態に戻し、謝罪する。

「ふう……寝ぼけで人を殺しかけないで」

「大丈夫か、プレシアさん」

「ええ、なんともないわ」

『プレシア』と呼ばれた黒髪の少女が、胸を撫で下ろしながら呆れたように言う。

見知らぬ青年は、まだ警戒したように綜夜を見つめている。

「ここは……いや、あんた達は一体……？」

綜夜は現在の状況を知るために、口を開く。

それに初めて答えたのは、青年だった。

「僕の名前はラグラス、ラグラス・ウインガルだ。君のことは、寿さんから聞いてるよ、紅月 綜夜」

「祝ちゃんか……無事なんだな、あの子は？」

「ああ、君のことを心配していた」

「そうか……」

綜夜はラグラスの言葉に安堵すると、プレシアに向き直った。

「さつきはごめん、悪い夢を見ててさ……」

あらためて綜夜は謝罪をする。

プレシアは穏やかに笑うと、わざとらしく肩をすくめた。

「大丈夫、気にしてないわ。それに、悪い夢なら私もよく見るもの」

「そうか……って、ん？」

申し訳なさそうな表情で、そのプレシアの表情を見る綜夜。すると、綜夜はプレシアの顔にある不思議な感覚を覚えた。

綜夜はこの黒髪の少女の顔に、どこかで見たような、そんな既視感と言うか、懐かしさを感じたのだ。

「ふふ、どうしたの？」

そんな困ったような表情で首を傾げる綜夜に、プレシアは意地悪っぽく疑問符を投げかけた。

「いや、その、なんというか……君の顔、どっかで見たような気がする……」

「あら、ナンパならお断りよ」

「やや、そういっただけじゃないっての……」

綜夜の反応にプレシアはクスリ、と年齢不相応な色気を持った笑みをこぼす。

プレシアはにこやかな笑顔のまま、綜夜に手を差し伸べた。

「あなたの疑問については、まあ満足の行く回答ができると思うわ、納得できるかはともかくね。でも、今あなたは私より、お友達に会ってあげた方が良いわ、立てる？」

綜夜は納得が行かなさそうに首を傾げるも、プレシアの提案に素直に首肯した。

そして、プレシアの手を取ってベッドから立ち上がると、少々おぼつかない足のまま、ラグラスとプレシアに連れられ、部屋を出た。

（なんだか、奇妙な場所だな）

廊下を歩いている内に、綜夜はこの施設にそう印象を持った。

奇妙な内装で、牙の記憶の中にも無い。

苔や蔦に絡まれた石材で作られているであろう壁には、古代の文字が何かで淡く光る紋様が描かれている。

見ようによっては、古代の遺跡のようでもあった。

しかし先ほどまで綜夜がいた部屋や時折窓越しに見える部屋の内装は、まるで戦艦が何かの一室のような場所で、今歩いている廊下とは使用されている技術も文化も全く異なっていた。

過去と現在、そして謎が入り混じる、迷宮のような場所。

（この場所と言い、プレシアちゃんといい………なんというか、謎が多い展開だな、いやはや）

綜夜は正直今の状況にやや辟易しながらも、金髪の頭をポリポリとかきながら、今の状況を頭の中で整理しようと試みていた。

が、綜夜の状況把握よりも早く一行は、目的地であろう大きな部屋の中に入って行っ行っていった。

「綜夜……！」

部屋に入ると、真つ先に祝が綜夜の元へ駆け寄ってきた。

眼鏡をかけている彼女を見るのはいつ振りだろうか、と綜夜は思いながら、部屋を見渡した。

部屋の真ん中に幾つかあるソファーには、ゼロであろう黒髪の男が腰かけている。

「いつまで経っても起きないから、心配した……」

祝がわずかに瞳を潤ませながらつぶやく。

ラグラスは気にせず部屋の奥へと歩き、プレシアは祝の様子を一介してから、綜夜にクスリと悪戯っぽい笑みを投げかけてから、部屋の隅にある棚の方へ向かっていった。

綜夜は祝の頭を一、二度撫でてから、自分の無事を伝えるようにニツと笑って見せた。

「ああ、悪い、俺は大丈夫だから。他の皆は？」

「……」

綜夜の問いかけに、祝は俯いて黙り込んでしまった。

悪い予感が綜夜の胸を撫でる。

「まあ、とりあえず二人とも座りなさいな。紅月君には今の状況を教えてあげるから」

プレシアが湯気の立つコップを人数分載せた盆を持ちながら言った。それに頷くと、綜夜は祝と共に部屋の真ん中のソファに向かう。ソファの上には案の定ゼロが座っており、何やら古代ベルカのもいで書かれた古本を読んでいた。

「よう、ゼロ」

「無事なようだな、綜夜」

祝と共にゼロの隣に座りながら、そう短いやり取りを交わした後、綜夜はゼロの膝を枕にして眠っている、あの少女を見つけた。絶体絶命の危機に目覚め、七色の魔力を放った、あの少女だ。

「その子も、元気そうだな」

「ああ……」

ゼロは穏やかな寝息を立てている少女のブロンドの髪を優しくなでながら、少しだけ暗い顔をした。

コト、とコーヒーが入ったカップが、ソファの前にある背の低いテーブルに置かれる。

プレシアはそのうちの一つを手にとると、綜夜達が座るソファの反対がわにある椅子に腰かけた。

「さ、話を始めましょうか」

プレシアが言うと、綜夜は頷く。

「まず、ここについてだけれど、検討はつくかしら？」

「いや、まったく分からない。牙の記憶にもない場所だ」

「じゃあ教えましょう、ここはね、虚数空間の最奥……次元の狭間に在りし、忘れられた禁断の地　アルハザード……その一部よ」

「アルハザード」

綜夜はその言葉に驚愕する。

アルハザード　いくつもの伝説の眠る禁断の地。

ある者はその存在を夢と笑い、ある者は探求の答えをここに求め、そしてある者は、禁忌を犯してまでここにある禁断の果実へたどり着こうとする　しかし決して辿り着く事のない、夢幻の向こうにある世界　。

綜夜達は、今、その血に足を踏み入れているというのだ。

驚愕する綜夜をよそに、プレシアは続ける。

「そして、ここにいる紅月君の仲間“三人”……いえ、“四人”かしら」

プレシアは、ゼロの膝枕で眠っている少女を見やる。

綜夜がコーヒーに砂糖とミルクを入れながら言葉を発した。

「四人……？　祝ちゃんとゼロと、あの子で……今ここには三人しかいないぞ」

「ここにいます」

綜夜は、背後から聞こえた馴染みの深い声に、ハッと振り向いた。そこには、亜麻色のツインテールをぴよこんと揺らす、なのはがいた。

「なのはちゃんか！」

綜夜は嬉しそうに声を上げる。

なのはも、ニコリと元気のよさそうな笑顔で返した。

「訓練お疲れ様、なのはちゃん、どうだった？」

「え、えと……いつつもやってる特訓より疲れたというか、なんと
いうか……」

プレシアがなのはに声をかけると、なのははややどきまぎした様子
でそれに答える。

綜夜はそんななのはの反応にやや疑問符を浮かべるが、すぐに振り
払って、プレシアの方へ向き直った。

「ところで、君は一体何者なんだ？　ここがアルハザードだってい
うのは、とりあえず納得しておくとして、ここにはさっきのラグラ
スっていう奴のほかにも　」

「ああ、それには僕が答えるよ」

「は？」

綜夜はどこからともなく聞こえてきたその声に、思わず間抜けな声
を上げる。

「初めましてだね、ガーディアン 懺血の守護神。“冥府の王朝”は、君を歓迎す
るよ」

カツ、カツ、と靴音を立てながら、声の主は突如として現れた“階段”を下りて現れた。

現れたのは、少年だった。年齢は、見た目では言えばまだなのはその変わらないほどである。

だが、なのはと少し違ったのは、その少年が纏う風格はまるでそう、まるで“王”のものだった。

少年の後ろには、ラグラスもいた。

プレシアは、コーヒーを口につけながら、少年の方を向く。

「あら、それじゃあ頼もつかしら『セイギ』」

綜夜は、自らの理解の範疇をはるかに超えた何か、ゆっくりと動き出している事を悟った。

二二話『冥府の王朝 前篇』（後書き）

ラグラスとセイギのキャラが薄いしキャラが違う？

プレシアさんがなんか若作りしまくってる？

気にするな、俺は気にしない（言い逃れ）

あ、諸事情により、セイギとラグラスのプロフィールが載せられませんが、ごめんね！ 年明けには何とかしときます、では！

～次回予告～

冥府の王朝　そこで綜夜は“敵”の正体と、プレシアの秘密を知る。

その真実に狼狽えながらも、新たな誓いを立てる綜夜だったが、そこへ、警告を告げるアラームが鳴り響く！

現れた敵を迎撃するために、仲間と共に出撃するのだが　？！

次回、二十二話『冥府の王朝 後編』

災を狩る刃の切っ先は、どこへ向かう　？

一二話『冥府の王朝 中編』（前書き）

前後編使用になるといったな、あれは嘘だ。

てなわけで三部構成になってしまいました、良いんだ、俺は更新速度を（ry

今回は説明回ですが、どうにもちゃんと説明できているようには思えない……後で書き直すかも、多分やらんがな!!

一二話『冥府の王朝 中編』

「姿を見せるのは初めてだったね。まずは自己紹介から……かな」

茶髪の少年『セイギ』は階段を降りきつた後、どこからともなく現れた背の高い椅子に深く座り込んだ。

「僕の名前はセイギ、セイギ・ランデュル。“冥王”の名を継いでいる」

「冥王だって？」

綜夜は“冥王”という単語に反応する。その一方でゼロもセイギを横目で見やる。

セイギは少年である見た目に反して、かなり落ち着いた様子で頼杖をつく。

「まさか実在 果ては現在にその名を継ぐ者がいるとは思わなかったな」

ゼロが閉じた本を開きながら言う。

祝は何がなにやらまだよく分かっていないようで、不安げな瞳で綜夜を見た。

「冥王……って？」

なのはが思わず疑問の声を上げる。ゼロはペラペラと古本のページを捲り、あるページを開くと、なのはに本を投げ渡した。

いきなりの行為に驚きながらも、しっかりと本を取る辺りは流石な

のはと言ったところか。
ともかく、本を受け取ったのはは、本に書かれている一説を見つけた。

「彼の地に住まいし禁忌の一族。その英知は血を生み、肉を生み、自在に生命を生み出すと言われる。遅るべき力故に、世界を追われ、彼の地へと消えん。彼の者たちの名を、我等は畏れを込めて冥王と謳う……」

「……かつて古代ベルカで好んで詠われた詩……冥王の歌、ね」

プレシアがつぶやいた。セイギは小さなため息をつく。

「概ねその歌の通りさ。有り余る英知により畏れられ、追放された魔科学者集団の一族、それが冥王……。そしてここはその冥王の一族が住んでいた場所、アルハザード……君たちはここに“真実”を知りに来たんだ、そうだろう、ガイディアン守護神」

「ああ……らしいな」

「綜夜、どうということなの？ 風下さん達は……」

セイギの問いかけに、綜夜は大きくうなづいた。祝が不安に耐えかねてか、綜夜に問いかける。

「わ、悪い、そういえば説明してなかったな……。俺達があの“ライブラリ”とかいう化け物の前から逃げるのに、俺は懺血の守護神が使える最大の転移魔法を使ったんだ。下手な魔法だと振りきれないと思っただけだから」

「最大の転移魔法……?」

「ああ……その魔法は、なんつうか、簡単に言えば“運命”を手繰り寄せる魔法でな。その人間にとつて、“一番行かなきゃならない場所”や“成すべきことがある場所”へ転移させる魔法なんだ」

「つまり……俺達はアルハザードに、何かなすべきことがある、つてことか」

ゼロはやけに納得したように頷いた。

祝はスケールが大きすぎ来て着いて来れないのか、やや目を丸くして啞然としていた。

綜夜は、そんな祝を宥めるように言う。

「大丈夫さ、風下やラングたちは、それぞれが行くべき場所に行つたんだ。また近いうちに会えるよ」

「う、うん……綜夜が言うなら……信じてみる」

「ああ、頼む。……悪いセイギ、続けてくれ」

綜夜が説明し終わるのを確認すると、セイギは青い空を映す天蓋を、切なげな瞳で見つめながら言葉を再会した。

「だけどまずは、僕の生い立ちから知る必要がある。僕は冥王の一族の最後の末裔だ……僕は、本当はその事を知らずに生きてきたんだ……。知る必要も無かつたんだと思う……だけどあの日、あの日、僕は僕の呪われた血筋の運命さだめに捉われたんだ」

一同が、静かにセイギの言葉に耳を傾けていた。

「僕の家族は抹殺されたんだ……管理局に、ね」

「そんな……」

真っ先に声を上げたのは、なのはだった。

普段のなのはからは想像も出来ないほどに狼狽したその声は、彼女の感じた驚きを如実に表していた。

「嘘……管理局が、そんな……」

「嘘じゃない、真実だ。管理局は君が思っているほどクリーンな組織じゃない」

「……そんな……でも、リンディさん達は、私の知っている管理局の人は、そんなことしな……！」

「なんなら証拠を見せようか……？ 僕の家族の、死に際の記憶を……！！！」

抗議の声を上げるなのはにセイギは少しだけ声を荒げると、なのはをその紫色の瞳で鋭く睨みつけた。

その瞬間になのははがくりと膝を付く。綜夜は驚いて、思わずなのはの元へ駆け寄った。

「あ……ああ……っ……！！！」

なのはの眼前には、どんなおぞましい光景が広がっているのか。なのはの小さな肩はガタガタと震え、恐怖に汗と涙をじんわりと滲ませていた。

「う、嘘……こんな……ああ……や、め……て」

「お前……なのはちゃんに何しやがった?!」

恐怖に打ち負かされうわごとを呟くなのはの様子を見て、綜夜は怒りが爆発するのを感じた。

そしてその激情のまま、セイギに向かって叫ぶ。セイギは仄かな怒りの火が籠った瞳で、その激情の炎を見返した。

ゼロや祝もまた、セイギに向けて警戒の視線を向ける。

一触即発の空気が流れる。

「……皆やめなさい　争っている場合じゃないのは、分かっているでしょう?」

その空気の中で、気高い一声を上げたのは、プレシアであった。

プレシアの声に一番ハツとしたのは意外にもセイギだった、セイギはすぐに綜夜から視線を逸らすと、もう一度なのはを見やる。

すると悪夢から覚めたように、なのははハツと正気を取り戻し、周囲を見渡した。

「い……今、のは……?」

しかし心の底から恐怖した感覚は、今も痺れ毒のようになのはの心を縛り付けているようだった。

だが、なのはは震える瞳でセイギに問いかける。今自分が見せられたビジョン　その意味を知るために。

直視しがたい擬似的な“死”のビジョンを見せられてなお立ち上がるなのはの様子に、セイギは驚いたように目を見開く。

「言っただろう。君に見せたのは……僕の家族が死に際に見た物……
…真実だ」

「そう……ですか……」

フラフラと綜夜に支えられながら、やつとの思いで立ち上がるのは。

だが立ち上がったことには既に、なのはの瞳からは恐怖が消え失せ、
強き意思の光が弱弱しくも確実に灯り始めていた。

「私は……セイギさんの見せた物が、真実だとは思いたくありません
ん……管理局を、私の仲間たちを信じているから……」

「……」

その強気石の光を宿した瞳が、セイギを見た。セイギは思わず押し
黙る。

「それでも、これが真実なら……本当に、管理局に悪い人がいるの
なら……私は戦います……そのためにも真実を、私の真実を見極め
てみたい……！」

「高町なのは……君は……」

セイギはなのはの言葉に、いつの間にか自分が圧倒されていること
に気づく。

いや、正確にはなのはの言葉ではない、彼女の内に秘められた魂
に、高潔な正義の魂に惹かれ、圧倒されていたのだ。

「だから……教えてくださいセイギさん……私達が戦うべき相手を

……!!」

「……ああ……分かった……」

セイギはいつの間にか、この少女の言葉に、瞳に強く頷いていた。

セイギの代わりにラグラスが機器を作動させる。

すると、綜夜達が改めて着席したソファは円卓となり、その中心に何やらホログラムで図式が現れた。

「 単刀直入に聞く。君達は“ライブラリ”という存在を知っているか? 」

「……知ってるのか? 」

ゼロが意外なセイギの言葉に驚いたような反応を見せた。ラグラスがそれにこたえる。

「ああ、僕達は奴を追っているからね」

「そうだ、だが、奴について分かっていることは少ない。いつ生まれたのか、いつ計画を始めたのか だが、奴が強力で強大な魔力と権力を持っていることはだけは確かだ」

「俺達も、実際に対峙したが“得体の知れない奴”としか言いようがないな」

ライブラリ　ここに来る前に対峙した、謎めいた暗黒。

強大な力を以てして、綜夜達を全滅寸前にまで追い込んだ、巨大な邪悪……。

懺血の守護神たる綜夜からしても、あの力は異常極まりない、狩るべき災としては稀に見る“大物”であった。
ゼロの後に、綜夜が口を開く。

「進化がどう、とか言ってたな」

「進化……？」

これは初耳だったらしい、セイギとラグラス、そしてプレシアが興味深そうな反応をした。

「ああ……“全てを見、全てを知り、全てを産み出し、そして滅ぼす者“管理者”へ”……だったかな」

「管理者……だから管理局を利用しているとも……？」

思わず、プレシアが考え込んだ。
次に口を開いたのはラグラスだ。

「ライブラリがどこにいて、どんな組織に所属しているのかは分からない、ただ、奴は管理局を利用しているんだ」

「つまり……？」

「奴はどうやってか、管理局員……とりわけ、オーガニックディメンションウエポン 辺境世界に所属している部隊の隊長を利用して、手駒を オーガニックディメンションウエポン O D Wを増やしているんだ。管理局の施設を利用して、ね」

ラグラスがそこまで言うと、中心のホログラム映像が切り替わり、何やら生物のようなものを映し出す。

そこに映し出されていたのは、綜夜達が今まで戦ってきた、あの怪物たちであった。

「こいつ等……！！」

「そう、この怪物達がO D W……オーガニックディメンションウエポン 生体次元跳躍兵器だ。その反応だと、君たちも戦ってきたみたいだね」

「この……えと……O D Wは、どういう兵器なんですか？」

祝がやや発音にて惑いながら聞く。

セイギがプレシアを小突くと、プレシアはサツと顔を上げ、一つ咳払いをした。

「私が説明するわ。O D Wはつい最近開発された生体兵器よ、従来の物よりもずつと強力で知的な……ね。でも、注意すべき点はそこじゃないわ。最大の特徴は、単体での次元跳躍　つまり、世界間での移動を扱える、と言う点にあるの」

その説明に、セイギが補足をする。

「やろつと思えば、何の前触れもなく数百、いや数千という数での奇襲を行うことだってできる……」

「そんな物が……」

「だから僕たちは、ODWの増加を防ぐために、ODWを生産している管理局支部を風潰しに破壊しているんだ。もつとも、焼け石に水のような気もするけど……」

ラグラスが深いため息をついた。

戦況はそこまで芳しくないようだ、綜夜達もわずかながら不安を抱いた。

そうしていると、徐にゼロが口を開く。

「一つ、疑問がある」

「？」

「なぜ、ODWが作られたのが“最近”だと分かるんだ？ ライブラリの計画がいつ始まったのか知らないんだろう、それなのに何故手駒の出自だけは分かる？」

「細かい所に……気が付くのね……」

「っ……」

ゼロの指摘にプレシアが視線を落とす、なのははやや動揺した様子でプレシアを見る。

プレシアはそんなのはと目を合わせると、憂いを帯びた笑みでフツと笑いかけ、小さく頷いた。

「良いわ、説明しましょう……もつとも、セイギ達や高町さんだけには、もう説明してあるのだけれど……」

プレシアが説明を始める。

「ODWには、二年前に開発された技術が使用されているわ。紛れもなく、ODWが完成したのはその技術あつてのこと……」

二年前　それはなのはが初めて魔法と出会つたあの年、全てが、動き出した年だ。

綜夜の中で、疑問の歯車がカチリと噛み合う音がした。

「その技術の名前は『F・A・T・E』……そして、開発者は『プレシア・テストロッサ』……」

「P・T事件……」

綜夜は思わず呟く。

なのはやフェイトから、言伝にしか聞いていなかったが良く覚えていたあの事件の名を。

一人の女性が、亡き娘を蘇らせようと禁忌に手を出した、その事件の名を。

綜夜は抱いていた疑問の歯車が、完全に噛み合った音を心の中で聞いた。

「まさか……!!」

「ええ、私とその科学者　プレシア・テストロッサよ」

「そんな馬鹿な……!!　あの事件でアンタは死んだって……!!　フェイトちゃんが……!!」

綜夜は驚きに、思わず声を荒げた。

「……………そうね、そうだった方が、良かったのかも知れないわ……………」

プレシアは綜夜の反応に、胸に手を当てながら答える。

そして、言葉を続けた。

「私は、全てが終わったあの時、あの娘と……………アリシアの遺体と共に、この虚数空間へ落ちて行ったわ……………私も、病によって長くはなかった……………けれど、虚数空間に漂う私を、冥王……………セイギが回収してくれたの」

プレシアはふとセイギの方を見やる、セイギはうん、と小さく頷くだけだ。

「その時、私は意識がなくて、半分死んでいたような物だったのだけれど、アルハザードの技術で　そう、私が求めてやまなかったその技術で……………」

そして、プレシアは、ゆっくりと　。

「私の意識と記憶は……………新たな体に……………」

その真実を、まるで懺悔するかのように　。

「そう……………私の娘　アリシアの体に移されたわ。そして私は“生き返った”の、娘の体で……………ね」

口にした　。

一二二話『冥府の王朝 中編』（後書き）

なのはちゃん原作主人公補正が掛かりまくっとなります、今のままだと正直綜夜いらねえ。

綜夜「おいこら」

まだまだキャラ募集やっとなります、来たれ！

〜次回予告〜

冥府の王朝　そこで綜夜は“敵”の正体と、プレシアの秘密を知った。

その真実に狼狽えながらも、新たな誓いを立てる綜夜だったが、そこへ、警告を告げるアラームが鳴り響く！

現れた敵を迎撃するために、仲間と共に出撃するのだが　？！

次回、二十二話『冥府の王朝 後編』

災を狩る刃の切っ先は、どこへ向かう　？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8493s/>

魔法少女リリカルなのは～懺血の守護神（ガーディアン）～

2012年1月5日01時31分発行